
東方医療録

ヘタレ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方医療録

【Nコード】

N2112V

【作者名】

ヘタレ

【あらすじ】

医者を目指す男がいた。世界から隔離された小さな世界があった。男は力を持っていた、小さな世界に必要な力を。そして物語は紡がれ始める……。

東方紅魔郷からの話。勝手な解釈、設定等があるので苦手な方にはお勧めしません。

其の壱（前書き）

初めまして。

知っているかたはいないかと思えますので少し自己紹介を。万年ヘタレ、生涯勇気を出して奮い立つ事の無いであろうヘタレと申します。

至らぬ所しかないかと思えますのでどうか温かい純粋な目で見ていただけたら嬉しい限りです。

では、しばし短い幻想をご覧ください。

其の壱

俺、桜井勇輝は医者を目指す普通の学生だった。

強いて違つところを上げるなら、父親が闇医者だったことだろう。医師免許も無いのに腕だけは確かな物だった。

何故それほどの腕を持ちながら闇の世界でのみ振るつたのは分らないが、尊敬できる父親だった。

何故過去形なのかと言うと、二度と会うことは無いだろうから。

俺は、もう死んでいるだろうから。

今朝の事だ。いつも通り学校へ通う道を歩いていた。そこで運悪く通り魔に襲われた。

重なった偶然により命を落とすのはあまり気分の良いモノではない。実際に未練は腐るほど残っていた。

真つ暗な空間で、通り魔に刺された傷の辺りから力が抜けていくように感じた。死という、生きている内は味わう事の無い感覚。どうしてだろう、恐怖より興味の大きい。

死者の魂はどこへ行くのか。この意識はどのように消えていくのか。止まる事の無い思考はより鮮明になっていく。

……鮮明に？

勇輝は弾かれたように起き上がり、目を開ける。

目に写るのは緑。草木で埋め尽くされた景色。

だが、刺されたのはコンクリートの道の上だった筈だ。少なくともこんな森の中にはない。

「ここは……？」

そして、ふと気づく。刺された傷が塞がっている事に。

しかし、夢だったという事はないだろう。現に血の痕はべっとりと服に残っている。

このままでは気持ちが悪い。仕方ないので、バッグの中から着替えを取り出して服を変える。

こんな森の中で白衣を着るのはどうかと思ったが、血だらけでいるよりは遥かに良いだろう。

足もすっかり動く。貧血という事はない。

まずは人のいる場所へ行かなければならない。かといって歩き回って森の中で迷って遭難しては死を待つだけになるかもしれない。

最悪、薬草なら分かるのでそれで餓えを凌げばよいので迷わない事に重点を置こう。

持ち歩いているメスを一つ取り出し、一番近い木にバツ印を着けた。

歩き回って数時間、少し小さな湖を見つけた。

日も落ちはじめているし、今日はここで火でも焚いて過ごそう。これほどの規模の森だ、熊や野犬ぐらいいるだろう。

荷物を置き、薪にするための枝を集めようとして湖に背を向ける。

「ねえ、アンタもしかして人間？」

後ろから人の声がした。少女のものだ。しかし、勇輝の背後には湖しかない。

恐る恐る振り返り、声の主を確認する。

そこには、青いワンピースのような服を着た氷の羽のようなものを持つ少女が湖の上、空中に浮いていた。

其の壱（後書き）

一話？プロローグ？まあ、導入の導入のような話になりますね。実は東方projectは一部キャラの名前すら正確に分からないのですが始めさせていただきました。

STGやwikiや他の作者様を参考にし、精一杯書かせていただきますので、お付き合いいただければ幸いです。

投稿サイトを使うのは初めてなのでとりあえず1000文字程度にしたのですが、長い短いがあったら言って下さると助かります。

このような拙い文章に目を通して下さりありがとうございました。

其の弐（前書き）

前回のあらすじ

主人公は刺されました。

其の貳

つまりは、そういう事らしい。

目の前の少女は人外存在。そして、こちらはただの人間。

だから冷静に、敵意や恐怖を抱かぬように対応する。

「ああ、人間だよ。君は何なのかな」

「あたい？ あたいは幻想郷でさいきょーの氷精よ」

少女は腰に手をあて、胸を張って言う。

幻想郷、氷精。意味は推測できるが現実味の無い事に変わりはない。

まず氷精。氷の妖精、精霊のどちらかだろう。

次に幻想郷。この土地、または世界を指す言葉。

「そうか、じゃあこの幻想郷で最強の君はこの近くで人の住んでいる場所へ俺を無傷で連れていく事が出来るかい？」

言動から察するにこの子は見た目に違わぬ精神だ。こうやって挑発を混ぜた要求には乗ってしまうだろう。

「とーぜんよ！ あたいはさいきょーだからカエルだって鬼だって凍らせられるんだから！」

「そうか、頼もしいな。けどもつすぐ暗くなるから明日日が上つてからでも良いかな？」

さすがに夜の森を歩くのは無謀だ。月明かりも差し込まない漆黒の森は猛獣の絶好の狩場といえるかもしれない。

「分かった。アンタはそれまで何するの？」

「寝るのは危険そうだからここでじっとしているよ。君は朝まで好きにしていってもらって構わない」

実の所、色々と考えて置かなければならない。

出所の分からない人物を簡単には受け入れてもらえないだろう。

幸いにも、医療に関わっている分交渉の余地はあるが、確実ではない。

この幻想郷という場所がどのような所か分からない以上は迂闊に気を許せないだろう。

もしかしたら、人間といっても特別な存在かもしれない。

人外が存在が普通にいるのだ、魔法使いや剣を振り回す騎士がいてもおかしくは無い。

バッグの中を探り、何か使えそうな物は無いか見る。

バッグの中には血のついた服、医学の参考書、救急箱、眼鏡、昼に食べようとコンビニで買った菓子パン、父親から貰った医療器具。

そういえば通貨は大丈夫だろうか、恐らくは別世界だろうし使えない可能性が高い。

携帯も使えないだろう。少なくともこの森の中では。

そして、さっきからずっとこちらを見ている少女の扱いはどうしたら良いのだろうか。

「えっと……、まだ何か用かな？」

「それって何？」

少女が指差したのは菓子パンの入った袋。

「ああ、これはパンだよ。チョココロネって言うんだけど食べたこと無いのかな？」

「無い。あたいは天才だけど見るのも初めて」

なるほど、少なくともこの子の知る限りではチョココロネは幻想郷に無いらしい。

そういえば言葉も通じているので、昔の日本とでも考えておけばいいのかもしれない。

少女はじつとチョココロネを凝視する。

「もしかして食べたい？」

少女が首を縦に振るのに時間はかからなかった。

勇輝の隣に座り、少女は幸せそうにチヨココロネを頬張る。

「これすごくおいしい！　どうやって作ったの！？」

「いや、俺は作れないんだ。君は名前とかってあるのかな？　いい加減、君って呼ぶのはどうかと思うんだけど」

「あたいはチルノだよ」

口のまわりにチヨコを浸けたまま少女、チルノは答えた。

「チルノ、か。俺は桜井勇輝、勇輝で良いよ」

しかし困った。これで何も食べずに朝を迎えなければならない。

生憎、魚は捕ることも調理することも出来ないので湖を前にして希望が持てる訳でもないのだ。

隣ではチヨココロネを食べ終えたチルノが満足そうな表情を浮かべていた。

口のまわりにチヨコがついたままなので、布で拭いてやる。

「ん…。そうだ、勇輝はやっぱり“外”から来たの？」

外というのは幻想郷の外という事だろう。

「よく分かったね。流石天才」

「そうそう、あたいは天才だから何でも分かるのよ」

先程チヨココロネが分からなかった奴の言う台詞だろうか、知らなくて当然なのかもしれないが。

「少し聞きたいんだけど、幻想郷って人間はどれくらいいるのかな？ やっぱり少ない？」

「十人くらいだと思う。はくれないの巫女とか魔法使いも入れて。他はあたいみたいな妖精や妖怪。あとは幽霊とか」

幻想郷。つまり幻想が具現化する場所と言ったところだろうか。

これなら医者への価値は上がるだろう。怪我をする機会も多そうだ。

「じゃあ、何で俺が外の人間と思ったんだ？」

「その格好だよ。幻想郷では見たことないから、もしかしたらって思ったの」

チルノの発言に思わず笑みを浮かべていた。

これで決まったも同然。幻想郷には医者はいない。

これでしばらくは衣食住は確保できそう。後は元の世界に帰れるかどうか。それを探さなくてはならない。

翌日、チルノに案内される家…いや、館にたどり着いた。

それは紅い館。鮮血にも似た紅で染められた魔の館。

其の弐（後書き）

チルノのターンは終了いたしました。

其の参(前書き)

前回のあらすじ

?に食べられました

其の参

紅い。とにかく紅い。

チルノの案内で屋敷が見える場所まで来たのだが、正直遠くても良かったから他の場所にしてほしかった。

これから、迷いこんだ外来者を突き通さなければならない。

チルノと会った事も伏せておこう。あくまで無知を貫かなければ面倒に巻き込まれるかもしれない。

紅い館に近づくと、壁に囲まれている事が分かった。

どこかに門でもあるのだろうか、壁に沿って歩いていく。

「……………」

門らしき物を見つけ、そこに向かって歩いていく。

そこには女の子が寝ていた。

「……………」

開いた口が塞がらないとはこういった時の自分の状態を言うのだろう。

見たことの無い緑色の服に赤い髪。容姿はかなり良いがどこか残念なオーラが感じられる。

「あの、ここの館の方ですよね……？」

「……もう、それ以上は……食べら、れ……ない」

定番、なのだろうか？

起こしてまで入るのはどうかと思うが、行き倒れては仕方ない。

「すみません。少し聞きたい事があるので起きてもらっても良いですか？」

肩を軽く叩いて呼び掛ける。返事が無い。

「……仕方ない」

寝ている少女の鼻を摘まみ、口を葉っぱで塞ぐ。

かなり非道な起こし方ではあるが、面識の無い相手に水をかけたり叩き起こす訳にはいかないだろう。

待つこと60秒。

「んん！？ んーッ、ぶはっ！」

「おはようございます。目覚めは最悪でしょうね」

急いで距離を取り、自分は何もしていないという態度をとる。

「あゝ、死ぬかと思いましたあ。ん？ お客さんですか？」

「気づいたら森の中で倒れていて、ここが見えたので。良ければ街に案内していただきたいのですが……」

本当はこの館に世話になろうと思ったが、嫌な予感しかない。

ここは早慶に立ち去るべきだろう。

「そうですか、大変でしたね。でも私は門番なので出かける訳にはいきませんし……。そうだ、咲夜さんに聞いてますから待っていて下さいね」

騒がしい人だった。

こちらの返答を聞きもしないで館の中に駆け込んでしまった。

かといって今更後には引けない。待つことにしよう。

「あの、連れてこいとの……」

戻ってきた少女の額には切り傷があり、血が垂れていた。

思わず顔をひきつらせてしまったが、少女はそれに気づく余裕が無
いようだった。

広い、そして不気味だ。

少女、紅　美鈴に案内されこの紅魔館へと入ったのだが先程から違和感が拭えない。

「美鈴さん、ここって何人の人が住んでいるんですか？」

そう、人が見当たらないのだ。

外から見た限りでは、少なくとも50人…その半分以上は人間ではないかもしれないが、とにかくそれだけの規模があった。

しかし、紅魔館の中で人とすれ違う事は一度もしていない。

「人間は一人ですね、人数なら六人です」

つまり、残り五人は妖怪か何からしい。

人数という事は、少なくとも人の形をしているという事。

「あの……人間が一人で人数が六人ってどういう事ですか」

そう、俺は妖怪の存在を知ってはならない。あくまで、無知な外来者を演じる。

「説明はお嬢様がするので。あ、こちらです」

目の前にあるのは大きな扉。高さは二メートルちょっとぐらい。

美鈴さんは門番の仕事に戻らないといけならしく、さっさと退ってしまった。

扉をノックして、手で押して開ける。

「……失礼、します」

この扉に触れてから妙な悪寒が走る。

この中に入ることを本能が拒絶しているのだろうか。冷や汗が頬を伝う。

半分だけ開けた扉から中に入り、自分を招待したであろう者達に視線を向けた。

「ようこそ、紅魔館へ。私がこの主、レミリア・スカーレットよ」

視線の先にいたのは二人の少女。

今口を開いた少女は、見た目は十歳かそこらに見える。しかし異形、その背には人にはある筈の無い一對の翼があった。

もう一人は、メイド服を来た一見普通の少女。見た目で推測出来る年は同じか少し下だろうか。

「……初めまして。桜井勇輝と申します」

名前を名乗り、軽く頭を下げる。ここであの二人の機嫌を損ねるのは得策ではない。慎重にしなければ。

「へえ、驚かないのね。突然だけど勇輝。あなた、血液型は？」

……いや、それって四分の一か三の確率で殺されるのでは？

容姿、今の質問からしてレミリアは吸血鬼。気に入らない血液型なら殺す。または気に入っている血液型なら食糧とするのどちらかだろう。

しかし偽ったところで後からバレるに決まっている。

「B型です。自分で採血して調べて事もあるのでま間違い無いかと」

レミリアはそれを聞くと、僅かに笑みを浮かべる。

「そう。それで何故勇輝はこの幻想郷へと来たのかしら？」

「自分でもよく分かりません。目が覚めたら森の中でしたから」

射抜かれるような視線に耐えながら勇輝は告げた。

「なら行く宛もないでしょうし構わないわね。桜井勇輝、この紅魔館で私の従者として働きなさい」

其の参（後書き）

キャラの口調などについては、各自脳内変換にて修正お願いします。

其の肆（前書き）

前回のあらすじ

中国に案内されました。

其の肆

「従者、ですか」

「ええ、もちろん衣食住は保障するし好きに暮らしてもらって構わないわよ。仕事さえしてくれたらね」

「仕事ですか、俺が役に立つような仕事場は紅魔館にはあるとは思えませんが」

それに、個人的な意思でも自分の分野をまるで活かせない仕事は御免だ。

せっかく医者として生きるためのスキルを学んでいたのだから、そういった役職に望みはある。

「では、勇輝には何が出来るの？　そしてそれは当然他よりも優れているのよね？」

正直、自信は無い。

父の仕事を間近で見っていた。時には手伝う事もあった。だが、同職の人間よりも優れていると過信したことはない。

「僅かなことかもしれませんが、医療に携わっていました。そこらの一般人よりは知識も腕もあるかと。この紅魔館で役に立つ技術かは分かりませんが」

「ならそれは捨てなさい。雑用が出来て血が吸えるなら十分だから」

レミリアの言葉に思わず拳を握りしめ、齒を食いしばって睨み付けてしまう。

今までの努力を否定され、必要無いと切り捨てられて。

だが、ただの人間である自分が吸血鬼に抵抗したところでどうなる。待っているのは死だけだ。

「……分かりました。従者として働かせていただきます」

自らの感情を押し殺して答えを出す。

「不服そうね。でも諦めなさい。この幻想郷で怪我や病にかかる事はほとんど無いわ、医者が必要になる事なんて何十年に一度かしらね」

レミリアの言い分はよく分かる。しかし、昔からの目標は簡単には諦められない。

「ええ、諦めますよ。“必要にならない限り”は、ね」

挑発とも受け取れる発言。しかしレミリアは楽しそうに笑った。

「咲夜、勇輝に部屋を一室。それと紅魔館の案内をして、適当な仕事を与えなさい」

「分かりました。お嬢様」

レミリアの隣に立っていたメイド……咲夜で合っているのだろうか。その子がこちらに向かって歩いてくる。

「私は十六夜咲夜。桜井勇輝で良いのよね、部屋に案内するから着いてきて」

こちらの返答を聞かないで咲夜は部屋を出ていく。少し予想外な行動に慌てて、後に着いていく。

今の広い部屋を出て、数分歩いたところにある部屋。そこに勇輝は案内された。

部屋の印象は普通に綺麗、ベッドにテーブル、クローゼット。生活に必要な物だけを置いただけのようだ。

「食事は広間、入浴は浴場、トイレ何かは適当に探して。他にも案内するから荷物を置いて早く来なさい」

嫌われているのかと思うほどやつつけ仕事のように扱われている気がする。

バッグをベッドの上に放り投げて、咲夜の後に着いていった。

「貴方が入っていいのはキッチンや広間、掃除を申し付けられた場所。絶対に入っちゃいけないのは私達の部屋、図書館、地下。それと、無闇に外に出るのも禁止。妖怪に食われて死にたいならどうぞ」

「分かった。部屋は分かるけど図書館と地下に入れない理由は？」

「図書館にはパチュリー様がいるし、地下に入ったら間違いなく貴方は死ぬわ」

化け物でも彷徨っているのだろうか。

そんな事を考えていると咲夜がその答えを告げる。

「地下にいるのはお嬢様の妹、あまりにも強すぎる力と、不安定な精神を持っているからお嬢様が軟禁しているの」

「なら死ぬそうに無いかな。俺は仮にも医者を目指してた、そういつた患者への対処法も学んだしカウンセリングの経験もある」

「近づいた瞬間に殺されるかもしれないから止めておく事ね」

あっさりと切り捨てられた。

「それで、紅魔館にはどれだけ働き手がいるんだ？ この広さで咲夜だけとは思えないけど」

「妖精メイドが数十匹。正直、今更人を増やすのもどうかと思うぐらい手は足りてるわ」

「じゃあどうして俺が？」

「血を貰うためよ。人里まで行って献血をしにくるのにも限界があるの、だから身近に血を吸える人間がいた方がいいでしょ」

「人間は俺以外にも一人いるって聞いたけど」

「それは私。吸血鬼は異性の血しか吸わないらしいの。転生しても血を捧げたいとは思ってたけど出来ないから仕方ないわ」

転生してまでやることではないと思うが、あまり触れないでおこう。

「じゃあもう一つ質問。万が一、俺が逃げ出した場合の対処は？」

「それは……」

咲夜の姿がそこから消えた。そして、後ろからナイフを首筋にあてられている事に気づく。

「こつやつて、脅して連れ帰るしかないんじゃないの？」

「了解。馬鹿な真似はしないでおく」

冷や汗をかきながらもそう答える。どうやら人間でも普通じゃないらしい。

「今のは時間を止めたの。私の力は“時間を操る程度の能力”、使い勝手が良さそうでしょ」

「なるほど、確かに使えそうな力だな」

程度とついているが、十分すぎると思うのは気のせいだろうか。

とりあえず、回りに普通がないという生活を送っていかなければならないようだ。

其の肆（後書き）

とりあえず多くの人に見ていただけているようなので感謝してます。
もう口調とか性格とか本当に残念ですけど、まあ仕様ということで
勘弁して下さいと助かります。

其の伍（前書き）

前回のあらすじ

紅魔館に雇われました。

其の伍

紅魔館で働き初めて三日、勇輝は与えられた部屋で参考書に目を通していた。

時間はまだ昼過ぎ、咲夜は働いている。

何故、仕事が回ってこないかという勇輝の家事スキルが絶望的に低かったためだ。

料理は出来ない。掃除は中途半端、選択は布を伸ばす。

よっているよりいない方がマシだと言われ、こうして部屋に閉じ籠っている。

本を閉じて、鉄格子のはめられた窓から外を見る。

紅魔館で窓のある場所は珍しい。レミリアが日光に弱いからだ。

「……暇だ」

血は何日分か蓄えがあるので不必要らしく、仕事もない。

これでは家畜だ。何か役に立つ事をしなければ。

自然と、意識は地下室に向いた。

レミリアの妹、精神が不安定らしいが実際のところはどんなのだらう。

軟禁で済んでいるということは、殺人鬼のように狂っていないという事だろう。

となると、回りの全てが敵に見える被害妄想者あたりといったところか。

それなら、時間をかけて治すことは可能だ。

ベッドから降りて部屋を出る。

このまま食糧として過ごすのは嫌だ。そして家事では役に立たない、逃げるにしても不可能だし何より行き先が無い。

考えながら歩いていると、地下室への階段にたどり着いた。

確かに嫌な予感がする。ここから降りたら二度と日の光を拝めないような気が。

しかし、一度刺されて死んだような身だ。このまま家畜のような生活を送るより危険な場所へ赴いて変化を求めるのも一興だろう。

階段を一段ずつ降りて、地下に降りる。

蠟燭の日だけが頼りの、少し広めの廊下。高さは四メートル、幅は六メートル程だろうか。

蠟燭は替えているのか減らないのかは不明だが、消えているものは無いようだ。

別れ道も扉も無い一本道、その奥へ奥へと進んでいくと、突き当たりにつだけドアがあった。

金属製の重々しい雰囲気が漂うドアのドアノブに手をかける。

これを開ければ、ただでは済まないのだろう。

しかし、勇輝は変化を求め、その重いドアをゆっくりと開けた。

「？ …… 貴方は誰？」

中にいたのはレミリアと同じような幼い少女。

背には奇妙な形の翼があるが、とても飛ぶために使う物とは思えない。

「初めまして。数日前からこの紅魔館でお世話になっています。桜井勇輝と言います。お嬢様には妹様がいらっしやると聞いて挨拶に来させていただきました」

現段階では、精神的に問題は無いように見える。

「ふーん、そうなんだ。それじゃあフランと遊んでくれる？」

大体の予想はつく。

断れば殺される。受けても死と隣り合わせな遊びなのだろう、ロシアンルーレットよりも生き残る確率の低い。

「構いませんよ。しかし、その前に少しお話をしましょう。楽しく

遊ぶためにはお互いに仲良くならないと」

「そうなんだ。でもお話って何を話すの？」

「まずは自己紹介しましょう。こちらはさっき名乗りましたので、貴女の名前を教えてください」

実はさっきから冷や汗が止まらない。話し方や外見からはとても危険など無いように見えるが、本能的な感情では今すぐにここを逃げ出したい気分だ。

「フランだよ。フランドール・スカーレット」

「ではフランドール様。少し注意していただきたい事があるので説明しますね」

「まだ話すの？」

「あと少しですよ。始めに言っておきますが、俺は人間です。フランドール様とは違い、脆く弱い存在。だから、力比べのような遊びはすることが出来ません」

「それじゃあどうやって遊ぶの？　もしかしてフランを騙した？」

一気に悪寒が走る。

ここで引いたら殺される。そう思っ言葉が続けた。

「いえ、フランドール様には違った遊びを楽しんで頂こうと思っています。少し紙とペンをお借りしても良いですか？」

フランは不満そうながらも頷き、机から紙と……クレヨンを持ってきた。

勇輝はそこに、黒い人と白い人。川に船を描きフランに見せる。

「ちょっとしたゲームですね。この迷路を解いてみて下さい。ただし、紙を破ったり何かを描き足したりしてはいけません。そうですね…三十分かけてもからなかったら答えを教えましょう」

「ただの迷路でしょ？　ならフランでも簡単に解けるよ」

そう言つてフランはスタートの場所から迷路の道を指先でなぞり始める。

五分かけて、出来る限り複雑に描いたが普通の迷路だと思っている限り絶対に解けない。

五分が過ぎた。フランはまだ迷路の道を指先でなぞっている。

十分が過ぎた。フランは紙を裏返したり上下を入れ換えたりしている。

二十分が過ぎた。

「無理っ、解けないよ」

諦めたようだ、しかしまだ十分残っている。

「そうですか、ではヒント……というよりちょっと残念なお知らせ

をしましょう。その迷路、スタートからゴールまで普通に繋がっている道は一つありません。頑張って裏技を見つけて下さい」

「……狡いよね、それ」

簡単すぎるものを出されても面白くないでしょう？という言葉に納得したフランだが、残り十分。ゴールまでたどり着くことは出来なかった。

「では正解を教えましょう」

勇輝は紙を折り始める。一度は谷折りで半分に、さらにその半分を更に半分の山折りに。すると…

「あ、道が出来た」

「さすがに無理がありましたかね。ルールは紙を破らない事、折っていけないとは言っていない」

もしかしたら卑怯と言われ、何かされるかと思ったがそんな事は無かった。

「ねえ！ 他には！？ 他には面白いのある？」

どうやら気に入って貰えたらしい。飽きるまでは殺されないか。

とりあえず見ていた感じでは、精神が幼く自分の力の強さを意識していない……いや、相手を殺す事などに罪を感じていないといったところだろうか？

つまり一般常識を叩き込むだけで良い。以外と楽そうだ。

其の伍（後書き）

ああ、もうなんか適当に……

其の陸（前書き）

前回のあらすじ

役立たずはフランのおもちや

其の陸

結局、フランに解けたのは最後の一案だけだった。

二十近く出したが、どれも難しかったらしい。

「解けたよ！ねえ、凄い？」

「はい。フランドール様はとても賢いですね。凄いですよ」

もう地下室に来て四時間程過ぎた。そろそろ戻って言い訳の一つで
もしないといけないだろう。

時刻で言えば夕方の六時、夕食の時間だった筈だ。

「フランドール様、申し訳ありませんが俺はそろそろ戻らなくては
いけません。レミリア様に怒られてしまうので」

「……フランを一人にするの」

「しませんよ。今回は挨拶だけという事だったので許可を貰わな
くはいけません。フランドール様の遊び相手になる許可を」

それでも、フランは納得がいけないといった表情になる。

「明日も来ます。約束しましょう」

そう言って小指を出す。

「何それ？」

「指切りです。絶対を守る約束をする時に使うものですよ」

やり方を教えて、指切りをする。

「ではまた明日。次はもう少し解きやすい問題を考えておきましょう」

地下室の扉を開け、階段へと歩みを進める。

「言い訳を聞こうかしら」

地下から上がってきた所を妖精メイドに見つかり、光の球をぶつけられて気絶。気がついたら最初に案内されたあの部屋にいた。

「衣食住を確保していただいているのに何もしないのでは申し訳ありません。ですので、せめて話に聞いていた妹様の遊び相手になるうかと」

その言葉を聞き、レミリアは一瞬驚いたような、信じられないという表情を浮かべる。

「スペルカードの一枚もないただの人間がフランと弾幕ごっこをしていたの……？いえ、それにしても静かだったし……」

スペルカード？弾幕ごっこ？聞き慣れ無い、というか聞いた事がな

い。

「失礼ですが、スペルカードとは何でしょうか？ちなみにフランドール様とは温厚にクイズで遊んでいただけです」

「フランがクイズ……想像できないわね。スペルカードというのは幻想郷での揉め事や争いに白黒つけるために使う札の事よ。最近は廃れてきたみたいだけど」

つまり、決闘的なものということか。

「弾幕ごつことは？」

「スペルカードを使った決闘の事。ちなみにフランはこれしか遊びを知らなかったわ」

つまりアレだ。死ねる確率は十分にあつた訳で原因の六割近くがレミリアにある。

「他の遊びを教えればよかったものを……。別に時間がなかった訳ではないのでしょうか？」

「聞かないのよ。勇輝は運が良かったわ、咲夜は初めてあの部屋に入った時いきなりスペルカードルールで戦う羽目になったから」

死ななくて良かった。本当に死ななくて良かった。

弾幕は何回か見た、妖精メイドが紅魔館に入ってきた野犬のような何かに向けて放っていたり、野犬のような何かの侵入を許した美鈴に放っていたり。

そして、先程も威力が低いものだが自らの身を持つて受けた。かなり痛い、ボウリングの球を投げつけられたぐらいに。

「それで、勇輝は今後どうするつもりかしら」

「明日も行く約束してしまいましたし、お嬢様が許可さえ下されば教育係くらいは勤めることができるかと」

むしろ行かないと次に会ったときに弾幕で…。これ以上は考えないようにしたい。

「良い忘れていたけど幻想郷に住んでいる妖怪はそれぞれ力を持っているわ。少ないけど人間も、咲夜が良い例ね。私は“運命を操る程度の能力”、フランは“ありとあらゆるものを破壊する程度の能力”。少しは自分がどれだけ幸運な状態が分かったかしら」

咲夜の時と思うが、何故“程度”とつけたがる。全知全能でも求めているのだろうか。

「それはお嬢様が俺を死なないようにしたのでは？」

「さあ、どうかしらね…」

とにかく、運が良かった事に変わりはないようだ。

「では、そろそろ夜も更けていますので下がらせて戴いても良いでしょうか？」

「その前に図書館に行きなさい。私の友人の魔法使いがいるのだけ

れど、…あとは本人に聞けば分かるわ」

「分かりました。では失礼します」

正直、気疲れしているのでさっさと寝たかったが図書館に本を取ってこいとかその程度の用事だろう。

……なら妖精メイドに頼めば良かったのではないだろうか。

しかし、気にしていても仕方ない。さっさと用を済ませて寝てしまおう。

図書館に入った事はないが、場所は大体分かる。

扉が妙に大きかったのを覚えているが、何故紅魔館は扉の大きさを均一にしないのだろうか。分かり易くて良いが。

そうやってあれこれ考えている内に図書館に着く。

重そうな扉は意外と軽く、見かけ倒しのようだった。

中を見れば扉よりも巨大な本棚がいくつもの列になっている。しかも空いている箇所は無く、何万、何十万という本が静かに並べられていた。

「……凄いな」

「えーと、どちら様ですか？」

図書館の様子に圧倒されていると、誰かに話しかけられた。

頭と背にコウモリの翼のようなものがついた赤い髪の少女だ。

「ああ、すみません。数日前からお嬢様にお世話になっています。桜井勇輝です。お嬢様から言われて来たのですが」

「ああ、貴方がそうでしたか。人相が悪いので侵入……何でもないです。パチュリー様がお待ちですので案内しますね」

……まともな人？だと信じていたのだが。

本棚の迷路を案内され、たどり着いたそこには本に囲まれながら読書をしている少女がいた。

其の陸（後書き）

実は紅霧異変の前だったりします。

其の漆（前書き）

前回のあらすじ

図書館でひきこもりを見つけました。

其の漆

本を読んでいた少女が、持っていた本を閉じて勇輝に視線を向けた。

「あなたがレミイの言ってた人間……私にはどこが面白いのか分からないわね」

「初めまして。用件は貴女に聞くようにお嬢様から言われたのですが、どういった事をやればいいんでしょうか」

眠い。それもかなり。

少女：パチュリーは物を見定めるように下から上へと目を動かして、一言。

「才能無し。レミイには悪いけど教える事は何も無いわ」

「そうですか。ちなみに何の才能が無いんですかね？ 家事は全滅していますけどそちらでしょうか？」

少々イラついた物言いになってしまった。

だが、疲れているのに才能無いから帰れ、と言われれば誰だって良い気はしないだろう。

「魔法よ。霊力が人並み以下だからそつちでどうにかしようと思ったのしょうけど……。やっぱりスペルカードを作るのも無理かもしれないわ」

「スぺルカード……ですか？」

「一応人間でも使えるのよ。ただ、貴方は外から来たみたいだから霊力が弱い。代用に魔法を教えようかとレミイは思ったみたいだけど才能の欠片も見当たらないの。分かった？」

つまり、ここでも役立たず、と。

「霊力は増えたりはしないんですか？」

「鍛えれば少しは上がると思う。でも数年はかかるわね」

「では、力とは生まれ持つて備わっているものなのでしょうか。それとも、ある日突然目覚めるものですか？」

「……大体の妖怪や魔法使いは生を受けたその時から力は持つている。人間は力を持つていても発現せずに一生を終える者がほとんど。確率は幻想郷で産まれたら十パーセント。外はほとんど皆無、変な希望は抱かない方がいいかもね」

と言い終えるとパチュリーがパタンと倒れる。

「！？ 大丈夫ですか？」

「貧血だから……あまり大丈夫じゃないかもしれない」

「……とりあえず生活習慣を見直す事をお勧めします」

パチュリーを放置。図書館から出て自分の部屋に向かう。

勇輝が出ていった後、レミリアは咲夜を呼んで話をしていた。

「信じられる？ あのフランが人の話を聞いて、しかも大人しく人間と一緒に遊んでいたのよ」

「確かに色々引っ掛かる所はありますね。私はいきなりスペルカードルールでの決闘になりましたし」

昔、咲夜が初めてフランに食事を渡しに言った時は地下通路でかなりの規模の弾幕ごっこが繰り広げられた。

レミリアとパチュリーの二人ががりでフランを部屋に押し込んで事態は收拾されたのだが、フランはとにかく気がふれやすかった。

「パチエに弾幕を使えるように指導してもらおうと思ったのだけれど……やっぱり駄目かしらね」

「外から来た人間ですからね……。鍛えても妖精程度の戦力にしかならないと思いますよ」

実際、勇輝は頭の回転は早く手先もそれなりに器用だが体力は平均値、霊力は平均以下。スペルカードを一枚使えば霊力が切れるだろう。

「面白そうな運命が見えたのだけれど……やっぱり見間違いだっかしら？」

「どのような運命でしょう？」

咲夜の問い掛けに、レミリアは楽しそうに答える。

「咲夜がスペルカードルールで勇輝に負ける所」

部屋に戻ってきた勇輝は、テーブルに向かって何かを書いていた。

「……もう数学でいいかな。クイズ考えるの面倒だし」

何問も考えるのは面倒だ。死と隣り合わせなので必死に考えるのだが。

フランドールが地下に軟禁されている理由はその力の恐ろしさ故だったと分かった今、またあの部屋に戻るのも気が引ける。

対策に十字架でも作ってみようか……咲夜が殺しに来るだろう、多分。

それにしても、幻想郷にはまともな生物がないのだろうか？ 妖精に妖怪に魔法使い。咲夜は人間らしいが規格外な力を持っている。

レミリア達の言うスペルカード。自分には使えないらしいがどういうものだろうか。

もう寝よう。考えるのにも疲れた。

明日は……生きていられるだろうか？

さて、夜が明けて日も昇った。

何故、ベッドに血痕があるのだろうか……。

それに頭が少しくらくらする。貧血にでもなったかのように。

「まさか……」

真相を確かめるために咲夜を探す。

意外と早く見つかった彼女の手には赤い液体の入ったビンが。

「おはよう。気分でも悪いの？ 顔色が悪いようだけれど」

「それだけ血を抜かれたら気分も悪くなる。言ってくれば自分でやっただけ……」

「お嬢様が急に言い出したから仕方なかったのよ。三時間前だったかしら」

「三時間前って明け方だろ」

「寝る前に飲まない？ お酒か何か」

「て事はお嬢様は完全に日中寝て過ごすつもりか？ 日光に弱いて言っても不健康だと思うが」

「たまにこうなのよ。昼間は行動が制限されるから夜更かしして、

昼間ずっと寝てるの」

「……そうか」

もう好きにしたらいいと思う。自分に害が出ないようにしてほしいが。

「あと、お嬢様から伝言。妹様、たぶん日付変更直後から待ってる筈。らしいわ」

咲夜から伝言を聞いた直後、勇輝は地下室に向かって全力で走り出した。

早くも死に一步近づいてしまった気がする。

其の漆（後書き）

現時点で全てにおいて役立たずの主人公（仮）です

其の捌（前書き）

前回のあらすじ

朝起きたら血が……。

其の捌

「……遅いよ」

トーンの落ちたフ란の声に冷や汗が伝う。

「申し訳ありませんでした。フランドール様……」

駄目だ、恐怖で頭が回らない。

「時間は言われてなかったから怒らないよ。今日来る約束は守ってくれたし」

無理だ、目だけが笑っていない。

「時間をお伝えしなかったのも俺のミスです。すみません」

誠意を持って謝ろう。それがほとんど回らない頭で考え出した答え。

「じゃあ、今日一日ずっとここにいたら許してあげる。いいよね？」

「……？ そんな事で良いのですか？」

「うん。だから昨日の続きしよ、今日はどんな問題？」

少し拍子抜けしてしまったが、命が助かったのなら十分だ。

「では最初にちょっと確認を。フランドール様は数字の計算が出来ますでしょうか？」

「それくらいフランにも出来るよ、……得意じゃないけど」

「ではこの問題が解けたら何か一つ、フランドール様の願いを“俺の叶えられる範囲で”叶えてさしあげましょう」

一部強調して言ったのは仕方ない。でなければ弾幕ごっここの地獄を見るか粉々に破壊されるかもしれない。

「ホント？　ならフランが諦めるまで答えをだしちゃダメだよ」

「分かりました。頑張ってください」

とんでもない地雷を踏んだ気もするが、一度宣言した事を訂正する程落ちぶれたつもりはない。

それに、この問題は高校の数学をクイズのように変えたただけ。早々解けるようなものではない。

現にフランは問題の書かれた紙を見て唸っている。

これならしばらくは時間が稼げるだろう。

しかし、ふと思ったのだが食事はどうしたら良いのだろうか。昨日の夜から結局何も食べていない。

……もしかしてこれはピンチなのではないだろうか。

「……あの、フランドール様」

「まだ考えてるから黙ってて。絶対に解けるから」

次は暴力になるかもしれない。黙ろう。

沈黙が続く事一時間。

「フランドール様……」

「黙って！まだ諦めてないから」

空腹を意識したせいか、さっきから胃が悲鳴のような音を響かせている。

そして更に一時間。

「フランドール、様。そろそろ……」

「五月蠅い！集中してるから黙って！」

泣きたくなってきた。

ずっとフランの様子を見ているだけ。暇だし腹が減ったし、いい加減許してほしい。

それから数分経つと、フランに変化が表れた。

首がカクンと揺れているのだ。レミリアの伝言通りなら夜からずっと起きていたのかもしれない。

それだけでなくも解けない問題とにらめっこして数時間経っているの

だ。眠くなるだろう。

「……フランドール様。いくら問題を見つめていても答えは浮かび上がってはきません。一度休憩にしてはどうでしょうか」

「……ん。じゃあ枕」

提案を受けたと思えば、勇輝の足を枕にしてすぐにフランは寝てしまった。

余程寝るのを我慢していたのだろうか。一分もせずに寝息が聞こえてくる。

普通の人間の子供のように無邪気な寝顔は、とてもフランが危険な存在とは思えない程幼さを感じる。

「……その駄メイドさん。死にそうなので食事を運んできてくれませんかー？」

両手を後ろにつき、顔を上に向けると後の扉から覗く咲夜が見えた。

咲夜は音を立てないように扉をゆっくり開けて、部屋へ入る。

「まさかここまで妹様が手玉にとられるなんて思いもしなかったわ。それと、貴方がそういう趣味だという事も予想外ね」

「どんな趣味だ……。というか本当に昨日の夜から何も食べてないんだ、持ってきてくれないか？」

「分かっているわよ。ほら」

咲夜がパンを取り出し、それを渡される。

「それと忠告。妹様はお嬢様と違って少食ではないから、気をつけて」

「干からびるかもな。遺骨はどうなるんだ？」

「死体は森に放り投げておくわ」

骨も残してくれないらしい。

「なら死ねないな。それと、お嬢様に今日はここから出してもらえない事を伝えておいてほしい」

「役に立たないのだから一生ここでもいいんじゃないかしら」

「ストレスで死ねるな、確実に」

咲夜は「馬鹿じゃないの？」と言い捨てて部屋を出ていった。

フランはまだ寝ている。

起こさないように体勢を変え、横になる。

どうせ暇だ。寝てしまおう。

まだ幻想郷に来て一週間も経っていないのだが、色々とありすぎた。

あの平穏な学園生活がひどく懐かしいが、戻れる確率どころか可能

不可能も分からないのだ。考えても仕方がない。

とりあえず今は休もう。

目を閉じると、数十秒で意識は落ちていった。

其の仇（前書き）

前回のあらすじ

フランと寝ました。

其の仇

真つ暗な闇の中、勇輝は意識だけをはつきりさせていながら体を動かせないでいた。

「気分はどうかしら。人の夢に入り込むなんてしたことないから不安なのだけれど」

聞こえてきた誰かの声。

聞き覚えは無いが、声から女性であることは分かる。

「いったい誰なのか……姿は見えない、ただ声だけが聞こえた。」

「もしかして話せないのかしら？ まあいいわ、とりあえず貴方が置かれた状況だけ説明させていただくわ」

置かれた状況……？ どういう事なのだろうか。

「あら、意識だけははつきりしているのね。思っている事が伝わってくるわ」

そうか、夢だからか。……疲れているのだろう。

「貴方が幻想郷に来てしまったのは偶然、貴方が刺されて倒れた場所に境界の歪みがあったから」

境界の歪み……何の事だ？

「それと、これはただの夢ではないわよ。私は現実に存在する、私の力は“境界を操る程度の能力”、夢と現実の境界を繋げてみたのだけれど。信じられる？」

どうせ信じようが否定しようが変わらないのだろう。どうせ幻想郷では異常が普通なのだから。

「良く分かってるじゃない。まだ幻想入りして数日だというのに」
幻想入り？

「この幻想郷に迷い混む事よ。主に私が原因の事だけど」

……おい。

「勘違いしてもらっては困るわ。貴方が幻想入りした事については私は関わっていないの、貴方は偶然にも境界の歪みに触れ、偶然にもこの地域に飛ばされ、偶然にも氷精に気に入られて一夜を無事に過ごし、偶然にも紅魔館に受け入れられ、偶然にもフランドール・スカーレットに気に入られただけなのだから」

……そう言われると随分と都合がいいな。

「……？ 貴方の力ではないのかしら」

そんな都合良く状況を操作できる能力があれば刺し殺されたりしないはずなんだが……。

「ああ、それもそうよね」

それで、いつまでこの状態が続くのだろうか。

「私が貴方の夢から出ていけば目が覚めるのだと思うけれど」

なら出ていってくれよ。別にこれ以上話そうと思うことはないのだから。

「つれないわね。まあ用があるわけでもないから今回はこれぐらいにしておきましょうか」

次第に鮮明だった意識が薄れ始める。

「あと、刺された傷を治したのは私ではないから」

目が覚める前、淡い紫色の服を着た女性が見えた気がした。

「……本当に夢、か」

目は覚めたのに何故か体がだるい。いや、重い。

「……フランドール様、何をしているのでしょうか」

仰向けになっている勇輝にフランが乗っていた。それに、首筋に噛みつかれている。

「お腹が減ったからご飯。いつもは料理されてたけど、無かったから」

料理がなかったら食品を生で食べる子なのだろうか……いや、殺されてはたまらないが。

というか咲夜に血を大量に抜かれているのでこれ以上血を失うのは命に関わる筈だ。しかし、頭はすっきりしているし貧血の症状は出ていない。

まるで、朝に血を抜かれたのは夢だったかのよう……。。

「……とにかく、寝ながら食事をするのはどうかと思いますのでどいてもらえないでしょうか」

「ん、もういいや。それよりさっきの問題を解かないと」

そい言つてフランは勇輝の上から降り、問題の書かれた紙を見る。

「……フランドール様、その問題はこれから考え始めなければ解けませんよ」

このままでは一生考えてしまいそうなのでヒントを出す。

フランもそれに文句は言わず、言われた通りに解き始める。

しかし、夢の中で言われた事。確かに今までの自分の状況は出来すぎている。もしかしたらもつと山奥に飛ばされ妖怪に食われていたかもしれない。チルノに氷づけにされ殺されていたかもしれない。レミリアが問答無用で殺していたかもしれない。フランに殺されていたかもしれない。

ここまでくると最早必然、ここですこして生活することが決まっていたかのよう……。。

「…………え…………ねえつてば!」

フランの声で勇輝は我に返る。

「ど、どうかしましたか? フランドール様」

「問題解けたよ、これで合ってるよね?」

見ると、紙の端の方にフランの書いた答えが。

「はい、正解です。よく頑張りましたね」

「じゃあ約束。一つお願いを聞いてくれるんだよね?」

………… ああ、そんな自ら地雷を踏むような発言をしていた気がする。

「何でしょうか? 俺に出来ることは限られているのであまりフランドール様にとって有益な事は出来ないかと思いますが」

「大丈夫。簡単な事だよ」

フランはニコニコと笑って、自分の願いを口にする。

「お姉様と結婚してフランのお兄様になって」

死ねと言われたような気がした。

其の仇（後書き）

ちよつと今更な主人公のプロフィール（幻想郷に来る前）

名前 桜井勇輝さくらいゆうき

性別 男

年齢 19

身長 約175

体重 約58

大学の医学部に通っていた。父親は無免許の医師、母親は幼い頃に死去。

手先は器用で頭の回転も早いのだが体力はあまりない。

たまに父親の仕事を手伝っていたため、ある程度の応急措置や対処法などは分かる。

髪は黒く、適当に伸ばしてありそれなりに顔立ちも良い。

このような人でした。

其の拾（前書き）

前回のあらすじ

爆弾発言からの……。

其の拾

「いくら何でもそれは無理かと……」

フランの発言をまだ全て理解出来ない頭を何とか動かして否定の言葉を伝える。

そもそも二人の見た目からして年齢は小学生低学年、またはそれ以下だ。

「どうして無理なの？」

「まず、俺にはその資格がありません。従者という身分ですから。それにお嬢様は幼すぎます」

「お姉様もフランもずっと歳上だよ？」

「は？」

「何百年も姿は変わってないけど、フランはもうあと何年かで五百歳。お姉様はフランより五つ上だし」

「……………ま、まあ年齢は良いとしても俺は従者です。結婚なんてとんでもありません」

詐欺だと思う。見た目の百倍の年齢とかもう詐欺だとは思えない。

「えー、じゃあフランとなら結婚する？ 旦那様でもいいから」

「申し訳ありませんがお嬢様に仕える身ですのでお嬢様の許可がないと出来ません」

それに無理だ。フ란の言っている事が本当なら…。

「それに俺は人間です。だからどうしてもお二人より先に寿命を迎え、死んでしまう。辛いものですよ、身近な存在の死は……」

フ란はそれを聞いて黙る。しかし、納得はいかないようだった。

「ですから、俺の事はただの使い勝手の良い飯使いと思ってください。それ以上でもそれ以下でもない、小さな存在として」

考えようによつては拒絶に聞こえるかもしれない。だがこれが最良だ、ここに来て数日、会つて二日の人間を兄や夫と慕つて、それは彼女にとってプラスになるのか？

答えはノーだ。いつ死ぬか分からない程弱く、生きている時間は遥かに短い。

失うと分かっている近づく覚悟もない、小さなお願い程度で決めて良い筈が無い。

「……じゃあ、もういいよ。ここから出て行って、二度とこの部屋に來ないで」

「……申し訳ありませんでした。フランドール様」

本当に、役に立たない男だ。

ここでとどまる器量も度胸も無い、ただ小さな少女を傷ついただけ。ここに初めて来たときよりも重く感じる扉を開けて、部屋を出ていく。

「それで貴方は図書館に来て何がしたいの？」

「弾幕の一つ二つを使えるようにしたいので勉強を。そういう本つてありますよね？」

フランに部屋を追い出されてから丸一日。謝りに行こうと思ったが死亡フラグでしかないのは目に見えている。

真っ向からスペルカードルールでフランと戦い、酬いを受け謝る。それぐらいしか考えなかった。

「あるにはあるけど……その五段上、右から三十二冊目が人間用」

言われて手に取った本の題名は『妖怪に勝てる弾幕入門』、不安だ。

他の本の背表紙を見ると、『美しい弾幕の作り方』や『弾避け基礎講座』や『弾幕の神秘』など、内容に不安のある本が何冊もある。

「その辺りの本は何十年か前に貴方のいた外から来た本が参考になつてらしいわ。誰が書いたのかは知らないけど」

シューティングゲームの本でも拾ったのだろうか……。とにかく、弾幕を使えるようになるなら良い。

「これは持ち出しても良いのでしょうか？」

「駄目。中で読みなさい」

駄目だった。

とりあえず椅子を借りて、そこに座って本を開く。

最初に書いてあったのは弾幕は霊力を使い、攻撃弾を複数用いて作り出す物。……それぐらい分かる。

次に霊力について。人間は幻想郷の中でしか使えないらしい。霊力の概念やコントロールの仕方。

書いてある通りにしてみると、妙な力が体を伝うのが分かる。非科学的だがそれを自分で感じ取っているので否定は出来ない。

攻撃弾の生み出し方。試してみたが綺麗な球体にはならなかった。何度かやってみないと無理かもしれない。

スペルカードについても書かれている。重要なのは名前で、弾幕の形状を記憶させるためのものらしい。

ルールは使うカードの枚数、自機数を決めて、カードが切れるか被弾回数が自機数に達したら負け。

妖怪と違って攻撃弾の形状や打ち所によっては死ぬ。

また、最終的に自機数が同じで終わった場合は弾幕の美しさで勝負

を着けるらしいが、これは第三者がいないと不可能だろう。

「……後は色々試すしかないか」

まだまともに攻撃弾も作れないのだからスペルカード云々は後によろ。

本を元の場所に戻そうとしたら、小悪魔がやっておいでくれると言うので本を預け、自分の部屋に戻った。

「パチュリー様、あの方凄いですね。人間なのにもう力のコントロールが出来ていますよ」

「確かに早いけど、元々の霊力が大した事ないから無駄な努力なんじゃない？」

「あ、あはは……」

という会話があったのを知るわけもなく、勇輝は部屋で攻撃弾を作る練習をする。

銃型の攻撃弾、鎖型の…これは弾なのだろうか？ とりあえず色々試している。

「無駄な器用さだな……」

一番辛いのは靈力の少なさ。形は色々出来るにも関わらず数が少ないし連続は出来ない。

そして空も飛べなかった。一ミリも浮かない。

これは大きなハンデになってしまふ。相手は立体に動き回るが自分は平面しか移動できないのだから。

かなり前途多難ではあるが、やっていくしかないだろう。

其の拾巻（前書き）

前回のあらすじ

何故か戦闘パートの兆しが。

其の拾壹

弾幕の修行を初めて一週間、何とか一枚のスペルカードを作り上げた。

それ一枚でもへとへとに疲れるので少ないなんて言っていられない。つまり後攻になってしまうのだ。疲れた状態で相手のスペルカードを乗り切れるとは思わない。

とりあえず、後は実戦しかない。これ以上スペルカードを増やすのも不可能だ。

が、相手もないのにどうすれば良いのだろうか。

それに、今考えたらこれは逃げていただけなのかもしれない。

謝るならすぐに謝れば良かったのに、こうして理由をつけて、自分の安全を確保すると言いつつ傷つける手段を獲得しているに過ぎない。

本当に駄目な奴だ。

「……今日死んでも、自業自得か」

フランの部屋の前でポツリと呟く。

重い鉄の扉を開けて中を覗く。

壊れた家具、裂かれたぬいぐるみ、明かりの無い暗い闇。

「フランドール様。いらっしゃいますか？」

一歩中に踏み込んだ時、何かが顔の隣を通り抜け、頬を血が伝う。

「来ないでって、……言ったよね？」

そこにいたのは狂気に染まった赤い目をした悪魔。

「申し訳ありません。しかし、どうしてもお話ししたい事がありましたので」

返ってきたのは言葉ではなく弾幕の嵐。

勇輝はそこから弾かれたように通路へ飛び出す。

「フランドール様……ッ！」

「壊れちゃえ、壊れちゃえ、壊れちゃえッ……！」

降りやむ事の無い弾幕の雨を必死に避けるが、今にも当たってしまいそうだった。

体を無理に捻って避ける。その場から身を投げるように安全地帯に飛び込み避ける。

……どうやら、良くも悪くも今回の行動は正解だったらしい。

白衣のポケットから、まだ新しい札を取り出す。

「あはっ、弾幕ごっこ?」

「数は一枚、自機数も一機、負けたら相手の命令を一つ聞く。ですよフランドール様……」

スperlカードを持つ手が震えている。

「ならさっさと壊れちゃえ!! 禁忌『レーヴァテイン』!!」

赤いレーザー状の攻撃、空中に逃げれない勇輝にとってこれ以上無い程に有効な攻撃だ。

それをフランは剣ように使い、振り回す。しかもその後には小さな攻撃弾が続いているのでたちが悪い。

頭を落ち着かせ、冷静に弾幕を避ける計算を立てる。

まずは縦に降り下ろす攻撃、長さは五メートル、幅一メートルぐらいか。それを確認。

次はそれを横風ぎに振るわれる。剣の上は降り下ろした軌跡になるので不可能。床との僅な間を這うように避ける。軌跡に残る弾幕にも隙間はある、ある程度は動ける。

「まだ壊れない……早く壊れちゃえ!!」

再び横風ぎの一撃、今度は歯を返し切り裂くように振るっている。

これは上に飛んで避け、弾幕の隙間に着地。

嫌な汗が全身から吹き出す、当たったら本当に終わりだ。

一度、霊力の使い方を知ってしまったからこそわかる、フ란の弾幕の強力さが。もしあのレーザーに触れたら間違いなく触れた部分が消し飛ぶ。

スぺルカードの制限時間は一般的なモノなら六十秒前後。それ以下やそれ以上にすることも可能だが、短すぎても逃げ切られる可能性があるし、長すぎてパターンを覚えられてしまっでは疲れ損だ。

まだ三十秒。

フ란は軽々と赤い剣を振るい、勇輝を切り裂こうとする。

白衣の一部が焼け焦げた。少しかすったらしい。

残り二十秒。反応が遅れて髪が少し焦げる。

残り十五秒。息が切れ始める。

残り十秒。体を思い切り捻りた折れ込んで避ける。無理に動いたせいか足首挫くが、避け続ける。

残り五秒。腕に少し攻撃弾がかする、皮を抉られ血が出た。

残り一秒。

「はあ……はあ……」

もう既に肩で息をしているが、勇輝は一分耐えきった。

フランも少し驚いているようで、目を丸くした。

「……はあ……次は、俺の番、です」

ぼろぼろの白衣から取り出したのはさっきのスペルカード。

「行きます。戯符『欠陥迷路の遊戯』」

まず、最初に生み出されたのは無数の鎖型の弾幕。

それはフランを狙うものではなく、二人を囲うための壁となる。

更に鎖は二人の間に幾つもの壁を作る。そして、上空に逃げられないように壁の高さで更に鎖型の弾幕が交差し、人が通れる隙間を埋める。

フランは自分を狙うものではないことを知り、静観していたが唐突に攻撃は始まった。

壁となっていた鎖型の弾幕がフランに向かい、乱雑に弾けた。

一瞬驚いたフランだが、別の通路へ逃げる。しかし、そこには勇輝が放った攻撃弾が飛んでいた。

横の通路に入り避けるが、それはフランの方へと向きを変えた。

「追尾弾!？」

フランは狭くなった通路を飛び、追尾弾を振り切ろうと通路を抜けていく。

幾度となく、壁となる弾幕が弾けたりどこからともなく飛んできた弾幕を避ける。

残りは二十秒。

そこで勇輝に変化が表れた。

「……は？」

膝から力が抜け、床に手をついてしまった。

霊力が足りないのだ。

それに伴い、弾幕の密度は圧倒的に少なくなり隙間だらけになる。

フランを追っていた追尾弾も消滅。

今の勇輝に、ここから勝てるほどの力はない。

其の拾壱（後書き）

紅魔郷は百回以上ピチュリしました。今ではボムも全て消費できるようになりましたが。

其の拾貳（前書き）

前回のあらすじ

ピンチになった。でもどうせ勝つよね、初戦だし。

其の拾貳

弾幕が薄くなり、勇輝も霊力をほとんど使いきった状態。

「嘘、だろ……？」

おそらく、勝たなければフランは止まらない。そして、勝ちまであと数瞬だった。

結局は自分はただの人間だった。

ろくに弾幕を使えない霊力しかなく、自らが傷つけた少女を止めることも出来ない。

本当に、これで終わってしまうのか？

終わって良い筈が無い。

傷つけた少女を放っておくのか？

そこまで薄情なつもりなど無い。

フランドール・スカーレットを止めたくは無いか？

言うまでも無い。止めたいから、謝りたいからこうして戦いを選んだのだから。

しかし足りない。力が、霊力が。

自分にはそれが足りない。

もしあと数パーセントの霊力があれば。

もうあと数歩分の力があれば。

そんな欠陥が投げれば――

「……………嘘？」

フランに勇輝の弾幕が被弾した。

それだけではない。一度、薄くなった弾幕は最初の数倍の密度へと変わっている。

そして一分が経過したのか、弾幕は全て消滅した。

「俺の勝ちです。………… フランドール様」

「あ…………」

負けたことで我に帰ったのか、フランが申し訳なさそうな顔をする。

その視線は勇輝の腕に向いている。血の流れるその腕に。

「ああ、傷ならご心配なく」

この欠陥である傷は必要無い。

傷が少しずつ消え、何事も無かったように元に戻る。

「えっ……え？」

「どうやら医者っぽい力を授かれたようですよ。 “欠陥を修正する程度の能力”、らしいです」

「何それ狡い」

確かに狡いと思うが、使えるようになってしまったので仕方ない。

「いやあ、色々と面倒ですよ。付け加えた物は一日で消えますし、一日三回の回数制限もあるようですから」

ここまで理解しているのも、知らないという欠陥を知らず知らずの内に修正したため。今日はもう使えないのだ。

「では命令の時間です」

ビクッ、とフ란の体が震える。

勇輝はフ란へと近寄り、ポンと手を頭に置き言った。

「先日の俺の発言。アレを訂正させてください。そしてここからはお願いです」

フ란の頭から手を離し、目の高さを合わせるように屈む。

「俺を、これからもフラン様の遊び相手として部屋に招いてはいた
だけないでしょうか」

フランは頷く事が出来ない。自分が勝手に怒り、今日に至っては話
も聞かずに攻撃してしまったのだから。

「それと、俺は貴女に嘘をつきました」

「へっ？」

突然の勇輝の発言にフランが声を漏らす。

「どうやら、この力の用法を考えた結果……俺、死なないようなん
ですよ」

「え？ちよつと……何で？」

「あのですね。幻想郷に来る前に一度命を落としているのですが、
多分その時から微弱ながら力は使えていたんですよ。予想ですが不
幸という欠陥を修正し、幻想郷への歪みに触れた。幻想郷に着いて
から力はある程度の強さになり、死という欠陥、傷という欠陥を修
正したんでしょう。死が打ち消された俺は死ねない人間となる訳で
すね、歳はどうなるか分からないので明日にでも老化を修正してお
かなければなりません」

ポカーンとしてしまっているフランの頭を撫でる。

「俺は今日のフランドール様の行動を咎めません。ですから、あの
日嘘をついてしまった俺を許していただけませんか？」

「……………たら許してあげる」

か細い小さな声でフランは答える。

「何でしょう？」

「ちゃんと、フランを様をつけないで呼んでくれたら許してあげる」

「そうですか、では」

気持ちを切り替えるように咳払いをして。

「これからよろしく。フラン」

「うんっ！ お兄様」

……………え？

「また随分と派手に暴れたのね、フラン」

勇輝とフランが仲直りした数分後、レミリア、咲夜、パチュリーの三人が地下の通路へと降りてきていた。

フランは勇輝に後ろから抱きつき、レミリアを挑発するように……………。

「お姉様がお兄様を従者なんかにするのが悪いんだから」

「お嬢様。申し訳ありません」

「それよにもよく生きていたわね…… スペルカードルールで決闘をしたのでしょうか？」

「数は一枚でしたし、ちょっとした収穫というか力の発現もありましたので何とか。やっぱりただの人間が使うには派手すぎるスペルカードだったようなので」

白衣はぼろぼろのままだが、勇輝には傷も疲れた様子もない。

「それで、力とは何かしら」

「えーと、“欠陥を修正する程度の能力”ですね。色々と制約のよくなものはありますが」

「……狡いわね」

レミリアの発言に後ろの二人やフランも頷く。

「確かに、今日中でしたら霊力も尽きないようですからね……」

今日使ったのは霊力の少なさ、知識、傷の三つ欠陥を修正。

次に使えるのは時計の指針が十二を指した時。

「とりあえず、これからフランの世話役として頑張rinaさい」

紅魔館での生活は、まだ始まったばかりである。

其の拾参（前書き）

前回のあらすじ

序章が終了いたしました。

其の拾参

「紅い霧、か」

「そう、お嬢様は日光に弱いから紅魔館の上空を霧で包むの」

紅魔館に来て2ヶ月。もうすぐ夏という事もあって日の光も次第に強くなってきている。

家事については、やったことがないのにやらされた。という事だったので一通りの説明を受けた今はある程度こなせるようになっていく。

霊力についても、能力が発現したことに影響したのか、一般人以上には増えていた。

パチュリーが何度もあり得ない、あり得ないと呟いていたが今は忘れてしまおう。

「それで紅い霧出すって言うても別に外で遊ぶ訳でもないんだろ？」

「……反射した日光で指が気化したらしいの」

「ああ、そう……」

吸血鬼は力が強い代わりに弱点が多い。

日光や流水、ニンニクに十字架。とりあえず多い。

「じゃあ、俺はフランに呼ばれてるから」

「暴れないでよ」

「……そうならないことを祈る」

実は、あの日から何度か弾幕での決闘をしている。

死なないとわかったフランは容赦がなく、何度か死に目に遭っている。

死なないのだが痛いし辛いし、うっかり回数制限に引っ掛かっていた時は大惨事だった。

便利さが仇になるとはこういう事を言うのだろう。

「あ、お兄様！」

扉を開けると、フランが駆け寄ってきて抱き付いていた。

「フラン、とりあえず中に入れてくれ。それと一度離れてくれ、閉めれないから」

最近では、フランはすっかり勇輝になついている。実の姉であるレミリアよりも……。

「じゃあ今日はこれを使って遊ぶか」

「カード……やった！弾幕ごっこー！」

「カードだけどスペルカードじゃないから、トランプっていう一から十三までの数字がかかれた四種類とジョーカーが二枚。割と万能で色々な遊び方があるから一日潰すのは訳ないと思うぞ」

まずはババ抜きから。思った以上にフランは顔に出やすく、負ける気がしなかったが手加減して五分五分の勝負をする。

それにしても、紅い霧を出すのは構わないのだが人里に影響は無いのだろうか？

行ったことはないが数百人の人間が住んでいると聞いた。チルノのは数え間違えだろう。

それと、ここは島だったらしい。湖で見たのは対岸であって湖が小さかった訳では無かった。暗くなり始めていたのも影響していたのだろうか。

つまり、空を飛べない勇輝は人里に行けない。泳ぐ、船を作るのは構わないが食われて死なないようにと言われた。

まあ、ある程度信用もされ自由になってきていた。

「フラン。これで上がりな」

「なっ……!？」

十勝九敗、そろそろババ抜きはいいだろう。

「他の遊びでもするか？ ババ抜きだけじゃつままないだろ？」

「えー、フランまだ勝った数負けてるし」

「明日も出来るだろ、次は…」

ダウト、ポーカ―、神経衰弱、ブラックジャック。とりあえず色々やる。

神経衰弱はフランが途中でキレかけたため、今後やらない事にする。

「じゃあ、明日の朝にまた来るから」

「もう終わりー？ お兄様もここで寝たらいいのに」

「一応、他にもやらなきゃいけない事はあるからな」

「じゃあ明日はスペカ作ってきて弾幕ごっこね」

「一週間前にやったばかりだろ……。それも地下通路が崩れかけるまで」

弾幕ごっここの名の通り、スペルカード以外の弾は禁止しているのがキツイものはキツイ。

フランの頭を撫でてから、部屋を出ていった。

「それで、霧は出来なのかしら？ 咲夜」

「はい。お嬢様。先程から紅魔館の上空に展開しています」

「そう……。良くやったわ咲夜」

レミリアは、窓から紅い空を見上げ笑う。

しかし、霧はまだ放たれたばかりであり、当然隙間もいくつかあり、その隙間から夕日の光が射し込み、レミリアの髪に当たり、レミリアの髪が気化する。

「……う、ううう」

レミリアの体がフルフルと震え出す。

「咲夜あ……！」

そして、いつもの気品は何処へ行ったのか外見相応の子供のように咲夜に抱き付き泣き出した。

「大丈夫ですよお嬢様。髪はもう元に戻りましたし、あと少しで霧が日の光を通さないようになりますからね」

妙にうつとりとした表情で、咲夜はレミリアを抱き締めなだめた。

「……ぐすっ……」

そこに吸血鬼の威厳は微塵も無い。そして、そんな部屋に入っている度胸は俺には無い。

「……部屋に戻ろう」

レミリア本人に、フランと遊び終えたらこの部屋に来るように言われていたのだが、こんな所を見たあつては弾幕が飛んで来きかねない。

そつとドアから離れて自分の部屋に行こうとしたら。

「どこへ行くつもり？」

離れたドアから咲夜が出てきた。

「あ、ここだっけ。隣の部屋かと思ってた」

咄嗟に言い訳。咲夜は一瞬だけ疑うような表情をしたが、横を通り抜けていく。

「見なかった振りをしなさい。お嬢様もそれを望んでいるから」

小声だが、確かにそう告げて咲夜は自分の持ち場に戻る。

「勇輝。最近フランと決闘ばかりしているじゃない？」

「いえ。最近は部屋で大人しく遊んで下さる事が多いですよ」

「ふうん……。そろそろ日も沈むわね」

ああ、また嫌な予感がする。

「少し、殺し合いをしてみましようか」

其の拾肆（前書き）

前回のあらすじ

レミリアとやりそいです。

其の拾肆

レミリアの言葉に、フランと初めて会った時の感情を思い出す。

「……殺し合いとは物騒ですね。いくら力が目覚めたと言ってもお嬢様の相手になれるとは思いませんが」

「私も退屈なのよ。まともに行動できるのも夜だけ、ちょっとした余興よ」

余興で命を奪われては堪らないのだが。

「そうね……あと一時間もしたら月も出るでしょうし、中庭に来なさい」

どうやら、本気らしい。

憂鬱だが仕えている身なので文句も言えない。フランの相手をしているが、レミリアの従者なのだから。

「分かりました。殺し合いとの事ですが、攻撃に使うのはスペルカードのみでよろしいのでしょうか？」

「いいえ。相手がスペルカードを使っている時に隙さえあれば攻撃しても構わないわ」

それだけ聞くと、頭を軽く下げてから部屋を出た。

部屋に戻ると、使うスペルカードの確認を始める。

フランとの弾幕ごっこにより、数だけは増えているのだが使い物になるのは一部のみ。

フランと最初に戦った時のスペルカードは、カードの枚数を一枚に制限していたからこそ勝てたようなもの。正直、レーヴァテインで鎖型の霊力弾を破壊されたら負けは確定。

それに消耗も激しい。無駄が多いのだ。

「……逃げたらそれこそ殺されそうだしな」

自分で呟いておいて寒気がしたが、仕方ない。

十枚ほど候補をあげ、白衣に突っ込んでおく。

どうやら、時間も来てしまったようだ。

「スペルカードの枚数は五枚、三回ヒットしたら負け。これでいいかしら？」

「構いませんよ、精々最初一枚で負けないようにします」

霧のせいで紅く見える月に照らされる紅魔館の庭で二人は向かい合っていた。

紅魔館の玄関では、フラン以外のメンバーが今か今かと決闘が始まるのを待っている。

「張り合いがないのは面白くないから……勝者が何か一つ敗者に命令する。というのはどうかしら？」

「随分と面白みのない賭けです。どちらが勝つかなんて分かりきっているでしょうに……」

「もしかしたら勝てるかもしれないでしょう？」

「……既に“もしかしたら”の確率でしかないんですね」

「じゃあ始めましょうか……楽しい余興を」

二人の間の空気が張り詰めたものに変わる。

最初に動いたのは勇輝。

「解符『トラップパズル』」

最初に展開されたのはレミリアの身長の数倍もある球体の霊力弾。数は十。

レミリアの左右で、五つずつ直列に停止。レミリアは上空に移動するが霊力弾は追うように移動する。

続いて、かなり長く細い霊力弾。槍のようにも見えるそれを展開。数は三十。

まずは二本が、最初の霊力弾の間を通すように横向きに間を貫く。

レミリアも、小さな動きでそれを避ける。

続いて、二本、三本、四本。お互いに干渉しない様に、隙間を埋めるように槍は隙間を埋めていく。

ある程度の位置で停止するのが腹立たしい所だが、それがレミリアの動きを制限し始めた。

レミリアもそれに気づいて、霊力弾を放ち槍を破壊しようと試みる。

しかし、弾けた槍はその小さな破片をレミリアに放った。

「（最初こそ侮っていたけどかなり面倒なスペルね。コントロールも無駄に高い…）」

ここまで精密に操られると気味が悪い。正直な所、レミリアでさえここまでのコントロールは出来ない。

幸いにもスピードは無い、弾けた破片が少し速いが、一方向だけを気にすれば良いので問題ない。

残りは一本。これで相手は一枚消費。

しかし、レミリアは霊力弾の隙間から不敵にほほ笑む勇気を見た。

「ッ！ー！」

最後の一本は、レミリアを狙うよう、真っ直ぐに飛ばされる。

全ての槍が横向きに停止している場所に。

そこからは、爆発が爆発を呼ぶように槍が弾ける。

数本破壊したが、二十近くは無視していたのだ。破壊したら次の攻撃に繋がってしまう。進んで破壊したくないのも頷ける。

そんな、楽をしたいという感情を利用し相手の周りを埋めるように爆弾を設置していくスペルカード。

正直、嫌らしいことこの上ない。絶対に嫌われる。知らずに最後まで避けていた人間からは苦情が来るだろう。

四方八方から飛んで来る弾幕。その一つは見事にレミリアに命中した。

ギャラリーからは驚きの声上がる。

「まさかお嬢様が最初のスペルカードで一機失うなんて……」

「お兄様は初見じゃ避けられないようなスペルカードを作るのが楽しいんだって。アレは狡いけど」

何故か地下からフランも出てきている。

「妹様！？ どうしてここに……」

「お兄様が戦う気がしたから出てきたの」

そんな理由で出て来ると思った者はいないし、妖精メイドもこの時間はうるついていないので出て来ないように対応するのは不可能だ

った。

肝心のパチュリーは観戦しに来ていて、レミリアは戦っている。

まあ、実害はなさそうだから良いかと、他のギャラリーは戦う二人に目を向けた。

「まさか私がこうも簡単に攻撃を受けるなんてね……」

「簡単では……無いです、ね。一枚で、これだけ精神的に疲れるのですから」

細かい操作が多い分、精度を上げるために集中を切らさないようにしなくてはならない。

「じゃあ、私も少し本気を出そうかしら」

レミリアがスペルカードを取り出す。

「神槍『スピア・ザ・グングニル』」

其の拾伍（前書き）

今更ながら能力についての説明

能力名 欠陥を修正する程度の能力

- ・使用回数は一日三回まで。

- ・取り消す、元に戻す等は一生持続する事が可能だが新たに生み出したり、付け加えたものは日付変更と共に消える。

- ・欠陥と認識できない限り、修正は不可能。

- ・別に代償や副作用は無い。

其の拾伍

レミリアの手に、妖力で作られた深紅の槍が握られた。

どこか、フランのレーヴァティンを思わせるそれは、間違いなく殺すための手段として生み出されたもの。

今更だが、弾幕で競う勝負の筈なのに近接武器を使って良いのだろうか？

「行くわよ」

レミリアがグングニルを横薙ぎに振るうと、大きさ五十センチほどの妖力弾が勇輝に向かって猛スピードで放たれた。

その場から飛び退いて避ける事が出来たが、地面が爆発し爆風が勇輝を襲った。

「驚いている暇はないわよ？」

いつの間にか背後に立つレミリアから発せられた声に反応し、霊力で盾のようなものを生み出す。

簡単にそれは貫かれたが、標準を狂わせる事には成功した。

冷や汗が全身から吹き出す。

「やはり姉妹ですね。少し戦い方が似ています」

「余裕がありそうね。もう少し速さを上げましょうかしら？」

飛べない勇輝では機動力も行動範囲も相手に劣る。それでもここまです避けられるのは才能でもあったのだろうか。

レミリアが正面からグングニルを突き刺そうと振るう。

こちらからも攻撃を仕掛けているが、全て叩き落されていた。

「まずは一回」

突き出したグングニルを引き直さず。一回転。

それによつて生み出された霊力弾が勇輝にヒットし、体を大きく跳ね飛ばす。

「かはっ!？」

腹に直撃したそれは、肺から酸素を押し出し呼吸を狂わせた。

足や手をやられなかったのはせめてもの救いだ。まだ戦える。それに……

「手加減、ですか……」

今、グングニルで足の一本でも切り落とせば勝負はついたも同然だった。

突きに集中していた事もあって、全く反応出来ていなかったのだ。

「従者が刃向かった訳でもないのに壊しては勿体無いでしょう?」

「殺し合いと言ったのはお嬢様でしたがね……」

「あら、その割には最初のスペルカードに殺傷力が無かったような気もするけど?」

どうやらばれていたらしい。

精度を上げるためでもあるが、パワーが無かったのは事実。

「本気を出させたいのなら、勇気も本気で私を殺しに来なさい。でも安心して」

グングニルを構え、妖艶に微笑む。

「今からは殺しに行くから」

レミリアが、一瞬で距離を詰めて来る。

痛みを無視して立ち上がり、霊力弾を放つ。

あっさりと避けられたが、少しスピードは落ちた。

「偽符『サクリファイスドール』!」

スペルカードが、半透明な人型の霊力の塊と化して剣を生み出し、レミリアのグングニルを受け止めた。

「本当に器用ね……医者を辞めて物造りの職人でも目指したらどう

かしら？」

「医者にも手先の器用さなんかは必要なんですよ」

前方からはスペルカードによって生み出された者から、後方からは勇輝が、同時に霊力弾を放つ。

レミリアは、グングニルを消して回避に専念した。

どうせ、あと数秒しか持たないのなら邪魔になると思ったのだろう。

結局、一度も当てられないままスペルカードの効果が切れた。

「思った以上にやるようだけれど、これで終わりにしましょうか」

レミリアが二枚目のスペルカードを取り出す。

「『紅色の幻想郷』」

数十秒後、勇輝はレミリアに敗北した。

「……スペルカードで対抗してもこの結果か」

レミリアの二枚目のスペルカードに対抗するために勇輝も三枚目のスペルカードを使用したのだが、呆気なく負けてしまった。

庭に仰向けに倒れ、先程までの戦いを思い出す。

圧倒的な量と力の弾幕。

序盤は避けていたが、すぐにのみ込まれてしまったのだ。

「暇潰しにはなったわね。もう少し強いかと思っていたけれど」

「申し訳ないです。期待外れでしたでしょうか？」

起き上がると思ったが、体に力が入らない。

「勇輝の能力で、洞察力や身体能力を向上させたのなら勝てたのではなかったの？ 加減をしていたなら殺すわよ」

「…言い訳に聞こえるでしょうが、回数制限に達してしまっていたので。二つ修正した後にお嬢様から命令が下りましたので靈力を修正するのが精一杯でした」

それを聞くと、レミリアは面白くなさそうな顔をした。

「なら、次は万全の状態で挑みなさい。また機会があれば申し付けるわ」

それだけ言つとレミリアは紅魔館に戻っていき、ギャラリーも解散していく。

だが、一人だけ勇輝に近づく者がいた。

「まさかとは思つけど、お嬢様に勝てるつもりでした？」

「咲夜か。……勝てるとは思わなかったけど、勝つために戦つてた」

未だに体は動かないので寝たまま話す。

「貴方は外に帰りたいとは思わないの？」

「どうしてそんな話になる？」

「外には吸血鬼も妖怪もいないんでしょう？ 美鈴から聞いたわ」

「ああ、そういう事か。お嬢様やフランにぶちのめされておいて、逃げ出そうって気にならないのか。答えは簡単、既に俺は外で普通に暮らしていく事が不可能だから。霊力やら能力が使える存在が普通じゃない世界で暮らしちゃ駄目だよ」

「……幻想郷から出る方法もあるし、外ではどっちの力も使えないと知っても？」

「お前は俺を追い出したいのか……。まあ、とりあえずは働くよ。向こうで目指す事はあったけど、それをこっちで叶える事は出来るだろうから」

それよりも部屋に帰りたい。こんな荒れ果てた庭で一晩明かすのは嫌だ。

「そう。じゃあ、あと三十分で日付が変わるから庭、元に戻しておいてね」

其の拾陸（前書き）

前回のあらすじとか要らないですよね

其の拾陸

翌日の朝、どうも調子が優れないので部屋で寝ていた。

ダメージも元に戻したし、昨日の疲れは残ってはいない筈なのだが体がだるい。

能力の副作用なんて事は無いのだが、どういう事なのだろうか。

「いつまで寝ているの……？」

「ああ、無断欠勤で悪いけど体の調子が悪くてな。特に病氣って事はないから看病なんかはいらない」

咲夜が起こしに来たのだが、だるさに負けて寝たまま対応する。

「分かったわ。じゃあ、妹様の所まで引きずって行けばいいのね」

「は？ え、ちょっと待て。足掴むな。あの、え……？」

石造りの床や階段を引きずり回され、地下室の前に捨てられた。

「あ、お兄様。…どうしてそんなボロボロなの？」

気配でも感じたのかフランが顔を出し、部屋の中に連れ込まれた。

「フラン。今日は少し楽な遊びで勘弁してくれ。体のだるさに加えて拷問並みの肉体的、精神的ダメージを受けたから」

階段を降りるのがあそこまで危険に感じたのは初めてだった。

「うん、別に良いよ」

しりとりで良いだろう。頑張れば一日を潰せる。

そして、次の日も、その次の日も体の調子は元に戻らなかった。

風邪や疲労でもなく、これといった病気の症状も出ていない。

とりあえず仕事（八割がフランの相手）はこなしているが、何とかしなければならぬ。

能力で打ち消してしまうのが一番楽なのだが、それでは原因が分からないので止めた。

「という訳で図書館への入室許可を頂きたいのですが」

「……分かったわ。それよりも勇輝、勝負の前の約束は覚えているかしら？」

「ええ、……命令でしたよね」

今思うと主が従者に命令するのは当然の事なので、大したリスクは無かった気がする。

「覚えているならいいわ。まだ考えている最中だから」

何を言われるかは知らないが、適当に聞いてこなしてしまえば良いだろう。

入室許可が降りたので、図書館へ行く。

相変わらず多すぎる本の中から探すのは不可能なので、小悪魔に聞いて案内して貰った。

調べるのは風土病や幻想郷特有の植物や虫。

自分で原因が分からない以上は、違った視点から見るとしかない。

知らない土地、知らない力。

自分の知る病ではない原因となるものが見つかるかもしれない。

とりあえず、目を通していくがこれといって有益な情報は得られない。

いや、有益ではあるのだが今知りたい情報はこれといってないのだ。

「貴方、霊力が相当弱くなっているけれど何かあったの？」

通りかかったパチュリーから声をかけられた。

「霊力が、ですか？」

「ええ、人並み以上にはなっていたのに最初に見た時より弱く。妹様にでも何かされた？」

「されていないのでこうして調べているのですがね……。ですが、そういう事なら調べる必要はないかもしれません。管轄外ですし」

霊力なんて、使っていても理解できないようなものだ。無理に改善する必要はないだろう。

「死にはしないでしょうから、しばらく様子を見ることにしますかね」

「どうでもいいけど、本は元に戻しておいてよ」

言われた通りに本を元に戻していくが、やはり体の調子は悪い。

だが、出来ることはないと普段通りの生活をしていった。

「侵入者？ 一体何が目的で……」

数週間が過ぎた紅い霧が月光を紅く染める中、勇輝は咲夜に叩き起こされていた。

「そう。霧が広がりすぎたみたいで止めようとしてきた奴が二人。どっちも人間だけど力はそらの妖怪を簡単に消し炭に出来るくらい」

「……化け物の間違いじゃ？」

「いいから起きる。貴方は一階の階段前で待機。その前にパチュリ様と私もいるけど警戒だけはしておく事」

「了解、まあ俺の所まで来ない事を祈ってるよ」

それだけ聞くと、咲夜は急いで持ち場に行くために部屋を出た。

とりあえず、白衣を着て自分の持ち場である階段に行く。

紅魔館の中は張り詰めた空気が充満していて、いつもよりも騒がしい。

館内には爆発音のようなものが鳴り響いているが、気にしないようにする。

「……面倒な。咲夜は倒されたのか出し抜かれたのか」

目の前には箒にのった金髪の少女が。

「メイドなら巫女と戦ってるんだぜ」

「巫女のせいで医者と魔女が戦いになっちまうのか……」

「医者が人に怪我させるのは不味いだろ？ だから通してくれ」

「生憎、ちょっと前に医者から従者に転職したんだよ。大人しく帰って寝ろ」

「この霧を止めてから寝る」

「……聞き分けのない女の子は嫌われるよ？」

少女がいきなり攻撃を仕掛けてくる。もうスペルカード云々ではなく普通の攻撃弾で。

同情するしかない。つい先程、十二時を回ったばかりだ。

霊力、体力、身体能力を修正。ただ、それを一括りの力として修正する。

これであと二回能力を使う事が可能なのだ。

こちらも応戦するために霊力で武器を作り上げる。

「そんな戦い方する奴は初めて見たんだぜ」

「そうだろ？ 俺も初めて使ったからな、これ」

作り出したのは鎖鎌。それも、異様に短い。

「それと、保険をかけとくか」

そう言つて霊力の壁で少女の入ってきた出入り口以外を塞ぐ。

「しまった……」

「俺を通り抜けてお嬢様の所まで行かせる訳にはいかないからな。倒れるつもりはないけど倒してから行け」

「じゃあ遠慮なく。恋符『マスタースパーク』」

「は、ちよっ!?!」

本当に遠慮の欠片もなく使われたスペルカード。それもデカいレーザー的な何か。

かわせば屋敷が壊れる事は必至。なら手段は一つ。

「っ！ 無理だろコレ……普通死ぬつつの！」

馬鹿高い威力のレーザーを靈力の壁で受ける。

尽きる事はないが、全てと言っても良い程の靈力を注ぎ込んだ。もう受けたくない。

「弾幕はパワーだぜ！」

「馬鹿だろお前！ 俺が一般人なら消し炭になってるぞ！」

「普通じゃない場所で暮らす人間が一般人の筈ないぜ」

「……ああ、納得」

咲夜が思い浮かんでしまったのは申し訳ないと思う。

「じゃあ、決闘といこうか。方法はスペルカードルール。枚数無制限、相手が負けを認めるか戦闘不能になるまで」

「分かったんだぜ。魔符『スターダストレヴァリエ』！」

「少しは落ち着けよこの野郎っ！」

其の拾漆

星形の攻撃弾を避け、叩き落とし、こちらも攻撃を仕掛ける。

「そろそろ帰っては……貰えないな」

「当たり前だ。こんな迷惑な異変を放置して置く訳ないだろ」

お互いに涼しい顔で会話しているのだが、その間には無数の弾幕が飛び交っている。

その一つ一つが一撃で相手を昏倒させる程の威力があり、少しでも気を抜いた方が負けるのはお互い理解している。

「異変？ 何の事だ？」

「とぼけても無駄なんだぜ。この霧が人里に住む人を苦しめて、それが結界の外に出るかもしれないんだぜ」

「……あー、そういう事だったか。俺の体調が悪かったのは霧が原因、と」

紅い霧は人間には有毒。たぶん霊力の量が関係しているのだろう。

だから普段霊力の少ない自分には症状が出て、霊力が多い咲夜には影響が無かった。

「分かったらそこを退いて貰うぜ」

「そいつは無理だな。俺も怒られたくないんだよ」

弾幕の嵐が激しさを増す。

「修正『ラビリンスボックス』！」

勇輝がスペルカードを使う。

少女の上下左右前後を五メートル程の霊力の壁で囲おうとしたが、間一髪の所で脱出されスペルカード一枚を無駄にした。

「幻想郷で一番早い私を捕まえようなんて頭が高いぜ」

「ホントに早いな、当たる気がしない」

「なら退いてくれ」

「断る」

「じゃあ帰るからあの壁を消してくれ」

「お帰りは後ろの通路になるんだけどな」

霊力に……少女の場合は魔力だろうか？それに限界があるのは間違いない。

一方で勇輝にはまだ余裕のある大量の霊力、高い身体能力。更にはあと二回有能力使用が残っている。

このまま行けば勇輝の勝ちだ。

「じゃあ帰るから霧を止めてくれ。そしたら大人しく帰るんだぜ」

「悪いけど、俺にその権利は無くてな」

「そうか。なら、魔砲『ファイナルスパーク』」

最初に放たれたレーザーの二倍近くの大きさを持つレーザーが放たれる。

当然受け止めるのだが、レーザーの威力は二倍では済まなかった。

「やべっ、霊力が持たなっ……」

油断した。

大量の霊力を防御に回したが、先程までの戦闘で減ってしまっていたので持たなかった。

スペルカードが何枚も無駄になっていた事も原因だろう。

霊力の盾は割れ、光に飲み込まれる。

「……やったか？」

周りを囲っていた壁が消え、少女は煙の上がる勇輝がいた場所に視線を向ける。

確実に死んだ。そうでなければ目の前にいたアレは化け物だ。

少女がここに来るまでに美鈴、パチュリーを倒して来ているのだが二人ともここまでやる前に決着が着いている。

「あー、死ぬ。絶対死んでた」

「なっ!？」

煙の中から聞こえた声に少女は驚愕した。

少しずつ煙が晴れ、声の主の姿が見えてくる。

「酷えよな。俺だって人間だってのにあんな撃つか？普通」

砕けた床の上で崩れかけた壁に背を預け座り込んでいる勇輝の姿がそこにあつた。

「どう考えても人間とは思えないぜ……」

「それでも全身の骨がボロボロなんだけどな。自身を強化、白衣も強化。それでこのダメージだ、俺はお前が人間かどうか疑わしいよ」

霊力の盾が破壊される寸前に二回、勇輝は能力を使っていた。

一つは、自身の脆さを修正。もう一つは白衣に魔力への耐性の無さを修正。

少女の方も力を使い果たしたのか、箒から降りて座り込む。

「あー疲れた。もう動けないんだぜ」

「人の体をボロボロにしておいて良く言えるな。で、帰る気になったか？」

もう、能力は使えない。どうやらこのままじっとしていなければならぬらしい。

「んー。朝まで寝て行こうかな。どうせ霊夢がもうすぐ来るし」

「図々しいなお前」

先程まで殺し合っていたのに普通に談笑しているのは二人の性格からか。

「お、霊夢」

少女の視線の先には赤と白の巫女装束を着た少女が飛んでいた。どうやら咲夜は負けたらしい。

「魔理沙。アンタ負けたの？」

「勝ったけど引き分けだぜ」

そう言つて魔理沙は勇輝を指差す。

「巫女、咲夜……メイドは生きてるか？」

「さあ、多分生きてると思うけど寝てるわよ」

気絶か永眠か、気絶であつて欲しい。

「家のお嬢様は二階のあの通路の先の部屋にいる。出来るなら殺さずに終わらせてくれ」

「アンタ人間でしょ。さっきのメイドもだけど、どうしてこんな場所にいる訳？」

そりゃあ、好んで吸血鬼と同居する人間はいないだろう。

「咲夜は知らん。俺は外来人だから、どっかで保護して貰わなきゃ食い殺されるだけ。最初はそういう理由だな」

「今はどうして？」

「さあ？ 情でも移ったんじゃないの？」

力は持った。それなのに何故紅魔館に留まるのか。明確な理由は無かった。

その結果、こういった事に巻き込まれているのだが別に恨みなど微塵も無い。

「そう。じゃあ私はここのお嬢様をボコボコにして来るから魔理沙はこいつの見張りね」

それだけ言うと、霊夢は勇輝が指差した通路に飛んで行った。

「見張り……ね」

正直、もう戦えるとは思えない。

「服が汚れちゃったんだけど代わりとかないか？」

とりあえず目の前の少女を先に進めないだけ良しとしよう。

其の拾捌

「へー、便利なのかよく分かんない能力だな」

「そつちこそ、人間で魔法が使えるとは羨ましいよな」

何故か意気投合した勇輝と魔理沙は階段に座り色々と話していた。

「それにしても博麗の巫女、だっけ？そんな規格外なのか？」

「アイツを同じ人間だとは……思えないぜ」

どうやら比べてはいけならしい。

「家のお嬢様も吸血鬼だけど、どう思う？」

「持って一時間」

「ああ、そうですか……」

屋敷内は静かなものだ。どうやら外で戦っているらしい。

「お嬢様は殺されやしねーのかな……」

不吉だが、話を聞いていた限りではその可能性も否めない。

「死んだら私が雇ってやるぜ」

「……あ、忘れてた。ちょっと行ってくる」

フランが地下室にいたのを忘れていた。

万が一にでも今出てこられたら…考えたくない。

「急用か？」

「ちょっと感情的なお嬢様の妹の世話を。趣味は弾幕ごっここの危ない子だ」

痛む体を無理やり立たせ、地下への階段に向かう。幸い、ここからなら直に行ける。

「肩ぐらいなら貸すけど？」

「お構いなく。どうせ多少無理しても日付が変われば全快するよ」

魔理沙も疲れているだろう。むしろそうであってくれなければ幻想郷の人間を人間として見れない。

歩くこと十数分。地下室の扉を静かに開いて中を確認する。

「あ、お兄様だ。もう朝なの？」

どうやら気づいていないらしい。良かった、本当に。

「ちょっと寝苦しくて歩き回ってたら階段から落ちてな。それで目が覚めたから様子を見に来たんだ」

階段から落ちたにしては切り傷や擦り傷が少ないが。

「ふーん……」

少し疑うような視線を感じるが、何とか取り繕う。

「お兄様」

「どうした？」

「お兄様の怪我の辺りに知らない魔力を感じるの」

「き、気のせいじゃないのか？」

少し顔が引きつったのが自分でも分かる。

「それに、お兄様が部屋に入って来た時にお姉様が本気で戦ってるのを感じた」

どうやら、地雷を自ら踏みに来てしまったらしい。

「これだけは教えて。フランのお兄様に手を出したのは……誰？」

自分以外に向いている殺気の筈なのに寒気がした。あのフランと最初に戦った時よりも凄まじい。

「……お嬢様だけじゃ手に余るらしい」

誰とは言わない。今のフランと魔理沙が戦えば……魔理沙は死ぬ。

「分かった。お兄様は大人しくしててね」

すみません、博麗の巫女さん。

少し死ぬ気で頑張ってください、お願いします。

ニコニコと笑いながら部屋を出ていくフランを止めるには、勇輝は色々と足りなさ過ぎた。

「むきゅっ……」

魔理沙と戦い、最終的に本の山に潰されたパチュリーは小悪魔に救出されるも気絶したままだった。

「パチュリー様あ、しっかりして下さい！」

小悪魔が涙目で必死に起こそうとしているのは、つい先程地下室から巨大な妖力の持ち主が出て来たため。

確実にフランだが、だからこそ屋敷の外に出してはいけない。

吸血鬼の弱点を突くには、パチュリーの魔法が必須だった。

紅い月の夜は更けていく。

「くっ……」

レミリアはやはり、苦戦を強いられていた。

「そろそろ、終わりにしようかしら」

霊夢がスペルカードを取り出した。

「私が、人間なんかにつ……」

レミリアは身体中に傷があり、服もボロボロ。

しかし霊夢は服こそ少し破れているが目立つ傷は一つも無い。

一方的という程ではないが、圧倒されているのは間違いなかった。

「霊符『夢想封印』！」

七色に輝く七つの巨大な攻撃弾。それがレミリアを襲う。

レミリアはそれを避けたが、一つだけ勘違いをしてしまっていた。

その攻撃弾が真っ直ぐ飛ぶものだと思ってしまったからこそ、自分の後を追ってきた弾に反応できない。

敗けを覚悟し、レミリアは目を瞑る。

しかし、いつまで経っても弾がレミリアに当たる事は無かった。

「お姉様、勝手に出てきたけど今回は許してよね」

フランがレーヴァティンを使い、攻撃を相殺したのだ。

レミリアは驚きを隠せない。

“あの” 自分勝手なフランが。

“あの” 自分の興味が無いものを直ぐに壊すフランが。

“あの” 精神的に不安定で気の触れやすい…

「お姉様。アレを見て思ったんだけど、フランでも勝てないかもしれないけど……どうする？」

「あー、ヤバイ。幻想郷も今日で終わりかな……」

ボロボロの体を引きずり、魔理沙と庭に出た勇輝は空を見上げる。

二人の悪魔と変わった巫女が向かい合う、紅い空を。

「お前はあの金髪の娘が出てこないように行ったんじゃないの
か？」

「自ら導火線に火をつけちゃったらしい」

「役立たずだな」

否定は出来ない。

空気が張り詰めたものになる。どうやら闘いが始まってしまっ

しい。

「二対一、卑怯とは言わないけど面倒ね」

とは言っても、レミリアは相当消費が激しい。どう考えても勝ち目は無い。

風が吹いた、それを切っ掛けに弾幕が飛び交う。

レミリアとフランの二人の弾幕を、霊夢は危なげながらも的確にかわしていた。

フランは早くも当たりそうになってしまった。

吸血鬼の体は人間よりは遥かに丈夫だ。だが、それを些細なものに変えてしまうほどの威力を持った攻撃を霊夢は撃ち出していた。

博麗の巫女として生まれ持った才能と力。それが人間と妖怪との差を無くしている。

そして、勇輝と魔理沙は思い知らされる、彼女達との差を。

攻撃の質も、量も彼女達と比べたら赤子同然の力。

勇輝はフランと、レミリアと戦った事がある。だが二人とも本気では無かった。

もし二人が最初から本気を出していたら、勇輝は今生きてはいない

だろう。

恐ろしくも美しい、弾幕の嵐。

それも長くは続かなかった。

レミリアが限界を迎え、被弾してしまったのだ。

力なく地面に落ち、体を叩き付けてしまう。

そして、ここからは不運としか言いようが無かった。

目の前の敵の強さに冷静さを失ったフランの、容赦の欠片もない攻撃がレミリアの倒れている場所に向かっていった。

其の拾仇

何故だか、分からなかった。

レミリアがやられて、地面に落ちて、フランの攻撃がレミリアに向かって行つて…。

どうして俺は走っている？

吸血鬼がアレで死ぬとは限らないのに、自分の方が死ぬ確率は遥かに高いのに。

レミリアの腕を掴んで、思い切り投げる。

魔理沙と戦った時に使った身体能力の強化、どうやらかなり役に立ってしまつたらしい。

身体がもうどうなっているのかすら分からない。神経に異状でもあるのだろうか？

目の前に妖力の塊である光の弾がある、あれ程速かつたのに今はとてもゆっくりに感じた。

だけど身体は動いてはくれない。

上空のフランがとても、後悔したような表情をしている。

レミリアは何が起こつたのか分かっていないような顔、魔理沙は驚いているようだ。

巫女さんは後方にいるからどんな顔をしているか分からない。

死なないが、身体が再生する訳では無い。

能力は既に使い切ったし、身体が残るかすら分からない。

走馬灯というやつだろうか、まだ考えている時間がある。

何故レミリアを助けたのか答えは考えなくても、なんとなくわかる。

助けたかったのだ、人を。

レミリアは吸血鬼じゃないか、そう思う自分も居るが、会話をし関係を持った彼女を切り捨てる事は出来なかったようだ。

目を閉じる。

医者としてではないが、目の前の命を救うことが出来た。それで良いのではないか？

そういう行為を続けていく事が目標で、その手段として医者を目指したのだから。

昔の自分のようにはなりたくなかったから。

そして、フ란の攻撃は地面と一緒に勇輝の姿を抉り取った。

その時、勇輝の存在は幻想郷から消え去ってしまった。

後日、紅い霧は消えレミリアは霊夢へ謝罪。紅霧異変は終結した。

「お嬢様、体の調子は如何でしょうか？」

数日後、紅魔館は以前……勇輝が来る前と変わらぬ生活が送られていた。

フランはあれから一度も出て来ていないし、食事も摂っていない。

美鈴は包帯が取れていないものの、門番の仕事を再開している。

パチュリーは相変わらず図書館に引き籠り、小悪魔はその世話を。

そしてレミリアは……。

「咲夜、あれはもう出来ているの？」

「はい、人里から先程運んで屋敷の裏に」

「そう、着いてきなさい」

後悔していた、あの紅い霧を使った事を。

咲夜から日傘を受け取り、屋敷の裏へ。

そこには墓石が設置されていた。「y u k i - s a k u r a i」と刻まれている。

勇輝の名前は分かるが、文字は知らない。

今までに何人も人間の死を見てきたが、こういったものを作ることには無かったので平仮名は止めておいた。

十字架だと近づけないので、ローマ字の刻まれた日本風墓石と奇妙なものになってしまったがこの際それは置いておく。

「咲夜、少し一人にして貰っていいかしら？」

咲夜は無言でその場を立ち去る。

それを確認すると、レミリアは墓石の前に屈んで話し始めた。

「勇輝。何故勝手に死んだのかしら？」

答えは返ってこない。

「貴方の能力なら、万が一私が死んだとしても生き返らせる事が出来たんじゃない？」

確かにそれは可能だっただろう、勇輝も一度生き返った身だったのだから。

「勝手に来て、勝手に居なくなつて……どこまで私たちを困らせれば気が済むのかしらね……」

最初は、手頃な食料としてしか認識していなかった。

「いつもフ란の相手ばかりしていたわね、咲夜に聞いた限りだと面白そうな事をしていたらしいじゃない？」

実は、咲夜に何度も監視をさせていた。そして自分でも能力を使つて見ていた。

フ란はとてもよく笑っていた。楽しそうに、幸せそうに。

「まだ一度も私とは遊んでいなかったのよね……」

レミリアも、数百年生きていようと本質は子供だ。

我儘で、だけど紅魔館の当主としてそれを隠し大人のように振る舞つて。

「そういえば、命令は忘れてはいないわよね？」

答えは無い。それにレミリアは耐えられなかった。

「……………なさい」

絞り出したような声、だがそれは更にレミリアの感情を揺さぶる。

「戻つて来なさいよ！ 従者でしょう？ 主の命令を聞かないでっ…………私をこんな気持ちにさせてっ…………」

本当は羨ましかった。勇輝に甘えているフ란が。

本当は近寄りたかった、だけど無駄なプライドがそれを許さなかった。

「どうして……答えないのっ……！」

レミリアは泣き崩れる。

名を刻まれた墓石の前で。

「お嬢様っ！」

「咲夜……？」

いつもとは違い、冷静でない咲夜が駆けてきた。

「仕事をサボったあの中国が、人里でっ……」

……本当に冷静さを失っている。

「白い奇妙な服を着た男の噂を！」

レミリアは目を見開く。が、直に冷たいような、何か恨むような表情に変わり……。

「お嬢……様？」

「咲夜、屋敷をトラップだらけにしないで」

墓石を思い切り壊し、咲夜に告げる。

「ですが……」

「あの馬鹿だった場合、次は無い事を教え込まなければいけないの」
レミリアはそれだけ言うたとさつさと屋敷に戻ろうとする。

「お嬢……分かりました」

日傘ではつきりとは見えなかったが、笑っていた。

「トラップは軽めでいいわね」

咲夜も屋敷に戻る。

残されたのは、下に何も埋まっていない壊れた墓石だけ。

「凄いな、チルノ」

紅魔館への道で、最大の難関は湖だった。

飛べるように能力で補えばいいのだが、どうなるか分からないのであまり使いたくない。

なので、偶然見つけたチルノに湖を一部凍らしてもらった。

「当然よ、あたいは天才なんだから！」

「ありがとうな、また今度も頼むよ」

最初の餌付けが良かったのかもしれない。人里で傷を癒している時に貰ったお菓子で素直に聞いてくれた。

とにかく、紅魔館に向かわないといけない。

湖を渡り、森を駆け抜けて紅い建物を目指す。

あの場所に、帰るために……。

其の貳拾

「さあ、説明して貰おうかしら」

屋敷に入ったと思ったら、急に視界が反転し逆さづりにされ縄で巻かれてレミリアに差し出された。

「えーと、死んですらいませんでした」

言った瞬間、頬をナイフが浅く切り裂いた。

レミリアの隣に立つ咲夜の仕業だ、次を構えている。

「勇輝がふざけた返答をすると咲夜がナイフで攻撃するわ、次は足よ」

二人共本気だった。

「フランの攻撃が当たる瞬間、地面にスキマのようなものが現れそこに落ちました。そこで幻想郷の管理者の一人だと言う妖怪に会い、人里に飛ばされたんです。勿論、紅魔館に送るように頼んだのですが聞き入れてはもらえませんでした」

八雲 紫と名乗る妖怪に会った。何処かで会った気がしたが気のせいだったのだろう。

自分に興味があるらしく、偶然起きていたので助けたらしい。

「そう……。それで、何か言いたい事はないのかしら」

「言いたい事ですか？……ああ、お嬢様が無事でなによりです」

言った瞬間、レミリアが椅子から立ち上がり勇輝の側に近寄る。

そして、勇輝の頬をつねった。

「おひょうはは！？」

何故頬をつねられているなか分からない。そして力が強い、物凄く痛い。

「勇輝は私を心配させておいて、まだそんな態度をとるのかしら？
この口が悪いの？ それとも勇輝の頭には何も詰まっていないのかしら？」

そう言い終えると、レミリアは手を離れた。

「申し訳ありません。では、どう言った反応をしたら良かったのでしょうか……」

咲夜から二度目のナイフの投擲。

体を捻って避けたら、縄を切り裂いたのか巻き付いていた縄が落ちた。

「本当に馬鹿ね」

それだけ言って咲夜は部屋を出ていく。

「今から三つ数える前に何か言いなさい、言わなかったり下らない返答をしたら従者から奴隷に格を下げるわ」

レミリアの発言に勇輝は動揺する。

何を言うべきか。検討が着かないのだ。

そして、レミリアの目は本気だった、間違えば奴隷どころかミンチにされそうな。

「一つ」

思い出せ、ミンチになりたくないのなら。

「二つ」

早く、早く何かっ……。

「三つ。さて、遺言はなにかしら？」

「……お嬢様」

勇輝は慌てるでもなく、静かに口を開いた。

「心配をお掛けしてしまい、すみませんでした。それと、しばらく紅魔館を離れてしまっていた事、深く反省しています。不甲斐無い身ですがこれから従者としてお仕えしてもよろしいでしょうか？」

その返答に、レミリアは満足したような表情をして。

「駄目よ。勇輝は今日でクビね」

「はい？」

「従者どころか奴隷にもいらないうらいだわ。だから…」

レミリアは勇輝の手を握り、告げる。

「あの日、私の勝ち取った命令の権利、覚えているわよね？ 今日、今から勇輝は私の友人として接しなさい。勿論、呼び方はお嬢様ではなく名前で」

少し呆氣にとられてしまった。

何か変わった事を言われるとは思ったが、ここまで予想外だとう反応して良いのか分らなくなる。

一番ありえそうだと思ったのは家畜だった。虚しいが。

「何？ 拒否は駄目よ。これは勝負で勝ち取った公平な権利だっていうのは勇輝も認めたでしょう？」

「いえ、そのような事に使われるとは思ってもみなかったの…」

「友人に敬語で話すの？ フランにはあれだけ砕けた話し方をするのに」

「え？ ああ、クビなんて言われたからマイナスなイメージしか浮かばなかったんだ」

「……切り替えが早いのね」

「そういう性格なんだ」

とは言っても敬語で話していた期間が長かったのでたまに戻りそうだが。

「それで、俺は従者じゃなくなったらしいけど住む場所はどうなる？ 人里にも面識ができたから出ていく事はできるけど」

「あの部屋を使っているわよ。どうせ余っているのだし」

金持ちの余裕というヤツか。

「じゃあ、そうさせてもらおう。フランにも会ってくるよ。もしかしたら自分のせいだと思い込んでショックを受けてるかもしれないし」

そう言うと、レミリアは嫌な事を思い出したかのように。

「アレは……病んでるわね」

どうしよう、行きたくない。まだ生きていたい。

だが時間が経てば経つ程に状況は悪化してしまうかもしれない。

「とりあえず、生きて帰ってくる……」と思う

「そこは言い切りなさい。それと……」

レミリアに腕を掴まれ、組み伏せられる。

勇輝の上で馬乗りになり、その幼い顔を近づけてくる。

「あの二人が食料庫を破壊してたみたいで、ストックが無くなってお腹が空いているの」

首筋に噛み付かれる。

注射器の採血とは違う感覚に、背筋に鳥肌がたった。

フランにも一度直接吸われたが、あれは傷口から出た血を飲んでいただけだった。

十数秒の間、二人は無言だった。

「ん。もういいわよ。小食な方みたいだからこれで十分」

「……従者はクビじゃあなかったのか」

「ええ。でも友人が困っているのに見過ごさないでしょう？勇輝は確かに自分に出来る事ならやりかねないので反論できない。」

「実は普通の人間と同じ食べ物でも死なない程度の生活が送れるのだけれどね」

「は？ いや、じゃあ今の行為の意味は？」

「無駄ではないわよ。人の血を吸わなければ妖力が落ちてしまうもの」

「そう……。じゃあ、フランの所に行くよ」

「分かったわ。あと……」

レミリアがその小さな腕で勇輝の頭を抱きしめた。

「……おかえりなさい」

「ただいま。でいいのか？」

フランは鎮めるのに半日程費やした。二度と無茶はしないと誓おう。

其の貳拾（後書き）

これで紅魔郷は終結ですね。

多くの方に見ただけでるようで嬉しいです。

幼稚な文章や表現であるかもしれませんが、これからもお付き合いいただけたら幸いです。

其の貳拾巻（前書き）

とりあえず新章的なモノをスタート、春までこんな感じですよ。

其の貳拾巻

「これはどういう事かしら？」

「あ！？それ…」

レミリアに呼び出されて来てみると、頭に鳩を乗せたレミリアがいた。

「そいつは伝書鳩だ。人里にいた時に捕まえてなつかせたんだよ」

「だから、どうして鳩が紅魔館の、私の頭の上にいるのか説明して」

確かに伝書鳩は用意したがレミリアの頭の上に乗るような飼育をしたつもりは無い。

「えっと、人里には医者がいなくってな。十年ぐらい前に死にまったらしくて代わりに診察や治療をする事にした」

「その連絡方法がこれ？」

「里に住むのが一番楽なんだけど、フランが何を言うか分からないからな…」

「住めばいいじゃない？」

「へ？」

「フランは説得してあげるから、人里に住めばいいじゃない。週に

一度帰ってくるのが条件だけだ」

そういえば従者ではなくなったのだし、特に縛られる必要は無いんだ。

「じゃあ、一度里に行ってみて考えてみるよ」

鳩の足に巻かれた紙を外し、鳩を両手で抱えて部屋を出る。

先に近くの窓から鳩を飛ばし、自分の部屋からバッグを持ち出す。

バッグには紅魔館で使うことはなかったが、手入れはしっかりした医療器具が入っている。

流石に薬品は無いが、診察するだけなら問題ない。

紅魔館から人里までは歩いて二時間ほどかかってしまう。湖も渡らないといけないのでチルノを捜さなければいけないので更に時間がかかる。

人里からの手紙によれば、畑仕事の最中に人が倒れたとの事だ。熱中症だろう。

最悪、命に関わるので急がなければいけない。

「能力を使うか…」

しかし、どういう欠陥を修正したらいいのだろうか？

飛べない。は人間として欠陥ではないように思い込んでしまってい

るからか、出来なかった。

そう考えると身体能力や霊力も欠陥ではない気がするが、実際に足りない危機があったので欠陥と認識出来ている。

「…落ちればいいのか」

が、そこまでの度胸は無い。失敗したら今度こそ死ぬる。

「あれ？勇輝だ」

湖に出た所でチルノに会った。今日は運が良い。

しかしその隣に黒い球体がふわふわと浮いている、触れないでおこう。

「ちょっと人里に行きたいんだけど、頼めないか？」

「分かった。お礼はお饅頭でね」

チルノが湖の一部を凍らせる。これで人里に向かう事ができるのだ
が…。

「チルノ…こいつは何がしたいんだ。というか何だこれは」

黒い球体が背中に体当たりしてくるのだ。威力がないので痛くはないが、鬱陶しい。

「ルーミアだけど、それが？」

「…質問が悪かったな。この黒いものは妖怪ですか、教えてください」

「うん、妖怪。確か人食い妖怪」

逃げた。聞いた瞬間に全力で湖の凍った部分を走る。

しかしついてくる。何故かスピードを上げて。

「…恨むなら自分の行いを恨めよ」

手に霊力を集め、黒い何かに向けて放つ。

黒い何かは自分からも当たりに行き、当たって弾けた。

「……妖怪は子供が多いのか？」

黒い何かが霧散し、中から小さな少女が出て来て。

湖に落ちた。

「やっちまっ たっ！」

急いで鎖型の霊力弾を作り、落ちた少女を引き上げる。

この湖、魚型の妖怪が腐るほどいるのだ、しかも肉食。

どうやら被害は無かったようだが、目を回して気絶していた。

「おい、起きろー」

頬を軽く叩いて目が覚めるのを待つ。

「…うん」

どうやら気がついたようだ。

「……誰？」

そしてさっきまでぶつかって来たことを覚えていないのか、初めて見たような顔をする。

「あっちの館に住んでる人間。名前は桜井勇輝」

「そーなのか…。…食べていい？」

「駄目だ」

「そーなのかー」

……チルノとは違うタイプだが、この子は、馬鹿だ。

適当にあしらって人里に向かう事にした。

チルノが早く見つかったお陰で、時間があまりかからなかった。

しかし、ゆっくりしていたら患者がどうなるか分からない。

身体能力を修正し、急いで人里に向かった。

「先生！こっちです」

人里に入って直ぐに呼び止められ、倒れた人の場所へと案内された。連絡があつてから一時間も経っている。速足に患者の元に向かうと、五十代ぐらいの男性が木陰に寝かされていた。

「……熱中症ですね。過呼吸になつたりしませんでしたか？」

「いきなり倒れて、直ぐに気を失ってしまいましたので……」

「なら良かった。暫くは過度な運動はさせないでください、特に日中は。それと今からでも水と塩分を摂らせて下さい」

「塩ですか？」

「はい、汗で体の塩分と水分が不足した事が大きな原因なので」

「分かりました！」

そう言つて倒れた男性の娘だろうか、女性が近くの家に向かって走つていった。

とりあえずは大丈夫だろう。そう思つて次の目的地に行こうとしたが。

「先生！」

さっきの女性があわてて戻ってきた。

「どうかしました？」

「その、塩を切らしてしまっていて…。元々、幻想郷には海が無いので湖から少量だけしか採れなく、妖怪も出るので…」

「そうでしたか……。一先ず、親御さんでいいのかな？この人を家に運びましょう。日陰で風通しの良い部屋にお願いします」

そう言つて、勇輝が男性を背負う。

思つたより軽い。自分の力が上がっているからか、男性が本当に軽いのかは分からないが。

恐らくは両方。食料は自給自足、妖怪も出る。これでは満足に食事を取れる事の方が少ないだろう。

「ここでいいでしょうか？」

案内されたのは寢室。冷暖房が無いのでこういった位置に寢室があるのだろう。

「はい、申し分ないですよ。では起きたら十分な水分を取らせ、休ませて下さい」

「はい、ありがとうございました」

これは困る事も多そうだ。

勇輝は女性に一礼してからある場所に向かった。

其の貳拾貳（前書き）

色々と投げ遣り気味。あまり気にせずお読み下さい。

其の貳拾貳

「久しぶりだな、今日はどうした？」

「二人目の患者を見に来たのと、一つ慧音さんをお願いがあるんです」

上白沢慧音、半人半獣であり人里の私塾で教師をしている女性だ。

以前、紅魔館に行く前に人里に立ち寄った時に面識を持っていた。

「ああ、大抵の事なら引き受けるぞ。あの時の借りも返せていないしな。但し、一般常識の内で頼む」

「常識かどうかは微妙なところですが、空いている家屋がないか教えて欲しいんです。それと、可能ならそこに住みたい」

「？ 何の為に」

「病院とまではいきませんが、診療所を開こうかと思ひまして。だからと言つては難ですが、可能な限り里の中心……それに少し余裕のある広さが望ましいですね」

「それなら丁度良い物がある」

随分と早く、軽く一軒家を持つことになった事に物足りなさや不安を感じるが、この際どうでもいいかと気にしないようにする。

案内されたのは少し多きめで庭もある、少し洋風な建物。

「ここは昔いた医者が使っていた建物でな、そいつには子供も兄弟も居なく、ずっと空き家になってしまっていたんだ」

「……それは随分と都合の良い……というか、医者の一人や二人いてもおかしくないですよ」

里の広さは半径五キロ、人口は三百程度。むしろ年単位でいなかったことの方が疑わしい。

「無理もないんだ。里の者は皆、田や畑、家畜の世話で精一杯。年寄までな。それに子供には任せられんだろう？」

「……そうでしたか。一応聞きますが年間の死亡者数と出生数は分かれます？」

「詳しくは分かんが、死亡者は二十前後、出生数は七、八ぐらいだな」

「死亡者の内、七割が病死。ぐらいですか？」

「後は妖怪の被害だ」

「どうやら思った以上に深刻らしい。」

生まれてくる人数の倍以上の人間が死んでいる。これでは遅かれ早かれ里は死ぬ。

「慧音さん。ありがとうございました。少し建物の中を整えてから挨拶に回ります」

「ああ、頑張ってくれよ」

慧音を見送ると、建物の中へと入る。

中は特に壊れた箇所は無く、変に変わった所は見つからない。

「埃は多いが……特に何もないな」

だが、あまり時間をかけるのは得策ではない。

欠陥である埃、汚れ、弱くなった木材等を能力で修正。

荷物を書斎のような部屋に置く。

どうやら診療所の役割も兼ねてくれていたようで、ロビーや診察室。その他には寝室、書斎、リビング。

前の家主の私物は残っていなかった。

外見もだが、中も洋風な作りになっていた。これは嬉しい誤算だ。

今更だが、幻想郷はどこにあるのだろうか。

言語からして日本、しかし里は武家屋敷やこのような洋風な建物があり、それでいて外との通信や流通は無い。

それに、紅魔館も……いや、気にしたら負けだろう。

挨拶回りをしていて、こんな若いのに大丈夫か？とか何者なんだろう

う。そんな反応が返ってくるかと思ったがそれは違った。

「そうかい、それは助かるねえ。時間があるならお茶でもどうだい？」

ある人には歓迎され。

「貴方はあの時の！ 本当に先日はお世話になりました、これで恩を返せるなんて思ってもいませんが持つて行ってください」

ある人にはもう……感謝しかされなかった。

実は人里に立ち寄った（妖怪に上空から落とされた）時に病にかかった子供を治療したのだが、それがこういった結果をもたらしたのかもしれない。

外では見ない病だったが、以前に紅魔館の図書館で読んだ知識が役に立ち、無事に助ける事が出来たのだ。

そのせいでフランに……思い出すのも嫌だ。

とりあえず、挨拶回りを終えて診療所に帰る。

何やら外の品物を扱った店もあったので今度見に行くとう。

「……飯、どうするかな」

次の問題。衣と住はどうにかなった。食はどうしようか。

通貨は外と変わらないので数日は持つ。が、それ以降はどうしたら

良いだろうか？

毎日のように病人が来る訳でもないし、里の人に分けて貰うだけというのは申し訳ない。

先程も、少しの米や野菜を貰ったのだが三日分ぐらいだろう。

副業を始めるか、自給自足をするか。どちらかを選ぶしかない。

「ん？」

足音がした。今いるのは書斎だが、木造のせいか音が伝わりやすい。

それに、足音はここに近づいてきているのだ。

数年空き家だったというし、誰かが来ることは無いと思うのだが…。

それに、何時間もかけて全ての家に挨拶回りしてここに住むことを告げたのだ。

と、言う事は患者だろうか？しかし取り付けた呼び鈴は鳴っていない。

ガチャツという音がしてドアが開く。そこにいたのは…。

「……勇輝？ あれ、死んだはず……そもそも何でここに」

黒い服に白いエプロン、そして大きな帽子の少女。

「魔理沙……お前何しに来たんだよ」

「ここは私の勉強部屋みたいなものだぜ。勇輝は何で生きてんだ？」

「死んでないんだよ。逃げたんだ。それに、今日からここが俺の家だ」

「就職難か、大変だな」

「いやクビになった訳じゃねーよ。それと、お前の家は？」

「あるぜ。魔法の森に」

「ん？じゃあ霧雨店って道具屋は？」

「知らないぜ」

何か聞いてはいけないような空気なのでこれ以上の詮索はしないでおく。

「他に私物が無いのに本だけ残ってんのはおかしいと思ったけど魔理沙のだったか……」

よく見ると、本のタイトルは怪しい物ばかりだ。全てが魔法に関係しているようだ。

「勇輝が住むんじゃ仕方ないな。本は少しずつ持っていく事にするよ」

「別に構わないけどな。本は一冊しか持ってないし、大体の事は暗記するように心がけてるからな」

「そうか？　ならそのままにさせてもらっぜ」

少し話をして、魔理沙は家に帰って行った。が、何かを思い出したように戻ってきて一冊の本を持って行った。

……そういえばレミリアに住む場所が見つかった事を報告しなければならぬ。

其の貳拾参

目を開けると、知らない天井だった。

「……ああ、住む場所変えたのか」

里に住み始めて二日目。時計が無いので時間が分からない。

寢室から出て、まず始めに向かったのは書斎。目的はその机の上にある大量の書類が何か。

「……さっぱり分からん」

実は、昨日魔理沙が帰った後、能力を使ってある知識の欠陥を修正して紙に書いて残したのだが、理解できたのは三割程だった。

そこに書かれていたのは薬品の作り方、材料、材料の取れる場所。

材料の名前だけ書かれていて、どんな姿形をしているのかまったく分からないのだ。

大学で取り扱ったり、紅魔館の図書館で見た図鑑に記されていたものは辛うじてわかるだけ、そしてその材料だけで作成できる薬は二種類。

傷薬と、胃腸薬。

「…傷薬はともかく、胃腸薬は」

そんな頻繁に腹痛の患者が現れるのか……無いな。

診療所を開いたからと言って、診察しか出来ないのでは役に立たないし生活費が稼げない。

幸いにも傷薬の作り方は分かるのだ。それを優先して作ろう。

傷薬の材料が書かれた紙を拾い上げ、確認する。

薬草が数種類。採れる場所は……。

「妖怪の山か、博麗神社周辺の森。後は霧の湖周辺か……」

妖怪の山、霧の湖の場所は分かるが博麗神社はどこに在るか分からない。

住んでいるのはあの巫女さんだろう。きっと神社周辺には妖怪が近寄らないで、安心して薬草が摘めそうだ。

あの巫女さんに近づく妖怪なんて……無謀を通り越して自殺志願者だ。

そうと決まれば場所を聞きに行く。慧音は私塾を開く時間だろうし、適当に見つけた人に聞けばいい。

薬草を放り込むための鞆を持ち、診療所の玄関の掛札を『本日休診』にして出ていく。

掛札は夜に作った。別に暗くなって明かりがなくて他にやる事がなかった訳ではない。

診療所を出てすぐに、一人の男に会った。

「少し聞いてもいいでしょうか？」

「はい？」

何故かブラウン管テレビを運んでいたが、そこは聞かない方がいいのだろうか？

「博麗神社ってどこにあるか分かります？ 昨日越して来たばかりでどこへ向かえばいいのか分からなくて」

「それなら東の端だ。歩くなら二日、飛ぶなら半日で着く」

「……マジかよ」

二日は…そんな診療所を空けるのは医者としてどうなんだろう。薬草を探す時間も含めて五日。駄目だ、そんなに空けられない。

「知り合いに数時間で行ける女の子がいる。頼むか？ 今日来るかは分からないが」

「…ああ、頼むよ。診療所の桜井だ。診療所で待てばいいか？」

「香霖堂の森近霖之助だ。別にどこで待とうと構わない」

「香霖堂…ああ、あの店か。見て待っていてもいいか？」

「邪魔さえしなければ」

この無愛想な奴が店員とは……まあ小さな里だし良いのだろうか。それと電気もなく電波も通じないのにそのテレビは何に使うのだろうか。

霖之助の後に続き、香霖堂へと向かった。

「凄いモンだな、これは……」

香霖堂に並べられていたのは勇輝が見慣れた、外で使われている物。霖之助はブラウン管テレビを空いている場所に置くと、レジの置かれたカウンターの椅子に腰を降ろし、置いてあった新聞を読み始める。

……子供なら泣いて逃げかねない空気の重さだ。

「この商品はどうやって仕入れてるんだ？」

「稀に幻想入りしたものを拾っている。使える物も、使えない物も」成程。見た感じ電化製品もそれなりに有る、それに外から来た身としては目ぼしい物ばかりだ。

まずパソコン。アレさえ使えたらいろいろと楽になる。薬品のリストや患者のカルテ、そういったものが作りやすくなる。

次にエアコン。もはや現代人には必須だった物。

残念ながら発電機は無いようだ。あればセットで借金して……土下座してでも買った。

「……残念だよな」

思わずため息を吐いてしまった。

「何が残念なんだ」

「ああ、俺、半年ぐらい前に幻想郷に来ただけどさ、こいつらが使えたらよかったのになーって思ったんだよ」

「使用方法が分かるのか！？　どうやったら使えとかが、使うために何が必要なのかとか」

「まあ、一応は」

「じゃあ、さっき拾ってきたそのテレビというものはどうしたら情報を受信できるようになる」

「そいつは無理だな。発信元の電波が幻想郷まで届かない……携帯も圏外だったし」

「そうか……ならこのストーブは？」

「これは、ここに石油を入れてここに電気を通せば……」

「電気か……。雷を使うのか？」

「ぶっ壊れるぞ。発電機があれば良かったんだけど……」

「作れないのか？それは」

「いや、作り方が……」

分からないなら、能力を使えばいいじゃないのか？

「……分かるな、うん」

「本当か！」

「ただ、材料がな……」

材料の取れる場所も、加工方法も能力で知れば……。

「希少な物なのか？」

「何とかかなりそうな気がしてきた」

レミリアに医者を辞めて職人になれと言われた事もあったが、副業でそれも良いかもしれない。…本職の方に申し訳ないが。

片手間で自家発電を一から作るとか、どんな天才だよ。

「森近。協力して発電機を作らないか？ 勿論二台」

「是非頼む。協力は惜しまない」

この日は人知れず、幻想郷現代化計画が発案された日となった。

「仲良いな……何時の間に勇輝と香霖は仲良くなったんだ？」

「あれ？ 魔理沙。昨日以来だな」

「知り合いか。なら丁度いい、箒に乗せて行ってもらえ」

「え？ その女の子って魔理沙なのか？」

確かに紅魔館で戦った時に箒に乗っている所を見たが…早かったな、弾幕が追いつかないのだから。

「勇輝は私に用があったのか？」

「んー、博麗神社まで行きたかったんだけど。頼めるか？」

「いいぜ。私は幻想郷で一番速いから神社までなら直ぐ着くぜ」

「それは頼もしいな。それよりもこの店に用があったんじゃないのか？」

「無い。香霖は品物を売る気も無いしな」

……エアコンを診療所に取り付ける夢が一步遠のいてしまった瞬間だった。

其の貳拾参（後書き）

気にしたら駄目です。色々と…。

其の貳拾肆

「境内には……あまり来たくなかったんだけどな」

魔理沙にしがみついて箒に乗り、夕方に迎えに来るからと境内に落とされた。

実は少し巫女さん恐怖症を患っている。原因は言わずともあの時の事だ。

殺されそうになったのはフランだが、その二人を圧倒していた巫女さんを怖がっていけないのだろうか？

魔理沙に負けた自分を攻撃しなかった所を見ると、戦闘狂ではないようだ……妖怪と間違えた。なんて理由であの世に送られる気がする。

しかし、随分と古い神社だ。見た感じでは百年以上前からあるのではないだろうか？

折角だし、お参りをしてから薬草を摘みに行こう。

財布を取り出して中を確認すると、小銭が殆ど無かった。

仕方ないので五百円玉を賽銭箱に放り込む。そして鈴の付いた紐に手をかけようとした時……

「ちょっと!」

後ろから肩を掴まれた。まったく気配を感じなかったので体がビクツと震えてしまう。

「今、いくら入れたの……？」

カクカクと不自然に強張った首を回して肩を掴む相手を見ると、あの時の巫女さんだった。

「五百円……です」

「ありがとうございます！」

物凄く感謝されました。

更に、お茶まで出していただきました。

「ああ、そうなんだ……」

話を聞く限りでは、こんな場所にある神社に来る物好きは妖怪だけらしい。人間は道中の妖怪が恐ろしくて近づかない。つまり、賽銭による神社の収入はゼロ。

「それで勇輝さん。どうして博麗神社に来たの？」

賽銭の影響か、さん付けで呼ばれてしまっていた。まあ年も上だろうから違和感はない……はずなのだが。

霊夢と同じか年下の魔理沙、見た目少女のレミリアには呼び捨てにされているのでこう……何かむず痒い感じがする。

「ああ、紅魔館を出て人里で診療所を始めたんだけど、薬がまだなくてな。その材料の薬草を採りに来たんだよ」

「……医者、つまりは……」

霊夢がブツブツと何かを呟く。お金、とか収入、と不穏な単語が飛び出す辺り、相当金銭面に厳しい。

まさか脅迫されて金を搾り取るつもりではないだろうな。なんて考えてしまう。

湯飲みの中のお茶を飲み干して立ち上がる。

「じゃあそろそろ行くよ。お茶ありがとう」

薬草は自然に影響が出ないくらい取るつもりなので、時間は多い方がいい。

「ちょっと待って！」

ガシッと、霊夢が白衣を掴む。

「私も手伝うわ。どうせお客さんは来ないし、神社の周りは妖怪だらけだから」

「……はい？」

妖怪が、多い？

少ないと思ったからこんな遠くまで来たのですが。

ちよつと霊夢さん？もしかして妖怪退治サボってませんか？

なんて不満を感じながらも素直に手伝ってもらう事にした。

もちろん霊夢の考えはこうである。

「医者ならお金持ち、つまり仲良くなれば遊びに来て、神社に来たら賽銭を……」

勇輝が薬草を探している時、ずっとこんな事を呟いていたとか。

そして時間は過ぎていき、太陽が降り始めていった。

「……昼飯、考えてなかったな……」

爆発音の鳴り響く森の中で、空腹を感じ辺りを見回す。

木、草、妖怪、巫女さん。食べられそうな物はない。

それにあの御札は何なのだろう。木に突き刺さるし、妖怪が爆発する。

怖い。下手な銃弾の流れ弾より怖い。

何か妖怪の腕らしき物が転がっているが見なかった事にしておこう。

人型以外の妖怪はあまり見た事が無かったのだが、今霊夢が相手しているのは全部それだ。

人型の妖怪に比べ、知恵も力も断然劣るらしい。

それにしても空腹だ。

……妖怪って、食べるのかな。

しかしそこは現代人としての理性で抑える。ゲテモノは珍味だとか
旨いとか言われても未確認生物は食べちゃいけない。

考える、宇宙人やユーマは食わないだろう？目の前の熊みたいな生
物だった欠片はそれと同じ。どうせならちゃんとした熊を食え。

……あれは、林檎？

林檎的な果物が生っている。

近づいて一つ採ろうとする。

「キシヤアアアア！！」

顔があつた。妖怪だ。

「……刺されて来たせいか夢見心地だよな、反応が」

最近自覚が出てきたのだが、チルノを見たときやレミリアを見た時
の反応が尋常ではないくらい薄い。

グロテスクな物はよく見ていたが、未確認生物を見たのは幻想郷に
来てからだ。

幻想郷では確認出来ているとか、そういう事はこの際気にしないで
おく。

「霊夢！ 薬草も必要な数集まったから一度安全な場所に行きたい
んだけど、神社に行つて良いか？」

未だに妖怪を倒し続ける霊夢に聞こえるよう大きな声を出す。

「ん？ もう終わりでいいの？」

疲れのまったく無い声で霊夢は答える。どうやら霊力は有り余る程
の量らしい。

妖怪の屍は百を超えているのだが……。

それと、人の恐怖心や畏れによって産み出された妖怪は屍が自然消
滅した後に復活するらしい。放つておいても問題ないのだ。

薬草を詰め込んだ布袋を背負い、霊夢の後に続いて博麗神社へと戻
った。

神社に戻つてからは、二人でお茶と和菓子で和んでいた。

「そついえば勇輝さんはどうやって此処に？」

「魔理沙に送つてもらった。俺は飛べないからな」

能力を使えば一時的に飛べない事も無いだろうが、飛べなくても苦
労しないので飛べないままで良いと思つていた。

しかし、こつやって薬の材料を集めるには飛べない事は不都合にな
っていくだろう。

「それなら、私が飛び方を教えようか？」

閑話壺（前書き）

紅霧異変の時の話。

実は本編に入れるのが面倒で書かないつもりだったのは言わない約束。

閑話巻

レミリアの身代わりになり、死を覚悟した。

ゆっくりと流れる時間。勇輝は目を閉じ、自分の最後を迎えようとする。

すると、地面が消えた。

重力に従い落下していく、慌てて目を開けると…。

「ッ!？」

視界に広がるのは眼、眼、眼。赤黒い空間の中に張り付くように存在する無数の眼。

開腹手術は見た事があるが、その時よりも嫌悪感と恐怖心を抱いた。

思わず胃の中から何かが込み上げて来るが、何とか抑えた。

足は付く。しかし、まだ底は無限に続いているように感じる。

上も、下も、前も、左右も。同じ、無限に続く赤黒い空間だ。

「気味が悪いな……、これが地獄だつたりするののか？」

「人の空間を地獄呼ばわりなんて酷いですわ」

「……………」

後ろから声がしたので振り向くと、両端にリボンの付いた出入口？があり、そこから女性が出てくる。

「初めまして、人間さん」

扇子で口元を隠しながら話す女性は、どこか神秘的なものを感じさせる。

「アンタ、どこかで会った事あるだろ。その声は聞き覚えがある」

「会ったのは初めてですわ。話すのは初めてではないですけど」

「前とは口調が違うな、夢に入り込んだと言ってた奴だろ？」

普通に話しているが、警戒心は微塵も緩めてはいない。

目の前の妖怪には、フランやレミリアを凌ぐ程の妖力がある。自分からしたら三人共化け物である事に変わりはないのだが。

「そう警戒しなくてもいいのよ？私は今の所、貴方をどうこうする気はないもの。ただ、興味があつたから助けただけ。口調はそういう気分だったの」

「……幻想郷に入った理由なら仮説は出来てる」

「そう？ 聞かせて貰っても？」

「まず、刺された時。ここで自分の運のなさを怨み、微弱ながら能力が発動した。多分、不幸という欠陥を修正し、消し去った」

幻想郷の外では能力も、霊力も、妖力も、魔力も極僅かな力でしかない。だが、何故か能力が発動し、欠陥を修正したのだ。

「だから、幸運にも幻想郷へと繋がる歪みに倒れこんだ。幻想郷なら能力は十分に発揮できるからな」

歪みはそこにあつたのか現れたのかは分からないが。

「そして、死ぬという欠陥を修正した。無意識だったから上手く修正ができていなかったんだな。再生や不老不死ではなく、死という不祥事が起きなくなった。傷を元に戻したのはこの後だろ」

「それが、貴方の能力……」

「今回もそういう事だろうな。俺の能力は元に戻した事や消した事は日付が変わってもリセットされない。不幸が起きない俺は、幸運にもお前が見ている時にレミリアを庇っていた」

補足だが、能力についての知識は付け足したモノになるが、声に出す事で新しい記憶、知識として残っている。

「次はアンタの事を聞かせて貰いたいんだけど。どういう存在で、何が目的なのか」

「私が気に入ったのは、貴方の能力の副産物みたいなモノという事ね……。まあそれも良いわ。私は八雲縁、幻想郷に古くから居る妖怪で一応、外との境界を管理している形になるわ」

「へえ……。じゃあ、俺を助けたのに特に理由は無い訳だ」

それなら、能力によって幸運しか起きなくなってしまった結果のようなものだろう。

幸運にも程度があるだろうが……。でなければフランにボコボコにされた日々、レミリアと戦う事になったあの日の説明が着かない。

打ち所が良かった。程度の幸運だったのだろう。

「これも貴方の力で誘導されているのなら気に入らないけれど、今の会話の中で私からの好感度は上がったわよ？」

「どこに上がる要素があったのか分からない」

「頭の回転も早いし、芯が通った眼をしている。それに私相手でも尻込みしないでそれだけ話せているでしょう？」

「最後のについては強制的に身に付いたようなものだから。親父と一緒に危ない薬を使う組に治療しに行った事もあるから……」

物怖じしていると見下され、つけ込まれる。

堂々としていないと逆に危ないのだ。そういった意味でも父親は尊敬できる。

「あと、本当に誘導されているか確かめる方法もある」

不幸が起きない。一見、欠陥では無い気がするが十分な異常だ。それを元に戻してしまえば良い。

「じゃあ、やってみて貰えない？」

「今日は無理だな、使用制限回数に達してるから。それに体もボロボロなんだ、休ませて欲しい」

紅魔館に帰って寝たい。

「じゃあ……」

紫が薄く笑うと何か不思議な感じがした。

「今日と明日の境界を少し弄らせて貰ったわ。これなら能力が使えるでしょう？」

「……便利な能力だな。先に傷だけ戻しても良いか？」

「どうぞ」

紫の承諾を得る事が出来たので、身体の状態を元に戻す。

折れていた骨や、擦り傷が消えたのを確認し、自分に起きている不幸の起きない欠陥を修正。

「これで俺の無駄な幸運は消えた。何か変化は？」

「……特に無いわね」

「じゃあ、今から俺をどうするつもりだ？」

「私の家に持ち帰ろうと思ってるわ。もう少し貴方について知って

みたいし」

「……心なしかさつきよりも積極的になってる気がするけど、気のせいだよな？」

「つまり、私に好かれる事が貴方にとっては不幸だったのかしら」

「そういう訳じゃないと………思いたい」

「冗談よ、招待しようと思っていたのは最初から。興味が有ったのも伝えたと思うけれど」

紫はからかう様に笑った。そこから真意を読み取る事は出来ない。

「一応、命の恩人からの招待だ。後からが怖いけどお邪魔させて貰うよ」

其の貳拾伍

霊夢が飛び方を教えると言って数十分。勇輝は浮く程度までは出来るようになっていた。

霊夢には空を飛ぶ程度の能力がある。つまり、勇輝が霊力をコントロールして飛ぶのとは訳が違い、そういった面倒な事を必要としない。

つまり……。

「まだ飛べないの？ 普通これだけ教えたら飛べるわよ？」

うる覚えな飛行方法を元に教えられている訳であって勇輝の飲み込みが遅い訳ではない。

以前に図書館の本で得た知識が霊夢の助言に補足を付け、何とか真上に浮く程度までは成長したのだ。

「いや、今まで何の支えも無く宙に浮くなんてしたことないから随分な進歩……」

「それで？ 後はさっき言った通りに霊力をコントロールして移動するだけでしょ」

思いの外、霊夢は厳しかった。

「いやっ、浮くだけでも相当……」

「その程度で？」

イラッとしたのは言うまでも無い。

難易度としては、割り箸の口を付ける方を下にして立てるぐらい？

慣れれば簡単らしい。だが自分が自由自在に空を飛べるとは思えなかった。

時は流れ、太陽も沈み始めた頃には白衣を着た男が境内でうつ伏せに倒れていた。

「情けないわね。これぐらいで疲れるなんて才能無いんじゃないの？」

返事は出来ない。それ程に精神は疲労している。

「魔理沙の話だと弾幕を作る才能はあるのよね……。けど靈力もそんなに高くないし、飛べないし……」

「……酷い、言われようだ」

「だって魔理沙と引き分けたんでしょ？ それなのにここまで飛ぶのが苦手だなんて信じられないのよ」

確かにまだ秒速五十センチほどの速さでしか飛べないが、一日でこれなら問題ないと思う。

霊夢自身は能力によるものだし、妖怪は飛べない方が少ないぐらいなので普通の人間がどの程度の成長スピードか分かっていないのだ

ろうか。

「おーい、迎えに来たぜー！」

魔理沙の声が聞こえるが、勇輝にはその姿を確認できない。うつ伏せだから。

「あれ？ どうして勇輝はこんな所で寝てるんだ？」

「急に地面が恋しくなったんじゃないの？」

「……そんな趣味があったのか。まあ、止めるつもりはないぜ」

「変な誤解はしないで……欲しい。疲れたんだ、朝から何も……食べないし」

そんな地面に顔を擦り付ける趣味は無いし、そんな趣味を持つ人間はこの世にいない……と、思いたい。

そういえばお茶と和菓子は腹に入れた気がするが、朝から夕方まで動いてそれだけでは持たない。

「じゃあ霊夢、コイツは貰ってくぜ」

「落とさないようにね。特に無駄に強い妖怪の巣とかに」

「……え？」

落とされるのか？ 可能性があるのか？

「大丈夫だぜ、箒に縛り付けてくから」

ここは日本だったよな。基本的人権の尊重はどこに行ったんでしょ
うか？

「じゃあ縄がいるわね……。これでいい？」

細い、切れそう。それに、それは糸です。

「仕方ないな。鎖とかが良かったけどこれで我慢するか」

「お前等……俺を何だと思って……」

問答無用。箒に糸で縛り付けられ、更に魔理沙にしがみつき、博麗
神社を後にした。

「……そういえば魔理沙は魔法使いだったよな。やっぱ俺より長く
生きてるのか？」

神社に向かった時とは違い、ゆっくりと飛ぶ箒の上で思い出したよ
うに尋ねる。

「何いつてるんだ？ 私は普通の魔法使いだぜ。パチュリーみたい
に妖怪化はしてないぜ」

「成程、まだ人間なのか……。ん？ パチュリーと知り合いなのか

？」

「本を貸して貰ってるぜ」

紅魔館の図書館は本が多い。それにパチュリーが管理をしているのだから魔法に関するモノも少なからず有るのだろう。

能力が使えるようになってからは傷んだ本を元に戻す為に何度も出向いていたが、最近に入っていない気がする。

「それで、結構時間も経つけど人里までは後どれくらいかかる？」

「何言ってるんだ？ 人里には向かってないぜ」

「は？」

何を言っているんだコイツは、という視線を全力で送りつける。

「今から人里に行くと私の帰り道が妖怪だらけになるんだ。だから向かうのは魔法の森だぜ」

「聞いてない！ 魔法の森って……下手したら俺、死ぬじゃねえか！」

「あ、そうだったな」

「何の対策も無いのかよ……。あれ？ 一応死なないよな、俺。永遠に苦しみ続けるのか？」

この歳で死より辛い地獄を味わう事になるとは……。幸運スキルが

消えた事も関係しているのだろうか。

「能力で何とかならないのか？」

「不安要素が多い。どこまでが有害でどの程度まで無害なのか分からないし、妖怪も近寄らないくらいなんだろう？」

「たぶん、普通の人間にとっては魔力自体が有害。森には鬼ぐらいだったら入って来るぜ」

「不安しか無くなったんだけど？」

「魔力への抵抗力とか上げられないのか？ 私だって人間だしそれぐらいは出来るだろ」

「魔法を使えるか使えないかは大きな違いだろ……。無理そうだったら森の外で夜明けまで外で待つよ」

妖怪に食われないために、寝る暇が全く無い夜が明けるまで。

「……あ、きつと大丈夫だぜ」

魔理沙が何か思い出したように口を開いた。

「私が作ったマジックアイテムの中に、一時的に魔法使いになれるアイテムが」

「副作用は？」

途中で遮るように尋ねる。きつと口く物では無いだろうから。

「使った分だけ、下痢になる」

「……仕方ないか」

其の貳拾陸

魔法の森。

魔力が大氣中に満ちていて、魔法使いには極楽、その他には地獄に感じる森。

「ゴホツ……既に、苦しいんだけど……」

魔理沙の家に来たのだが、空氣中にわずかな毒でもあるかのような苦しさを感じる。

表現としては、一酸化炭素の充満する煙の中だ。普通に死ぬ。

「ちょっと待ってて……あれ？どこに仕舞ったんだっけな……」

魔理沙の言う、一時的に靈力を魔力に変換して疑似魔法使いになるマジックアイテム。十数分の間見つからない。

本やガラクタのようなマジックアイテムが部屋中に散乱している。数分前までは足の踏み場があったのだが今は床が微塵も見えない。

「早く……死ぬ」

「……え？早く死にたいのか？」

「違っ……」

虫の息とは今の自分の状態を表すのに最適な表現だと思う。

「お、あつたぜ」

勇輝が倒れてから三分。魔理沙がガラクタの山から腕輪のような物を取り出した。

それを魔理沙から受け取り、プルプルと震える手で左手の腕にそれを通す。

通したと思ったら電流のような衝撃が体中に走り、虫の息だった為に声すら上げられずに悶絶した。

「大成功だぜ」

「ホントに死ぬ……生きて帰れない……」

息苦しさは消えたのだが、どうも納得いかなかった。

夕食は作らされた。普通、こういう場合は手料理を振る舞ってくれるのではないのだろうか。

何故かと聞いたら、

「タダ飯を食う気なら追い出すぜ」

その通りなのだが、納得がいかない。

紅魔館で上げた家事スキル。外では何一つやろうとしなかったのが最初はアレだったが、今では一人暮らしでも困らない程度には上が

っている。

正直、料理については能力で知識を得てしまえば作れる。それを咲夜に言ったらナイフを投げられた。

しかし、材料が米やキノコ、僅かな調味料しか無いのに何を作れと言うのだろうか。

最終的に炊き込みご飯になったのだが、魔理沙からの評価は普通、霊夢の料理の旨い。

しかも、取り分が八対二だった。当然魔理沙が八割である。

「……紅魔館が恋しいな」

食器を洗いながらそんな事を呟く。水道は無いので桶に水を入れ、そこで洗う。

紅魔館では掃除こそ面倒だったが、少しの家事とフランの遊び相手、レミリアの話し相手、パチエリーからの頼み事。それさえやっていたら衣食住には事欠かない。

……別にニート願望がある訳ではない。実際、人里で診療所を始める事が出来て嬉しく思っている。

が、この扱いは不満しかない。

食器は外で洗っている。今はまだ夏、暗くはなったが蒸し暑い。

そつえば、今日はまだ能力を使っていない。

リスクが無いのは大いに助かるが、いざという時に使えませんでした、では困るので使用は最低限にしている。

ストックが出来ないので使わなければ損。そんな気がするが、今は妖怪もいないし薬品のリストも作れな……傷薬を作ろう、体力や気力を全快の状態にして。

薬草は布袋に入れ、魔理沙の家のドアの横に置いてある。

魔理沙も女の子だ。紅魔館のように広い家では無いので屋根の下で寝ようとすると同じ部屋になってしまう。それは避けたい。

やましい気持ちがある訳ではない、世間体を保つ為だ。

「勇輝ー、生きてるかー？」

皿洗いを押し付けた本人が家から出てきた。手伝う気は目に見えて無い事が分かる。

「今の所は生きてるよ……。魔理沙は何時ぐらいに寝るんだ？」

「襲ったら殺すぜ」

「命を賭けてまで性欲を満たす気は無いから安心しろ。寝る前に外に出ておきたいから時間だけ聞いておきたいんだよ、既に寝る気みたいだな」

魔理沙はいつものエプロン姿ではなく、パジャマを着ている。

帽子も被っていないし、髪も卸してあった。

「まさか……死ぬ気か？」

「違う。家の中に寝れる場所が無いだけだ」

「自殺は良くないぜ」

「人の話を聞けよ」

「寝る場所はあるぜ、ベッドの下だ」

「お前、俺を人間として扱ってないだろ。ペット感覚で接してないか？」

「ベッドの下だからペットか……そんなに面白く無いな」

「……一度解剖してみるか？脳の回路に異状があると思うんだ」

「このペド野郎！」

「喧嘩売ってんのかお前！」

気力は全快の状態に戻した筈だったのだが、精神的疲労がとんでもない。

「いやあ、からかえる相手は少ないから重宝してるんだぜ。一応」

魔理沙と親しい人物を思い浮かべてみる。

霊夢、林之助、パチュリー、里の年輩者方……本当だ、からかえる奴がない。

「限度を考えてくれ……。いくら俺でも怒る時には怒る。仏じゃないから許さない時もある」

呆れた声で呟く、しかし魔理沙は過剰に反応した。

「その……悪い。勇輝は面白いから、えっと……」

借りてきた猫のようにシュンとして、視線を泳がせる。

こんな落ち込む魔理沙は初めて見る。…知り合ってから日が浅いの
で当然かもしれないが。

「……私の事、嫌ったか？」

恐る恐る、といった感じに魔理沙が尋ねてくる。

「嫌ってはない。気軽に話せる相手は欲しいからな。魔理沙は結構好きなタイプだし」

「なっ……！？」

魔理沙が顔を真っ赤にしてから気づく。自分の爆弾発言に。

「性格の相性的な意味でな？ 決して容姿だけとか、そういう事ではなくて……」

「つまり全部！？」

駄目だ。解釈がそっちの方向にしか行っていない。

思春期の女の子を甘く見ていた。ここまで恋愛方面に思考が持っていられるとは…。

ベッドに引きずり込まれそうになったのは夢に違いない。目が覚めたら元に戻る…と良いと思う。

其の貳拾陸（後書き）

←実際にあったかどうか分からない会話。

「告白までしておいて往生際が悪いぜ！」

「落ち着け！寝ろ、これは夢だ！」

「だから寝ようとしてるぜ、二人でな」

「婚期を逃した人みたいになってるから！頼む、一人で寝てください！」

「そんな…一人でしろだなんて」

「何を！？」

「言わせるなんて変態だぜ」

「だから何する気だよ！？」

其の貳拾漆

魔理沙は寝た。

月の位置からして、11時から12時といったところだろう。

月明かりで、どこか神秘的な雰囲気のある森を壁に持たれながら見ていた。

「……半年、か」

幻想郷に来て半年。外はどうなっているのだろう。

行方不明になっているのは間違いないし、ひょっとしたら死んだ事になっているかもしれない。

親しい友人もいたし、父親との仲も良かった。

割り切れていたと思っただ、未練はまだまだある。

それでも、この幻想郷なら自分の知識が、経験が十分に発揮できるのだ。

帰る方法なら知った。だけど、この外ではあり得ない好条件で医者として生きていける場所を捨てられない。

「……結局は自分の欲か」

ポツリとそんな事を呟いてしまう。

医者になるために勉強し、なれるだけの学力はつけた気でいた。

薬剤師もいない、設備の整っていない場所では力不足である事を知った。

だけど、ここでは自分しか医者がない。他に頼るべき存在がない。外ではこうは行かないだろう。小さな病院なら人が来ないし、大きな病院ではサポートとして付けられるのが目に見えている。

だから、ここでなら百パーセントの力を出せる気がする。

誰の指図も受けず、邪魔をされず、人の為に力を使える。

その考え方が正しいとは全く思わない。

患者だって、助けてもらえるなら誰でも良いのだ。

だけど、俺は……桜井勇輝は自分で助けたい、そんな独占欲が出てしまっている。

背凭れにしていた家の壁から離れ、森を歩く。

早く今の考えを消してしまいたい、それだけで。

自分が地面を踏みしめる音、風で草木の揺れる音。それだけが森の中で響く。

一度抱いてしまった嫌悪感は直ぐには消えてくれない。何も考えな

いように前に進む。

そして……。

「さて……。どうやって戻ろうか」

当然、考えなしに進めば迷う。

直進だけしていれば良かったとか、目印を用意しておけば。そんな今更の後悔はしていないが戻れないのは問題だ。

更に、今の自分はついてない。

不幸と幸運はバランスがとれていると聞いたことがある。良い事もあれば悪い事もある、というアレだ。

迷信染みていると思うが、ここは幻想郷。外の常識は全く役に立たない。

「……やっぱりだよクソ野郎」

目の前には異形の生き物。

大きさは三メートル、頭は牛、体は蜘蛛。牛鬼とか言うヤツだろうか？

あの獅子舞の原点的な……。

そして補足。魔力を持たない存在にとって魔法の森の空気は毒に近い。

それを気にせず森を歩けるのは魔法使いか、毒をものもしない程の力を持つ存在…。

「……人語は、理解出来るか？」

冷や汗をかきながらも声を絞り出す。

しかし、返ってきたのは身の毛もよだつような咆哮。

十中八九、捕食対象にしか見られていないという事だろう。

だから逃げた。全速力で。

牛鬼は予想外だったのが、一瞬遅れて後を追いつ始める。

二足と八足、どちらが速いかは言うまでも無いだろう。

想像できない方は、普通のサイズの蜘蛛が走るところを思い浮かべて貰いたい。牛鬼はあの速さで足を動かしている。新幹線と良い勝負では無いだろうか？

何が言いたいかというと、滅茶苦茶恐いのだ。

新幹線並の速さで三メートルの蜘蛛が追いかけてきたら失神モノだとは思わないだろうか。

勿論、牛鬼の姿を確認した瞬間に身体能力は上げた。

人外のスピードで走っているが、やはり何度も捕らえられそうにな

った。

ここが森でなかったら既に自分は食い殺されているだろう。

自分の胴より太い大木をへし折りながら、牛鬼は血走った目で追ってくる。

……逃げ切るのは、不可能だ。

こちらの体力にも限界はあるし、撒くことは出来ない。

下手に逃げて魔理沙の家に出てしまえば魔理沙が危なくなる。

「……あ、忘れてた」

飛んで逃げればいいのではないだろうか？

上手くはないが、十分に浮けるようになった。アレが飛べると思わない。

直ぐ様地面を蹴って跳躍し、さらに靈力をコントロールして上昇。

地上から十メートル程の位置で停止する。

下から牛鬼が睨み付けてくる。どうやら助かつ………らなかった。

「嘘だろオイ……」

心臓が今までに無い程に強く鼓動を打ち始める。

牛鬼、牛頭に蜘蛛の体。

見た目の通り糸も使づらい。

自分の足には牛鬼の糸が巻き付いている。避けられなかった、反応すら出来ていない。

牛鬼は糸を引き、地面に叩きつけようとした。

だが、ここは森だ。

「がッ……！」

地面に到達するまでに何度も木とぶつかり、その回数分、当たった箇所から嫌な音が聞こえた。

右手は肘から折れ、アバラは折れ、足は曲がる筈の無い関節の無い場所で曲がった。

痛みで悲鳴を上げる事さえ出来ない、性格的な事もあったが。

牛鬼の下まで引きずられていく。糸を切るために霊力の刃を作り出そうとしたが、痛みでコントロールが出来ない。

牛鬼の目の前に引きずり出され、その足の一本を頭蓋に突き立てられた。

即死。

もし誰かが見ていたならそうとしか思えない光景。

トマトを潰したように赤い液体が飛び散り、地面に赤い華を描く。

悲鳴は無い。口など既に無いのだから。

牛鬼は突き立てた足をソレから抜き、次は腹に突き立てる。

再び吹き出す鮮血。臓物は潰れ、幾つか出てしまっていた。

牛鬼は骸にしか見えないソレを口へと運び、一飲みにした。

其の貳拾漆（後書き）

完。

……冗談です、うん。

其の貳拾捌

一人の少女が魔法の森を歩く。

人形を近くに侍らせる魔法使いの少女、アリス・マーガトロイド。

元々は人間だが、何年も前に魔法使いとなった彼女は、この森で、あまり外に出ないようにして暮らしていた。

何か用がある訳でも無いのに、こうして外に出ることは珍しい。

そして、目の前には…。

「気紛れで外を歩いていただけなのに……運がないわ」

何かを食い殺したばかりであろう牛鬼の姿があった。

しかし、アリスの表情には焦りも絶望も無い。ただ、面倒な事になった程度の呆れた顔。

牛鬼がアリスに喰らいつこうとする。しかし、見えない何かによってその行動は阻まれた。

「結界は……分らないからそうしているのよね」

牛鬼は力任せに障壁を越えようとしているが、この程度の妖怪の力で壊れる程アリスの結界は弱くなかった。

ここで、何故スペルカードルールが存在するかを少し説明する。

本来、能力を持った人間でも妖怪には敵わない。

敵うとしたら、特別な役割を果たしている博麗神社の巫女だけだろう。

そこで、博麗の巫女がスペルカードルールを作り、幻想郷での人と妖怪の争い事をそれで解決するよう取り決めたのだ。

つまり、弾幕勝負ではなく能力と妖怪本来の力で闘った場合は圧倒的に妖怪の方が上。

そして魔法使いも妖怪と同等。妖怪同士の戦いにスペルカードは本来必要ない。

「話を通じないなら、スペルカードは使わなくても良いわよね」

牛鬼の下に魔法陣が浮かび上がる。

そして、牛鬼は内側から弾けた。

「え……？」

アリスはまだ、何もしていなかった。人形の張った障壁に牛鬼の破片が当たって落ちる。

そして、牛鬼の中から生まれたように出て来る男を見て、警戒心を最大まで引き上げた。

「……汚ねーな、トラウマモノだ」

元に戻した体の調子確かめるために、手を握ったり閉じたりする。問題ないようだ。

牛鬼に食われ、飲み込まれた時にも意識はあった。頭は確かに潰れていたし、出血も致死量を超えていたのだ。

これが死なないという事なのだろう。痛みは感じていたのでトラウマになりそう。蜘蛛を見たら全力で殺したくなるぐらいには。

一応人間のつもりだったが、これではゾンビか何かに思える。……
勿論、自分が人間の枠に当てはまるのに変わりは無いが。

「何物なの？その蜘蛛の子供って訳じゃないんでしょう？」

「ん？ ああ、悪い。気づいてなかった」

声がしたかと思うと、こちらを睨みつける少女の姿があった。

多分、この森に住む魔法使いの一人だろう。浮いている人形にはもう何も言わない。

「答えて。貴方は妖怪？ それとも別の何か？」

「能力持ちの人間だよ。少し変わった能力の、ね」

未だに疑うような視線をぶつけてくる少女。どう考えても今の自分は怪しいので仕方ないのかもしれない。

「勘違いはしないで欲しい。魔法使いに知り合いがいてな……そいつの家に厄介になってたけど散歩中にコイツに襲われて食われたんだ」

そう言いながら牛鬼の亡骸を指差す。

「じゃあ、どうして貴方は生きているのかしら。こういう知識の殆ど無い妖怪は獲物を殺してから食べるんだけど」

「殺したつもりだったんだろうさ。頭を潰されて腹を貫かれたからな」

自分で言っておいてその時の痛みを思い出してしまう。しばらくはトラウマが続きそうだ。

痛みや蜘蛛に過剰反応してしまうだろう。

「そんな体験して生きてる時点で人間じゃないわよ」

「不死者なんだよ、不死身じゃないけど」

残るのは意識のような物だけなので不死身と言うにはどこか違う気がする。間違いないと思う。再生も自動ではないのだから。

「じゃ、俺は行くから」

「その格好で里に降りたら寺子屋の半獣が襲ってくるわね」

「慧音さんが？ 一応知り合いだし、そんな事は……」

「アレの里への愛情は普通じゃないわ。多分、血塗れで武器を持っていたら人間にも容赦しないわね」

今の自分の格好を確認してみる。

穴の空いた血生臭いシャツ、その上に自分の血で赤く染まったボロボロの白衣。

帰りは薬草を入れた布袋を持たなければいけない。

「……ああ、危険な雰囲気しか出せないな」

「それに、能力持ちなら存在が凶器みたいな奴もいるから尚更ね」

弾幕の特徴から全身凶器のようになっていて自分はどうでしょう？
鎖や鎌や剣に槍。もう大体の武器は瞬時に作り出せるようになってしまった。……フランのせいで。

「……何か着れる物は無いでしょうか？」

この格好で里に帰る度胸は無かった。

「条件次第で用意していいわよ。どんな内容かは貴方が領けば話し、断るなら話さない」

「随分と足下を見た交渉だな。それじゃあ簡単には答えられない」

「別に命を取ったり奴隷にしたりはしないわ。人間に出来る範囲は心得ているもの」

「……なら、決まりだな」

仕方ないが、こうするしか無い。

「断る、服は諦めるよ。布を被っていけばいいし、明日には元に戻せる」

「まあそうでしょうね。御使いを頼もうと思ったんだけど仕方ないわ」

……断らなければ良かったなんて思っていない。少し自棄になりた
い気分だが。

「そういえばまだ名乗ってなかったな。桜井勇輝だ、里で医者をや
っている」

「アリス・マーガトロイドよ。人間だった魔法使いをしているわ」

其の貳拾仇

「おおっ……」

魔法の森の、ある魔法使いの家に勇輝は招待されていた。

「どう？　これだけ揃えるのには一年かからないけれど相当なモノでしょう？」

「驚いたけどさ、……何で人形？」

アリスの家、その中には棚、テーブル、イス。あらゆる場所に人形が敷き詰められていた。

「私の魔法は人形を媒介にしているの。だから使えば壊れる時もあるし、基本的にこれだけ生きていればやりたい事も無くなってくるわ」

「それで暇さえあれば人形を作るって事か」

「あれ？　どうして自作って分かるのかしら」

「全部雰囲気似てる。それに魔法使いに一年でこれだけの人形を買うほど収入があるとは思えない、そんな推測だけだよ」

「……まあ、拾ってきた曰く付きの呪いの人形もあるから無闇に触らないように」

何故アリスの家に来る事になったのかは、少し時間を遡る事になる。

「じゃあ、俺はそろそろ戻る事にするよ」

これ以上森を歩いていて、また妖怪と出会ったら次は無いのだ。身体能力の強化、身体の復元、牛鬼を内側から殺すための霊力増幅。既に三回、能力を使ってしまった。

「そう？　夜は妖怪の時間だから気をつけなさいね」

「……え？」

聞いてない。そんな事だれにも教えてもらってない。

「まさか知らなかったの？　妖怪は昼より夜の方が妖力も高まるし、気性も荒くなるの。一定以上の知力がある妖怪は朝も行動したりするけど今みたいな妖怪は基本的に夜に行動するの。でも里は結界で囲まれているし、神社には入るだけ無駄。私達魔法使いの家にも妖怪避けの魔法が掛けられているから野生の獣が被害に逢うのよね」

「……つまり、無謀にも夜に散歩をしていた俺は」

「生け贄同然の餌ね。一度食べられたんでしょ？」

フランは朝から次の日の朝まで遊ぶし、レミリアはランダムで朝か夜に行動するし、美鈴は一日中寝ている。

これで分かる筈がない。

「はあ……。うん、大人しく帰る。もう夜は外に出たくない」

そう言っアリスに背を向けると、夕食に満足に有り付けなかつた腹から男とは思えない程可愛らしく音が…。

「……………」

「……………良かったら私の家に来る？夕食の残りならあるけれど」

「お願いします」

そして現在に至る。

人形だらけの部屋で、人形が飛び交うのを見ながら食べ物が出て来るのを待つ。

もうこういつた物に抵抗が無くなってしまった自分が怖い。なんて馬鹿な事を考えているといかにも洋食と言った感じの食事が運ばれてくる。人形によって。

魔理沙は基本的に和食しか食べないらしいが、アリスは洋食派なのだろうか。

……名前の問題か？ 違うと思うが。

運ばれてきた物はとても美味しかったです。色々な意味で涙が出そうになった。

「どうだった？ 他人に食べさせる事はあまり無いんだけど……」

「十分旨かったよ。……悪いな、会ったばかりなのに」

会って数時間の内に、女の子に家に招待され食事を作って貰うなんて経験は普通出来ないだろう。

幻想郷に来てから普通に生活出来た試しが無いのでここでは普通かもしれないが。

「じゃあ、お礼と言っては何だけど勇輝の能力を教えて。どうして不死者なのかも。タダでは悪いと思ったんでしょ？」

「……最初からそのつもりだったって顔だな。別にいいけどさ。……欠陥を修正する程度の能力。それが俺の力だ、死なないのは死ぬって概念を消したからだな」

「……本当に人間？」

「最近は自分でも怪しくなってきたけど人間だよ、一応」

「言い切れないのね」

「悲しい限りだよ。つい半年前まで普通の学生だったんだけど……」

「あ、やっぱり外から来たの？」

「やっぱり？」

「人里で貴方を見た事はないし、そんな格好をしてる人はいないか

ら」

「それは血で濡れたって意味か、この服の事なのかどっちだ」

「両方」

そう言つてアリスは楽し気に笑う。

「……じゃ、そろそろ帰るよ。もう遅いし、長居するのも悪いから」

「私は別に構わないわよ？ 勇輝は思ったよりも面白いし」

「そう言つて貰えるのは嬉しいけど、それじゃ俺の気が済まないから……正直、寝たいし」

「じゃあ、借りを作つておかなきゃね」

アリスが手をかざし、何かを呟くと魔法陣が勇輝の足下に現れ、体を潜らせるように上昇する。

「血が……」

魔法陣が通つた後から服が元に戻っていく。

「魔法使いにも服ぐらい直せるのよ」

「便利なモンだな……。で、借りはいつ返せばいい？」

「利子が大きくなるまで取っておいてあげる」

「……早い内に返せるようにしておくよ」

二、三言話してからアリスの家を出る。

家から一歩出た所で、霊力をコントロールするのに集中した。

歩いていくのは危険。飛ぶ意外に安全な道は無い。

ゆっくりと目を開ける。

「……行ける」

ゆっくり、少しずつ体を浮かせる。

未だに、浮いてから移動する事が出来ないがアリスの人形を見て気づいた。

アリスの人形は糸で操って飛ばしている。しかし浮かせたり、行動させるのは魔力。それだけでは何のヒントにもならないが、要は見方だ。

糸で引いているように見えた。浮いているモノを動かす方法はいくつもある。その一つが……

「身近に居すぎて気づかなかったな……」

翼。浮くのは霊力のコントロールによるものだが、移動は翼を動かした時の風圧によるもの。

霊力で作り出した翼は蒼く、透き通った色をしていた。

「当然霊力を使い続けるし、まだ上手く動かせないか……」

しかし、これなら速く飛べるし使いこなせば細かい動きも出来る。
霊力の密度を高めたら防御にも使えるだろう。

「さて、帰るか……」

魔理沙の家で薬草を持ったら里に戻ろう。書き置きぐらいは残して。

其の参拾（前書き）

。そつ言えばユニークアクセスが一万を超えました（2011年9月）

読んでいただいている皆様には感謝してもしきれません。

其の参拾

冬になった。

これと言った事件も起こらず、坦々と時が流れたのである。

診療所もようやく軌道に乗ってきて患者の数も増えて来ている。喜ぶ事では無いのだろうが素直に嬉しい。

また、慧音の寺子屋の子供達の身体測定は此处でやっている。機具は林之助から奪っ…貰った。

発電機の作製に協力しているのだから文句を言われる筋合いは無い。計るのは身長、体重、座高だけ、中学生くらいの女の子の体重を計ろうとしたら慧音に頭突きを食らったのは忘れる事は無いだろう。

そして……。

「あのさ……此处、一応病院なんだけど」

「いいじゃない。神社は人は来ないし寒いもの」

「私の家は暖炉は有るけどマジックアイテムを詰め込んでるから使えないんだぜ」

病院には暖炉があつた。それが原因で巫女と魔法使いが残念な程に入り浸っている。

更に……。

「咲夜、お茶は？」

「申し訳ありませんお嬢様。この家には紅茶の葉が一枚足りとも有りませんでしたので……」

紅魔館からも二人、暇人が来ていた。

そして四人はあたかも自分達の家であるかのようにくつろいでいる。待合室となっているロビーでの事だが、他に患者もいないので文句が言えない。言ったら論破された。

この診療所に足りていないのは金銭、薬、機具の三つである。

患者が居ないのは今は昼時であり、休診時間となっているからであるだけで、信頼性が無い訳ではない。

一応、料金体制としては診察はネギが一本買える程度の料金。

薬の処方が、モノによるが風邪薬だと米が二合買える程度の料金。

重傷、重病では入院させる。料金は症状にもよるが、足の複雑骨折で大抵のコミックスが大人買いで全巻買える程度の料金。

瀕死の場合は能力による治療。自分の実力とは言えないので極力使いたく無いのだが、命と天秤に架ける事は出来ない。料金は漫画喫茶で半年暮らせる程度。

何が言いたいのかというと、厳しいのだ。金銭的に。

とてもこの疫病神的存在達の相手をしている場合では無い。

サプリメント等が作れたら収入も安定するのだろうが、そうすると必要な薬を作る時間が足りなくなってしまう。

「あ、年越せそうに無い」

年末年始は休診としている。が、働かないとその日の食事も危ないときがある。

現在の蓄えは、一週間分の食料を買える程度。休診は十二月三十日から一月三日まで、年末年始に質素な食事だけで済ませないといけないのは悲しすぎる。

「何言ってるの？ 勇輝は正月は紅魔館で過ごすに決まってるじゃない。ねえ、昨夜」

「はい、予定ではそうなっています」

「は？」

聞いてない。

「このチビっ娘は何を言ってるんだ？ 勇輝は私と霊夢と一緒に神社で年を越すんだぜ」

それも聞いてない。というかそれなら何の問題もない気がする。

「あんな神社では年を越す前に凍え死ぬんじゃないかしら？ 紅魔館は温かいけれど」

魔理沙に向けての言葉なのに霊夢への暴言にしか聞こえない。現に霊夢の拳がプルプルと震えている。

「あんな辛気臭い屋敷で悪魔なんかと過ごしたらおみくじで大凶を引くぜ」

「問題ないわよ、あの神社におみくじは無いもの」

霊夢がハッ、と何かに気づいたような表情に。

しかし、位置的な問題としか思えないので今更おみくじを導入しても無意味だと思う。

「俺は別に構わないけど。年末は博麗神社、正月は紅魔館で……」

「お嬢様、……です。……だから……」

「……それもそうね。なら私は正月に勇輝を連れていく事にするわ」

「分かったぜ。じゃあ年末は私達が借りていくぜ」

咲夜が何か言っていたが気にする必要は無いだろう。

丸く収まったので良しとし……。

「桜井先生はいらっしゃいますか？ 年末年始についての会合について連絡……したい、のですが……」

間が悪すぎる。確か里の纏め役の一人である爺さんの孫だった筈だ。
レミリアと魔理沙に睨まれて畏縮してしまっている。

数週間前に能力持ち、更に妖怪と闘える力があり医者という役割。
そんな理由で纏め役の一人に選ばれたのだが、今回は本当に間が悪
すぎる。

「えーと、日時だけ教えていただけませんか？行けるかは……分
からないですけど」

「はい。明日の正午から年末についての打ち合わせ……後、里の財
政についてです。年末年始は宴会になるだけでしょうから不参加で
も問題無いです。では失礼しましたっ！」

必要な連絡だけ済ませ、逃げるように帰って行く。何だか気まずい。

「それより、もう直ぐ仕事を再開する時間だから手伝つか帰るか
してほしいんだけど……」

咲夜はともかく、他三人は役に立ちそうにないのでお帰りいただき
たい。

「じゃあ今日は休みだな。これをドアに掛けてくればいいんだろ？」

魔理沙が手にしているのは『本日休診』の掛札。

「ちよっ……」

止める間もなく駆けだした魔理沙。

「勇輝、これで勝負しなさい。負けっぱなしでは吸血鬼の名が廃るの」

レミリアが将棋を何処から取り出し、スペルカードを構えて強制的に付き合わせようとする。

何故こういう時だけ連携して来るのか不思議でならないのだがこのままでは生活が危ない。

二つ名がよく休む不死の医者、なんて感じになったらお終いだと思う。

「魔理沙。それだと勇輝が困るだろうからこっちにしたら？」

霊夢が取り出したのは『御用の方は博麗神社に賽銭を』と書かれた掛札。患者を殺す気だろうか。

「いえ、こっちにしては？」

咲夜が取り出したのは『御用の方は献血を行って下さい』と書かれた掛札。患者を何だと思っているのだろうか。

「……分かったから、居てもいいから仕事だけはさせてくれ」

その日、午後に来た患者はいなかった。

其の参拾（後書き）

この小説での人里について

基本江戸時代。たまに中世ヨーロッパ（香霖堂等）

民間は繋がっているかのように隣接している。診療所は中心部で孤立。

診療所の間取りは「ひぐらしのなく頃に」の入江診療所をベースに地下は無い。

後は基本皆様の想像にお任せします。

其の参拾巻（前書き）

PVが10万を超えました（2011年9月）

其の参拾巻

「……………」

空気が、重い。

里の中心部にある一番大きな屋敷の一番広い座敷で里の重役達が一
同に介していた。

勇輝は実感する。自分が此处に座るのは場違いだと。

長老、大手道具店の店長、寺子屋の教師、とりあえず自分よりも立
場も年齢も上の人達ばかり。

いくら暴力団の方達の前に出た事があるとは言ってもこの空気は慣
れないし好きになれない。

「……そろそろ始めてもいいのでは？」

十数人の内の一人が声を挙げる。

「そうですね。アレは出席する方が少ない。居るも居ないも同じだ
ろっ」

どうやらまだ誰か来ていないようだが始まるらしい。

長老を奥に、二列に向かい合って並んで座っているのだが、勇輝の
席は一番出前の右側。隣は慧音が座っている。

あの会話を切っ掛けに、里の事について話し合いが始まる。

秋の農作物の収穫量について。家畜について。各自の経済状況について。

どれも重要そうな話なので口は出さない。新入りがあれこれ言うのは気分も悪いだろう。

「ところで桜井殿。診療所の方はどうですか？」

……何も話さないつもりでいたのに一人の爺が話を振ってくる。

「里の皆さんが健康なので目立った仕事はありませんね。設備もそれなりに揃い始めているので大抵の病なら対処できるかと……。勿論、何事も無いのが一番ですが」

「それは頼もしい限りですね。少女を何人も連れ込んでいると噂を聞いたので心配していましたが」

一人の男性が皮肉げに会話に混ざってくる。アレは……。

「お子さんが気になりますか？霧雨さん」

魔理沙の父親だ。

「いえ別に。あの魔女とは縁を切っていますので」

「育児放棄ですか、器が知れますね」

少し話ただけだが確信した。コイツは自分の嫌いなタイプだ。

「勇輝、少しは考えてモノを言わないか……」

慧音から小声で注意されるが、それを聞くつもりは無い。

「放棄とは人聞きが悪い。アレは自らの意思で家を出ましたし、存在が危険なんですよ。いつ妖怪になるか分からない」

確かに、魔法使いになった人間は歳を取るのが遅くなり、百年もすれば妖怪と言えるだろう。だが、実の子供に言っていい筈がない。

しかし、感情的になっても仕方ないのは十分承知している。

だがら、この放ちような無い苛立った感情は…修正しよう。

もう自分は子供ではない。

自分の行動に責任を持ち、回りと共生していかなければいけない。

人命に関わる仕事に就くなら尚更だ。

「そうですか。まあ、他人の家庭にあれこれ言う必要は無いですね。それと訂正ですが少女を連れ込んでいる訳ではありません。以前世話になった対価として吸血鬼に血液を提供、博麗の巫女や魔法使いの少女とは友好な関係を築いて異変解決をスムーズに行って頂く為でしたが、問題がありますか？」

感情の込もっていない声で坦々と話す。それで興が削がれたのが魔理沙の父親は顔を背けた。

他の重役達もそれを察したのか、議題を次へと進めていった。

「勇輝、さっきのは不味かったぞ……」

話し合いが終わり、それぞれが帰宅しようと席を立った後、慧音に話しかけられた。

「何がですか？」

「お前が歪み合ってたのは道具店の店主で、この人里では屈指の権力者なんだ……」

「別にあの店から機材を買っている訳では無いですし、そこまで徹底的に対立する気は無いんですけどね」

「風評の問題だ……。誰も霧雨店に嫌われたくは無いからな」

「来る者は拒まず、去る者は追わずです。命より対人関係を重視するならそれも良しですよ」

「……本気で言っているのか？」

慧音が見逃せ無い、といった表情になる。まあ、医者発言では無かっただろう。

「命は……平等で不平等ですから。人は理性が高い分、そこを割り切ります」

生きたいと願う、死にたいと願う。正反対だが、どちらも同じ。苦しみから逃れたいだけ。

生き地獄を味わうくらいなら死ぬ。なんて考えも少なくはないだろう。

本当に死を理解しているかどうかは別だが。

「慧音さん。俺って結構、残酷な性格してますよ？……必要となれば、さっきまで此処にいた奴等を殺すくらいには」

午後からの診療所は変わらぬ様子を見せていた。

「気候が変化したからでしょうね……。栄養を付けてしっかり休ませて下さい。必要なら薬を出しますが、どうします？」

子連れの女性に問い掛ける。

薬はやはり高価だ。だからこそ、簡単に手を出せない人がいる。

「おいくら、なんでしょうか？」

「失礼ですが、職種をお聞きしても？旦那さんのでも、貴女のもいいですが。あと、家族の人数もお願いします」

「主人は畑仕事です。家族は主人と、私と、この子。あと主人の両親で五人家族です」

「なら、これぐらいですね」

紙に書いて女性に渡す。

「これだけで良いんですか？」

「薬を買わせて栄養失調になられては立つ瀬がありませんから」

今渡した紙には本来の六割程度の金額しか書かれていない。

だが、小売りでは無いので売値は言い値で良いのだ。

「これなら大丈夫です。お願いします」

「分かりました。五日分用意しますので待っていて下さい。説明書も付けておきますので」

これで本日七人目の患者。少し多い方だ。

いつもは五人以下だが、本格的に寒くなってきた事が原因なのだろう。

薬を渡し、料金を受け取った後、誰も居なくなつた待合室でソファに座る。

考えたのは慧音に言った事についてだった。

其の参拾貳

十二月二十四日。世間で言うクリスマスイヴの日。

当然、診療所は営業中である。

「……暇だ」

誰も来なかったとしても、だ。

薬も材料分は生成してあるし、道具の手入れや診療所の掃除も終わった。

勤務中なのに、仕事が無い。

「………暇だ」

ごそごそと、白衣のポケットを探ると一枚の紙が出て来る。スペルカードだ。

もう何ヶ月も使っていないし、作っていない。

他にやる事も無いし、偶には異変対策を試みるのも一考だろう。

今まで作ってきたのは相手の戦意を奪うような、もとい、もう二度と見たくなくなるようなスペルカードを目標としてきた。

空が飛べなかった分、回避範囲が狭かったし弾を放つ位置も地上からに限られてしまっていたからだ。

だが、今は空が飛べる。……とんでもない量の霊力を使うが、その欠陥は既に対処する事が出来ている。

つまり、空中戦で十分な効果を発揮し、尚且つ決定打に欠けていた弾幕の密度を上げるのが理想。

紙と鉛筆を用意し、相手の動きを計算に入れて弾幕の配置を決めて書き込む。

時間を忘れ、勇輝はスペルカード製作に没頭した。

「……うわぁ」

自分で作っておいて、吐き気のする弾幕が出来た。

気持ち悪い、絶対に相手に使われたくない。使われたら土下座をしてでも止めてもらいたい。

今日作った他の数種類のスペルカードと比べても、一番最初に出たこれに比べたら易しいものだ。

……魔理沙や霊夢は力づくで突破してしまうかもしれないが。

窓から外を見ると、既に空は赤くなっていた。

そういえば、明日は紅魔館に行く日だった。週に一度の帰還だ。

クリスマスだし、何かプレゼントでも持っていた方がいいのだろうか。何の用意もしていないが。

レミリアには血、咲夜にはナイフ、パチュリーには本、小悪魔には栄養剤の試作品。フランは弾幕ごっこで良いだろう。

行く前に其処らで買って行こう。……何か忘れてる気がするが、忘れているのだから大した事ではないと思う。

「……………あ」

紅魔館の前まで来て美鈴へのプレゼントを忘れていた事に気づく。

寝ているし、気づかなかった事にして紅魔館の庭を通り、大きな扉を叩く。

「……………!……………?」

出迎えは妖精メイド。何か言っているが未だに理解出来ない。

しかし荷物を指しているの、持っていこうか？みたいな事だろう。

「これは土産だから自分で持ってくださいよ」

それを聞いて納得したのか、妖精メイドは仕事に戻っていった。

空を飛ぶ方法を得てからはチルノを探す必要も無くなり数十分で行き来できるようになってからは紅魔館に来るのも近所に遊びに行く。

という気分になっていた。

最初に向かうのは図書館。パチュリーに本を渡すためだ。

相変わらず巨大な扉を押して、中に入る。

「パチュリーいるか？」

呼んでみるが返事は返ってこない。いつもなら小悪魔辺りが駆け付けて来るのだが…。

パチュリーがいつも座っている椅子にも、たまに何かを作っている研究室にも姿は無い。

「仕方ないか……」

パチュリーや小悪魔は後にして、レミリアと咲夜に渡しに行こう。

図書館から出て、長い廊下を歩きレミリアの部屋の前に着く。

しかし妙だ。気配が無い。

「レミリア、いるか？」

返事はない。ノックしてから中を確認してみたが、やはり誰もいなかった。

寝室にも行ってみたが、誰もいない。

食堂にも行っただが、妖精メイドが働いているだけで咲夜やレミリア、

パチュリー、小悪魔の姿は無い。

「……フランの所に行くか」

地下室から出られなくなりそうだが、他に見つからないのだから仕方ない。

長い廊下を歩き、長い階段を下り、長い地下通路を歩いていく。

……こんなに長かっただろうか？

しかし辿り着くには辿り着いた。

「フラン、入るぞ」

重いドアを開けて、中を確認する。そして……。

「どうしてこうなった……」

落ちた。ドアを開けて中を覗き込んだら床に穴が開いて落ちた。

しかも穴は閉じ、霊力弾では壊せない程の結界で完全に閉じ込められる。

まさかとは思うがレミリア達の仕業だろうか。……とりあえず、落ちた先の暗い通路は蠟燭の明かりで照らされていた。しかし7、8メートル間隔で配置されており薄暗い。

落ちた穴からは出られそうになかったので、10分ほど前へ前へと進んでいた。

分かった事は二つ。壁、床、天井は結界により防御されている。破壊して脱出するのは魔理沙でも不可能だろう。

もう一つはここが迷宮のような作りになっているという事。通路は分かれ道がいくつもあって、どこも似たような作りになっている。

そのせいで感覚が鈍ってきている。それに気力が削がれてしまっている。

何か変化が無いと精神的に参って……。

「……フラン？」

フランが両膝を抱えて通路で蹲っていた。

「……っ！？お兄様あ！」

こっちに気がついた途端に、涙目になりながら走り寄って来て抱きついてくる。

「どうしてこんな場所が……。というか何でフランも落ちてんだよ」

「外からお姉様の悲鳴がしたから、外に出たの……。そしたら」

レミリア、お前もか……。

「壊して出るとかは出来ないのか？」

「ここもフ란の部屋と同じ結界が張ってあるから……」

「じゃあ、ここが何か分かるか？」

「侵入者殺しの迷宮」

「いや、部屋の前に作るなよ」

「作ったのはフランじゃないし、お屋敷が出来た時に作られたらしいんだもん」

「じゃあ何で今更……」

「間違えてフランが作動させちゃった」

……どうやら吸血鬼はバ……計画性が無いらしい。

とりあえず、出口を探さなければ話にならないのでフランを引き摺って再び進む事にした。

其の参拾貳（後書き）

どうしてこうなった……。

其の参拾参

「……なあフラン。こっちで本当に合ってるのか？」

「……もう少し、もう少しだよっ！……たぶん」

あれから一時間。地下の迷宮を二人で彷徨っていた。

「勘弁してくれよ、いい加減荷物を持つのも苦痛に感じるし、気が狂いそうなほどストレスが急激に貯まり始めてる」

「だって今まで一度も落ちた事無いもん！落ちるなんて思ってなかったから出口だって分からないよ！」

「……言いやがった。分からないって認めやがった」

フランに頼っていたら……二度と日の光は拝めない。

「……仕方ない。能力を使うか」

足りないのは……欠陥しているのは知識。だがそれだけではまだ足りない。

空間を把握する程度の能力を……。

「フラン、こっちだ」

「あれ？ お兄様道分かるの？」

「お前よりは分かる、とりあえずはこつちだ」

能力で得た力で分かったのはこの迷宮の構造と現在地。それと迷宮の中で迷う数名の位置。

ロールプレイングゲームの地図のような感覚だ、大体の道は分かる。

数分歩き続けたところで遭難者二名を発見した。

「勇輝さん！ それに妹様も。どうしましろう、パチュリー様が…」

倒れたパチュリーとオロオロしている小悪魔だ。

「今日は喘息の発作か… どうしてここに落ちたのかは知らないけど今は良い。脱出するからパチュリーを背中に乗せてくれ」

とりあえず膝をついて姿勢を低くするが、パチュリーは立ち上がる。

「けほつ。大丈夫… それに、貴方の背中に乗ると… 死ぬわ」

パチュリーはチラッとフランに視線を移す。

ああ、本当だ。何か禍々しいオーラを放っている。

「じゃ、じゃあ私が肩を……」

小悪魔がパチュリーを支える。

「だけど二人は何で落ちたんだ？ フランの部屋なんて行かないだろ？」

「ここに落ちる穴は幾つもあった……レミィとフランの部屋にある起動装置を、両方とも作動させなきゃいけないの。私たちは図書館から落ちたわ」

つまり、吸血鬼姉妹のせいでこの騒動が起きている訳だ。

「道は分かっているんだけどさ、人間の形をしていない生物がこの中にいる理由は？」

「ここは、最後の抵抗手段として作られたから……けほつ。不死の怪物が徘徊しているの、お腹を空かせた状態で。頭を潰しても半日で再生するから、戦わないのが賢明ね」

何故屋敷の中にそんなものを作るのかは措いておくが、とりあえず…。

「じゃあ、あっちの方で……」

指で指した方向から爆発音が響く。

「戦ってるのがレミリアでいいんだよな？」

コクッ、とパチュリーは首を縦に振った。

「咲夜、コレはどう壊したらいいのかしら？」

「頭を潰せば問題ないと思います」

目の前にいる……ケルベロスのような何かに向けてグングニルを振るう。

頭を二つ切り落としたが、残りの一つがレミリアに食らいつこうとした。それを咲夜のナイフが貫く。

レミリアのドレスは既に深紅に染まっていた。

「まったく、母様も厄介なモノを用意して逝ったのね。音を聞きつけて雑魚が湧いてくるし」

「お嬢様ですが、妹様も入口を開いているなんて思ってもいませんでしたから……」

頭を失ったにも関わらずピクピクと動くケルベロスの何かを、放たれたレミリアの圧倒的な妖力の塊が消し飛ばす。

「恐らく紅魔館の住人は全員落ちているわね、でなければ此処の意味が無いもの」

「穴は紅魔館の通路という通路に配置されていますからね。まあ、一人は地上で寝ているんでしょうけど」

「さっき新しく霊力を持った奴が落ちたわ。きっと勇輝ね」

「……死なないでしょうか？」

「アイツも不死だし、能力も温存しているでしょう？」

「それもそうですね」

レミリアが紅い液体と肉片で汚れた通路を踏み、歩を進める。

咲夜もそれに続くが、五歩と進む前にその歩みを止めた。

「あら、さっきのよりは強そうじゃない」

目の前には獅子の頭、鷲の翼、蛇の頭の尾を持つ体高四メートルはあるキマイラが…。

「……間違いなく、こつちだな」

真っ赤に染まった通路。レミリア達を通った後だろう。

「お兄様……。フランも、思いつきり何か壊していいよね」

血を見て発狂し始めた娘までいる。病んだ少女はお断りだ。

「出てきたら思いつきり遊んでいいから今は我慢しろ」

小悪魔の顔が青ざめて来ている。この中では一番戦闘力が低いからだろうか。

「あ、出て来た出て来た」

フランがわくわくしながら通路の先に視線をやる。

「……ゴーレム？」

石で出来た巨体で壁や天井を削りながらこちらに向かって歩いてくる。

「あーあ、これじゃ赤い出ないし面白くないや。お兄様に譲ってあげる」

本当に残念そうに溜息を吐きながらフランは後ろに下がる。

だから、面倒臭そうに溜息を吐いてからこう言った。

「おい、冗談も程々にしろ。頼む、戦ってくれ、俺はまだ死にたくない」

極力他人に任せたい。能力が使えるのはあと一度しかないのだ。

「むー。お兄様の頼みなら仕方ないか……」

フランが右手を開く。

「ぎゅっ」

フランが開いた右手を力強く握る。するとゴーレムが爆発して粉々に砕け散った。

「……いや、最初から使えよ」

と言いつつ、アレが自分に使われる事が無かった事に心の底から安心していた。

其の参拾参（後書き）

公式設定では無いので細かい事はお気になさらず。

其の参拾肆

どれぐらい時間が過ぎただろうか……。

「……吐き気がしそうだ」

噎せ返るような濃い生き物の血の匂い。それが通路に充満していた。レミリア達に追いつくどころか、キマイラと遭遇してから殆ど出口に近づけていない。

原因は襲ってくる妖怪……いや、これは使い魔だろう。目の前の人や妖怪を殺す事だけを命じられ、それ以外の自由を奪われた哀れな使い魔。

「パチュリー、フランもそろそろ疲れ始めてる。今は感情が高ぶってるから問題ないけど切れたら戦えないぞ」

「そういう場所なの。ここはレミイのお母さんが作った最後で最狂の砦。私は話でしか知らないけど、死んでも尚ここまで強力な使い魔との契約を続けられるんだから相当……今のレミイの五倍は妖力があつたと思うわ」

「……。何でそんな強いのにここまで手の込んだ迷宮を作るんだよ」

「負けたのよ。大昔に西洋からこの幻想郷に入った時に。吸血鬼は数名、相手は鬼や天狗、そして博麗の巫女。幻想郷と吸血鬼の総力戦になつたらしいわ」

話しながらもフランの援護のために靈力で武器を形作り、使い魔達に放つ。

「だから子供の為に、か？」

「分からないわ。レミイはあまりお母さんについて話さないから……」

背後からトカゲのような使い魔が食らいついてくるが、靈力の槍でその頭蓋を貫く。

しかし、そのまま勇輝を食い殺そうと顎を止めない。しかし、フランの能力によって内側から弾け飛び、肉と血液を撒き散らす。

「ちつ、数が多くなって来たな。フランの能力は一体ずつが限界。俺や小悪魔じゃ持て余すし、パチュリーは体が……」

……パチュリーの体の調子を良くしたら良いのでは？

「フラン！ ちょっと時間を稼いでくれ！」

フランに能力ではなく、広範囲を攻撃できる妖力弾に変えて貰おうとしたが……。

「お兄様を食べていいのはフランとお姉様だけなのに……お前等が食べようとするなんて……」

駄目だ。変なスイッチが入っている。話を聞くどころか声も届いていない。

だから、隣で必死に応戦している小悪魔に目をやり、ポンと肩を叩く。

「頼んだ。お前しか頼れる奴がないみたいだ」

「ええっ！？ 無理です、私死んじますよ！」

使い魔の鳴き声やフランの戦っている音がうるさくて何も聞こえない。だからパチュリーに話しかけた。

「体の調子が良ければどの程度戦える？」

「そうね、少なくとも魔理沙に後れを取らないぐらいには戦えるわ」

「十分だ」

今日の最後の一回の能力。それでパチュリーの体のあらゆる病、弱さ……欠陥を修正する。

通常の状態ではない、最高の状態にまで。

「……！行ける、今ならレミィを簡単に泣かせられるわ！」

酷い表現だ。しかし例えが例えだけに期待が持てる。

パチュリーがフランの横に並び、微笑む。

「少しだけ、本当の魔法を見せてあげるわ……そう、見えるのは一瞬だけ。貴方たちは……」

――一瞬で死んでしまうのだから。

刹那、パチュリーの前に浮かび上がった魔法陣から業火が吹き出し、使い魔を一掃した。

「す、凄い……」

小悪魔の口からそんな言葉が漏れる。

緋色の炎は一瞬で使い魔たちを灰へと変え、消滅させる。

いつも見ている病弱なパチュリーからは想像もできない、圧倒的な光景。

「ああっ！？フランのおもちゃが……パチュリー何するの！」

しかしフランは不満そうな声を上げる。

「フラン、今そんな事を言つと流水を頭から浴びせるわよ。それにここから早く出たいでしょう？」

「むー」

「拙いわね……」

「申し訳ありません。お嬢様」

咲夜は致命傷では無いが、動きに制限が出てしまうような傷を負っ

ていた。

咲夜のメイド服は返り血で赤く染まっている。しかし、その一部には自分の血も混ざっていた。

その強さから忘れてしまう事もあるが、咲夜は人間だ。体は妖怪より遥かに脆い。相手の一撃が致命傷になってしまう程に。

未だ立って戦えているのは実力、才能。そしてレミリアの従者としての気概によってだろう。

「咲夜、少し下がって休んでいなさい」

「ですがお嬢様っ！」

「私を過小評価しているんじゃない？ 偉大なる吸血鬼の力。その後ろで拝んでいなさい」

レミリアはグングニルを使い魔たちに向ける。

「母様には悪いけど、お前等は肉片へと変えてやろう……二度と復活できない程細かくな」

「……近いな」

薄暗い通路の先から伝わってくる、直接胸を抉られるような威圧感。それは今迄に一度だけ経験したモノであり、この館の主である吸血鬼の物。

「ええ、レミイの妖力ね。それより大丈夫なの？ 体力自慢には全く見えないわよ」

「小さな子供を背負って走れないんじゃない男としてどうかと思うけどな」

そう、今はフランを背負って走っている。

やはり能力の多用や、ハイになっていた反動だろう。疲れて寝てしまった。

「お二人とも、私は心配する対象に入らないのですね……」

小悪魔が何か言っていたが、構っているほど余裕はない。

「その荷物は小悪魔に預けたら？ さすがに走りにくいでしょう？」

「いや、これぐらいは何ともないから。それより……」

見えてきた。深紅の弾幕が飛び交う戦場が……。

其の参拾肆（後書き）

ああ、予定より長く……。

其の参拾伍

「レミリア！」

やっと思付いた。

しかしそこは地獄絵図。使い魔だったものが散乱し、床は赤い水溜まりが幾つも広がっていた。

そこに立つ者はレミリアただ一人。

「勇輝！ 咲夜が怪我を負ったわ。早く治してちょうだい！」

「っ！」

紅い床の上に、壁にもたれながら座る咲夜に駆け寄る。

脇腹に少々深い切り傷、足も筋肉を切られている。このまま放置したら死んでしまうだろう。

「咲夜。正直、どれくらい持ちそうだ？」

出血が傷の大きさに対して少ない。恐らく能力で血液の流れる時間を操っているのだろう。

「そうね……、意識は持って五分。死ぬのは十分後じゃないかしら」

拙い。能力がもう使えない今、診療所で治療を行うしかない。

「応急処置はしてあるな……。レミリア、悪いけど全速力で診療所に向かう。護衛はフランが付いて来てくれ。フラン、頼む。起きてくれ」

「ん……。どうしたの、お兄様？ フラン、まだ眠たい……」

「フラン、お願い。咲夜を助けて欲しいの」

レミリアの真剣な声を聞き、フランは目を擦り意識を覚醒させる。

「……分かった。フランはお兄様の邪魔をするゴミを壊せばいいんでしょ？」

「ああ、それでいいよ。それとパチュリー、出口は分かるか？」

「ええ。図書館でこの地図は見たから。それに今の私は出来ない事の方が少ないわよ？」

「よし、じゃあ咲夜。ちょっと背中に乗ってくれ」

咲夜は黙って勇輝の背中にしがみつく。

通路は狭い。フランはともかく、勇輝は霊力の翼をフルに使えないので飛んでいく事は至難だろう。

だったら、何か乗れるものを作り出せばいい。

以前レミリアと戦った時に、霊力に人の形を与えるスペルカードを使用した事がある。その応用だ。

しかし、いくらなんでも自動車やバイクなんて複雑な物が作れる筈がない。

とりあえず、時速三十キロ程出たらいいのだ。

イメージは狼。それも大きな。

折角だ。白紙のスペルカードに記録して使用してしまおう。そうすれば少しは余裕が持てる。

「創造『シェイドクリーチャー』」

「おー、速い速い。飛んでたら追いつけないかも」

予想以上に速かった。大きさは三メートルもあるし、スペルカードによって動作はループしている。そこまで精密なコントロールは必要ない。

形の維持のためにとんでもない量の霊力が消費されていくのが分かる。人が乗っても形が崩れない程の密度があり、大きさもかなりなので無理もないが。

しかし、霊力切れの心配は無い。

以前は霊力の少なさを欠陥とし、量を修正していた。しかし今は霊力が“減る”という事を欠陥とし、修正しているのだ。

だが良い事ばかりでもない。元々の霊力の量を超えるような出力が

出ないのだ。

つまり、霊力の翼を使っている時は単発で霊力弾は放ててもスペルカードを使用できない。この狼を作ったスペルカードを使っている限り、霊力弾は作れない。

だからこそ、フ란の護衛が必要不可欠だった。

フ란が落ちないように勇輝がフ란を囲うように乗り、咲夜はその背に抱き着く。

使い魔が見えたらフ란が能力で倒し、他の使い魔が集まってくる前に霊狼で駆け抜ける。

これなら出口まで二分で着くだろう。しかし、問題はここからだ。

既にこの上は紅魔館ではない。壁や床も加工された石造りではなく、剥き出しの岩壁となっている。

空間を把握する程度の能力によれば、出口は霧の湖の水中。当然肉食の妖怪が泳いでいるし、以前鯨がいるのを確認した。

そして、今の三人にの衣服には血がべつとりと染み付いている。

「ここか！」

目の前に半径2メートルほどの池が見える。霧の湖に繋がっているのだろう。

「お兄様、ここ行き止まりだよ？」

「……ああ、フランは外に出た事無いのか」

なら、湖も知らないだろう。

霊狼を消し、違うスペルカードを取り出す。

「咲夜、傷に触れると思うけど我慢な。それと、泳ぐから潜る前にしっかり息を吸い込むように」

「え、ここお風呂じゃないよ？」

フラン、風呂は泳ぐ場所じゃない。

「行くぞ……。惨符『一本道の鬼』」

開発した中でも、三本の指に入るほどエグイスペルカード。四方が二メートルの通路に敵を閉じ込め、両側の出口から大量の霊力弾を送り込むというもの。

本来なら出口は両方自分の前に作るのだが、今回は湖の上だ。

一時的に作り、使っているだけとはいえこの『空間を把握する程度の能力』は便利だ。

距離まで分かるのは嬉しい誤算だろう、そのお陰でこうしてスペルカードを最大限利用できる。

水上まで二十メートル。……息が持つか心配だが、行くしかない。

そして、霊力の通路の中に肉食の魚が入っていないとも言いきれない。

意を決し、三人は水の中へと飛び込む。

「ん？ アレ何だろ」

霧の湖の上、そこには妖精がいた。

「チルノー。どうしたー？」

肉食の妖怪もいた。

「ルーミア、ほら、これ……」

チルノは湖から突き出るように現れた霊力の柱のようなものを指差す。

「何これ？ 食べられるの？」

「あたいの感じや、これはアレね……アレよ！」

「……そーなのかー」

「とりあえず凍らせよつと」

「……！？」

通路の先の水が凍り始めた。拙い、あの馬鹿を計算に入れていなかった。

フランに目配せすると、フランは頷き右手を掲げて開く。

視線を上に戻すと同時、氷が粉々に砕け散った。

水面まであと少しだ。もう、スペルカードはいいだろう。

フランに見えるように上を指差し、通路を消し去ると同時、背負っていた咲夜を腕で抱き、霊力の翼を作り出し浮上した。

翼が水を持ち上げ、水が舞い上がる。その時に悲鳴のようなものが聞こえたが気のせいだろう。

「フラン！ 俺は診療所に向かう！」

「フランも行く！ どうせお家への帰り方分からないもん！」

咲夜は気を失っていた。急がなければ……。

霊力の翼を羽ばたかせ、人里へと急いだ。

フランが気化しそうになり、慌てて赤く染まった白衣を被せたのは余談である。

「……とりあえず、命は助かるか」

診療所で咲夜の傷の縫合を済ませ、輸血をしながらベッドに寝かせた。

赤い白衣は水を張った桶に突っ込んである。

傷痕は大きく目立つし、足の神経にも損傷はあるだろう。悔しいがこの設備ではどうする事も出来ないなので能力に頼るしかない。

「お兄様の家、ちっちゃくて可愛いね。キレイだし」

フランはさっきから診療所の中をぶかぶかのシャツ一枚でうろろしている。血塗れの服でいるのはどうかと思ったので着替えさせた。

咲夜もメイド服から着替えさせたが、不可抗力だった。やましい気持ちは微塵もない。

死にかけた患者に欲情する医者がいたら、医者を辞めた方がいいだろう。

「フラン、頼むから大人しくしてくれ」

診療所に入るまでに何人もの人に見られた。しかも吸血鬼と共にいるのだ、直に慧音や妖怪嫌いの人間達がやって来るだろう。

「桜井殿、話がある！」

玄関の方から声がする。

「来たか……。フラン、咲夜を見ていてくれ。それと何が聞こえても、里の人間が何をしようと大人しくしててくれ、頼んだぞ」

「うん……。でも、お兄様が危ない目に遭うようなことはしないでよ」

「……ああ、約束する」

「桜井殿、お聞かせいただきたい。何故悪魔の従者を助けるのですかな？」

「やって来たのは十人。若い男が七、重役が二、そして慧音だ。」

「何故か？愚問ですよ、俺が医者だからです」

「そういう意味じゃねえ！ どうして妖怪の見方をするのかって聞いてんだー！」

男の一人が声を上げる。血の気が多いようだし、献血でもしてやろうか……。

「アイツは人間だ。助けていけない理由は見つからないな」

「悪魔に魂を売ったんだろ、だったらもう人間じゃねえ！」

……ああ、駄目だ。

物事を感情的に、まるで自分の考えが正しいとでも協調されると思

っている。

自分を中心に世界が回っているとしても勘違いしているのか。

「……おい。餓鬼か、お前は？」

「っ……」

男は面を食らったような反応をする。突然、今まで呆れ顔で話していた相手が威圧感を含む声色で罵倒してきたのだから無理もない。

そして当の勇輝の眼光は鋭く、声には感情が無い。

「偏見で物事を判断するな、吐き気がする。それにお前が邪魔をするなら、俺はお前を殺す。患者一人を馬鹿一匹排除するだけで救えるなら安いモンだ。答えろ！ 邪魔をするのか、しないのか！」

「……チッ」

男は舌打ちをする。だが、そうするべきでは無かった。

いつ取り出していたのか、勇輝は手でメスを弄ぶ。そして、それを俺の足下に投げる。

ドッ、という音と共に半分以上を気の床に沈ませたメスを見て、慧音以外の九人から冷や汗が流れた。

「俺はさ、二択で質問してんだよ。理解出来なかったか？」

「し、しない……。邪魔はしねえよ」

怖じ気づいた男から視線を外し、重役に目を向ける。

「里に危害は無い。それに咲夜はある程度友好的に里と接していた筈だ」

「ああ、治療は構わない。しかし、被害が出ないという確証が欲しい」

「……博麗霊夢を呼ぶ。それで文句は無い筈だ」

「分かった、それなら皆納得してくれるだろう」

これで里との交渉は済んだ。だが……。

「まだ何かありますか？ 慧音さん」

「……少し、話がしたい」

其の参拾伍（後書き）

ああ、まだ終わらない……。

そして文字が多くなってしまった。

其の参拾陸

「それで、話って何でしょうか？」

診察室では咲夜が寝ている。二人は待合室で向かい合って座っていた。

「お前は……。お前は何のために医者になったんだ？」

「……………」

「私には分からない。だが、少なくとも人を救うために医者がいると思っている。……どうしてあんな事を言った？」

「……………少し、昔話をします」

十三年前の事だ。

父親がいつものように、表向きに病院に行けないような人達の所へ朝から治療に行った日の昼。

当時六歳だった勇輝は、既に父親の仕事を見たり、勝手に資料を漁って勉強をしたりしていた。

周りの子供より大人びていたが、ヒーローに憧れたり、親の仕事に興味を持つなど年齢相応の感性を持っていた。

しかし、その日は唐突に訪れてしまったのだ。

母親と二人、何も変わった所の無いマンションの一室で母親に甘えながら休日を過ごしていた。

「勇輝、大きくなったらどんな事がしたい？」

今はもう、顔も思い出せなくなってしまった母親。

どういう訳か、小さな頃の自分の写真や映像はあるのに、そこに母は一度も写っていないかった。

「んー。父さんと同じ仕事がしたいかな」

「そうなの？　ならいっぱい勉強しないといけないわね」

「大丈夫だよ。クラスではテストも一番できてるもん」

「そうだったわね。勇輝は頭も良いし、しっかりしてるからきっとなれるよ」

子供の将来の夢を聞いている。そんな普通に微笑ましい時間だった。

だけど、母親は倒れた。

その症状から、勇輝は母親が重い病気にかかっていることを理解した。だから、病院に連絡を入れた。

「母さん！　もう直ぐだから、あと少しで救急車が来るから！」

最適とはいえなかったが、父親の部屋から薬を持ち出し、その病の苦痛を和らげる処置を行った。小学生であつた身から考えると、これ以上ないぐらいの判断だつた。

救急車が来たのは十五分後。母親は病院へと運ばれた。

「君、お父さんは今何処にいるか分かるかな？」

母親を担当したのは初老を迎えた白髪 of 男性の医者だつた。

「分かんない。父さんは電話も持っていないし……」

医者は困つたように、ボールペンで机を叩く。

「君のお母さん。恐らくは過労による貧血、……つて言つても分からないよね」

「分かるよ！ でも違つ、母さんは貧血じゃなくて……」

「ははっ、賢い子だね。でも、症状は貧血で合っているんだよ。今日一日、点滴をしながら入院すれば直ぐに良くなるから」

「話を聞いてよ！ 母さんは違つ病気なんだ！ 早く治療しないと……」

「大丈夫だよ。お母さんの病室まで案内してあげるからね」

医者は看護師を呼んで、勇輝を連れて行くように指示する。

勇輝は不満だつたが、本物の医者が言うなら気のせいかもしれない。

そう思つて、一晚中母親の傍で寝ずに看病をしていた。

次の日の朝。母親が冷たくなっている事に気づいた。死因は、虚しくも勇輝の思つていた病による物であつた。

「と、まあこんな所ですね。あの時、親父がいたら母さんは助かつたかもしれない。それに自分にもう少し知識と自信があつたら、助けられたかもしれない。それが医者になつた理由です」

慧音は何も言わない。ただ、勇輝の話に聞き入つたいる。

「だから、俺は自分の患者は全力で助けます。二度とあの時の状況を作り出さないように。誤診も失敗も許されない、絶対に死なせてはいけない……それだけです」

「……他人を、犠牲にしてもか？」

「場合によります。俺の中では、治療に当たつた患者の命が最優先です。例えるなら二十人分の命でしょうか？ そういう事です。大勢を救うための少数の犠牲、正しいと自信を持つては言えませんがどね」

「だけどそれでは……ッ！」

「理屈じゃないんです。言ってみるなら枷ですね、幼いあの時の自分が架した……」

慧音は何も言わず、診療所を後にした。呆れられたのか、黙認され

たのか。どちらにせよやる事に変わりはない。

とりあえず、里の人間たちを納得させるために霊夢を呼びに行くことにした。

「て訳だ、明日まで診療所にいて欲しい」

「嫌よ。面倒じゃない」

「飲み食いは好きなようにしていいからさ」

「よろこんで行くわ」

話がつくのに、モノの数十秒もいらなかった。

「お兄様……」

フランは戸惑っていた。

聴こえていたのだ、勇輝の過去の話が。

それに、その話は自分に話されたものではなく、それでいて他人が聴くには重すぎる話。

フランは勇輝を気に入っている。寧ろ好意を寄せていると言ってもいいだろう。

初めて、自分から逃げずに共にいる事を選んだ存在。

姉のレミリアでさえ隔離という処置を取っていたのだから、その反動もあるのだろう。

勇輝がストッパーになっているという事で、紅魔館の中なら自由に
して良いという許可も貰えた。

あらゆる方面で自分を救ってくれた存在なのだ。

だから力になりたいと思う。けど、自分にはそれができない。

壊す事しかできない自分には、人を治す事はできないのだ。

眠る咲夜を見ながら、フランは右手を血が出そうなほどに握りしめた。

其の参拾漆

冬の博麗神社。

いつも巫女以外に人影の見えない、人里の人間は何故この位置に建っているのかも分からない静かな神社。

しかし、今日この日は賑やかな声と人気で騒がしくなっていた。

里の医者、桜井勇輝もその宴会の席に招待されている。そんな彼の、此处に着いてからの第一声は……。

「酒臭え……」

彼は生前というか、外で普通に暮らしていた際、十九歳という大人の一步手前の年齢であった。

当然、飲酒喫煙はした事がない。成人式にすら出る事が出来なかった。幻想郷に入ったせいだが。

そう考えると、何故あのタイミングだったのかと自分の運の無さを嘆きたくもなるが、この際どうでもいい。

幻想郷に来て、あと数ヶ月で一年だ。そして年齢も二十を迎えた。

その事は周りに話していない。そもそも、身体は十九で成長どころか老化も止めている、そして周りには見た目小学生低学年の長く生きている吸血鬼。何十年も紅魔館で図書館に籠っている魔法使い。年齢は分からないが、周りからの反応を見るとかなり年上扱いされ

ている節のある半獣。

……こんな面子の前で、自分二十年生きましたよ。なんて報告を試みる、殺される。

きつと、許されるのは霊夢や魔理沙にだけだ。だけど奴等は口が軽い。

「おい、勇輝ー。飲んでるかー？」

顔をアルコールで赤くさせながら、上機嫌で魔理沙が近寄ってくる。開けたばかりの、中身が大量に入った酒瓶を“両手に”持ちながら。

「んー、まあ少しずつ。あんまり酒は強くないみたいだから」

身体が成人してないから、という訳ではなく体質の問題なのでこればかりはどうにもならない。

「なんだと、私の酒が飲めないってか？」

「いや、そういう訳ではなムグツ!？」

酒瓶ごと口に酒を注ぎこまれる。

飲まなければ窒息死。そして、短時間での大量のアルコール摂取は……死ねる。

「おーおー、飲めるじゃないか」

駄目だコイツ、早く何とかしないと……。

いや、本当に何かしないと死ぬ。少なくとも、明日素晴らしく鬱になるような頭痛に見舞われる。

酒に弱いのは欠陥だったのか……、いや、それは個性というヤツであって酒に強い人間が優れているなんて事はない筈で……。命の危機が迫っている。

でも、死ねなくなってるんですよね。また苦しみ続けるんですか。

「はっ……！」

何時の間にか宴会用に敷かれたシートの隅の方で座っていた。さっきまで中心部にいた筈だが。

「少しは断る事を覚えたらどう？ 将来、尻に敷かれる事になるわよ」

「咲夜か、助かった」

「別に良いわよ、助けたのはお嬢様の相手をさせるためだから」

「ああ……」

咲夜にあの時の怪我の面影はもう無い。後日に能力で傷を元に戻したお陰で、その日からメイドの仕事に復帰している。代償は違う方面でそれなりにあったが。

余談だが、あの地下迷宮はパチュリーの手によって何重もの結界と行程を一つずつ解除した場合のみ使えるように設定された。二度と

行きたくない。

紅魔館からも、総出で宴会へと出席していた。残っているのは小悪魔だけである。

普段、図書館から一步でもないパチュリーですら宴会に参加していた。美鈴も忘れられずついて来ている。

「勇輝、早くこっち来なさい」

「お兄様ー、早くー！」

フランはあの日、咲夜を診療所に運んだ際に何の問題も起こさなかった事もあって勇輝に会いに来る場合のみ外出を許可された。勿論、監視に誰かつけるのが条件だが。

紅魔館メンバーの周りには、日本酒ではなくワインの瓶がいくも置かれていた。正直、空気を壊しているように見えなくてもない。

見渡してみると、この宴会の席の食べ物の方がおかしい。

まず、飲み物と食べ物の方が九対一なのだ。この時点で常識離れしている。

そして、“宴会”であるのに和と洋の方が半々なのである。決してパーティーではなかった筈だ。

料理を作っていたのが咲夜と霊夢なので仕方ないのかもしれないが、見栄えとしてはどうかと思う。

「夜なら外でも自由に行動できるのにね……これじゃ傘の下しか居られないわ」

「なら夜になってから来たらどうだよ……」

「私がもう言ったわ。レミイが貴方に会うつて聞かないのよ」

それで気化されたらどんな反応をしたらいいのだろう。

「別に良いけどな。俺の家でやる訳じゃないから片付けも雑で良いし」

「あー、お兄様が霊夢に喧嘩売って……」

「やるよ!? 少なくとも自分の出したゴミぐらい完璧に片付けるよ!?!」

霊夢に喧嘩を売ったら消し炭になる。魔理沙の魔砲が可愛く見えるぐらいの攻撃で。

「でもさ、何で昼から宴会するかな……」

「日付もおかしいわね」

「……やっぱり数え間違えとかじゃなかったか」

「ええ。今日は十二月三十日、大晦日の前日よ」

そう、今日は大晦日ですらない。その前日だ。

宴好きな巫女が、前日の昼から宴会を始めたのだ。

正直に言おう、迷惑だ。掃除がしたかった。

大晦日は忙しくなるだろうと、今日掃除を終わらせる予定だった。

そんな事を考えていると、酔った霊夢がこんな事を言い出した。

「よし、皆酔って来たところで各自、秘密の暴露を始めるわよー
」

其の参拾捌

「また唐突な……」

霊夢は酒瓶片手にふらふらと紅魔館メンバーの方へ近寄ってくる。駄目だ、完全に出来上がっている。

よく見ると、霊夢は魔理沙ともう一人、誰かを引き摺っていた。

魔理沙と似た金髪に、カチューシャをした頭……どこかで見た気がする。

「霊夢……。秘密を話し合うのは別に構わないけど、まだ日が傾き始めたばかりよ？ 年明けまで持たないんじゃないかしら」

「なに言ってるのよ、最後は弾幕ごっこにきまつてるでしょー」

無理です。貴方達のような化け物と一般人を一緒にしないで下さい。

霊夢がビシッ！ と勇輝の顔を指差す。

「まずは勇輝さんから、はいどーぞ！」

「んな無茶な……」

「五秒以内に言わなかったら全員のスペカで挟み撃ち」

「はっ？ いや待て、死なないけど死ぬよ俺」

「じー、よーん」

「分かった！ 分かったから！」

仕方がない、こうなったらアレを言うしか……。

「実は、外界にいた時は彼女がいました……」

殴られた。誰とは言わない、ただ五人ぐらいに同時に殴られた。

「嘔吐くなよ、何か言え」

「……家の診療所、庭にお墓を建ててあります」

手紙を届ける際に妖怪に襲われた鳩の。幻想郷で伝書鳩は使つてはいけない。

「はい、じゃあ私ね。家の神社、私の代になってから賽銭が五百円しか入ってませーん」

言ってから足で地面を蹴りつける霊夢。もう駄目だ、寝てしまえ。

「次は私だな。……図書館から借りた本の半分は勇輝の書斎に置いてあるぜ」

魔理沙、お前は どうして そう……。

「じゃあ私ね。五百年生きているけれど……背が、何百年も変わってないわ」

レミリアが持っていたグラスを砕く。……後悔するなら言わないでほしい、そして物に当たるのをやめてほしい。

「じゃあ次フランね。えっと……あ！ お姉様の部屋にお兄様のしやしつ……」

フランが何か言いかけた所でレミリアが口を塞ぐ。

その後も、秘密の言い合いは続いた。咲夜は……。

「お嬢様の下……ではなくパン……。そうですね、月に一度くらい掃除の手を抜きます」

パチュリーは……。

「体は弱いけど、流行り病には罹った事が無いわ」

美鈴は……。

「何度も……仕事中に寝ました」

と、馬鹿正直に答えるか適当に当り障りの無い事を話していく。

そして、彼女の番になった。

「まだ言っていないのは私だけ？」

「あれ？ アリスか？」

「気づいてなかったの？ 最初からいたんだけど……」

此処に着いてからは、直ぐに魔理沙に絡まれ霊夢に飲まされ、魔理沙に絡まれてレミリアに絡まれた。

とてもではないが、周りよく見る暇は無かった。……と、思う。

「なんだよー、勇輝とアリスは知り合いだったのかー」

もう真面に立ってられない魔理沙は放置。

「じゃあ言うわね。私……何年か前まで人形だけが友達でした」

……重いんだけど。

「でも今は人間の友人が持てたわ……普通ではないけれど」

「失礼なー、私は普通の魔法使いだぜー」

「あんな魔砲が連射できる奴が普通なら幻想郷は既にねーよ」

そして二周目に続く。

日が沈み始め、空が赤くなる頃には勇輝以外の全員が酔いつぶれていた。

「……賑やかな奴等だな」

断り、逃げ続けていたらほとんど飲んでいない。むしろ助かるが……。

「幻想郷はどうかしら？　桜井勇輝君」

いきなり背後からかかった声に、年甲斐もなく肩をビクツと震わせ
てしまう。

「妖怪の賢者様が何か用で？」

振り向いたそこにはスキマ妖怪。いつもの様に怪しげな笑みを浮か
べながらスキマから足を出し、座っていた。

「冬眠する前に宴会でも参加しようと思ったのだけれど……どうし
て夕方に終了しているのかしら？」

「昼からやってたからな。夜になればまた始めるんじゃないか？」

「そう……、じゃあ春まで待つ事にするわ」

「本当に冬眠するのかよ」

人間じゃないが、姿は人のそれと同じ。……どう冬眠するのだろう。

「それで、答えは決まったの？」

「当然。それに、あの時に話した筈だけど」

「まだ何も知らない状態で聞いたんだもの、今聞いたら答えが変わ
っているかもしれないでしょう？」

「変わらないさ。利用されても構わないし、あの約束も数年の内に
は果たすよ。身体も幻想郷に馴染み始めたみたいだからな」

「あら？ 気づいていたの？」

「自分の身体の状態ぐらい把握してるよ。一見、外界にいた時と変わらないけど」

霊力、妖怪、能力、異変。外界では存在しないものに触れてきた今、自分は“普通の”人間の枠から外れてしまっている。

既に、霊力を“普通に扱えてしまっている”自分は幻想郷で生きていくしかないのだろう。

「それに、日に日に霊力が増えているんだ、嫌でも分かる」

「……もう、外界で貴方は忘れられた存在になっている。血の繋がった親からも、親しかった友人からも、貴方が桜井勇輝だと認識されない。そして、貴方がいたという記録さえ世界から抹消される」

「上等。やりたい事は見つけた。生きる目的もある。こっちで仲良く、面白可笑しく話せる友人も出来た。俺はそれで十分、俺が生きている理由なんてそれだけで良い」

「……ふふつ。やっぱり貴方は面白いわ。この幻想郷を作っていた時以来かしら、ここまで気分が高揚するのは」

「あの約束も、やるなら徹底的にやるぞ。二度と俺に頼みたくなくなるくらいには」

「へえ……。まあ、死なない程度にやってちょうだい」

「死なないってか、死ねないんだよね……。死のうと思えば死ねそうだけど」

「生と死の境界、弄ってあげましょうか？」

「冗談じゃない。俺はまだやりたい事がある」

「そうね……。じゃあ、改めてようこそ、幻想郷へ」

其の参拾捌（後書き）

閑話入れたら妖々夢。さて、暴れようか。

閑話貳

まだ、勇輝が紅魔館で働いていた時の事だ。

「パチユリー様が、ですか？」

「ええ、何でも外にはどんな本があるのか聞きたいらしいわ。フランには咲夜が言っておくから勇輝はパチエの所に行きなさい」

「分かりました。それと嬢様、咲夜に俺が寝ている間に血を抜くのを止めて貰えるように言っではくれませんか？ 起きたら頭がくらくらしてしまつて……」

「咲夜はそんな勇輝の姿を見て楽しんでるみたいよ？」

「……そうですか」

諦めよう。時間を操る相手に対応出来る奴がいたら、それはとんでもない化け物だ。

不満な気持ちを拭いきれないまま、勇輝は図書館へと歩いていった。

「あ、勇輝さん。パチユリー様がお待ちですよ」

図書館に入つてすぐに、小悪魔が近寄ってくる。

何度か入っているが、ここは迷う。

「了解、案内してくれると助かるんだけど……」

「良いですよ。その為に待機していたようなものですから」

小悪魔に続いて、山のような本棚の間を歩いていく。

「大変そうだな……こんなデカイ図書館で働くななんて」

「私はもう慣れてますから。それに、私からしたら……お屋敷で一番危険な職場に平気な顔をして出向く勇輝さんの気が知れません」

「貶してないか？」

「まさか、誉めてます。勇者ですよ」

「……ハア。転職を考えようかな」

本気で出ていく事を考えた。恐らくはフランがキレて、咲夜に連れ戻される。

お先真つ暗、せめて少しぐらい人里に行かせてくれても良いと思う。未だに人里へは入った事が無いのでどんな場所かは分からないが、普通に暮らしたい。

「遅い」

開口一番に出た言葉はそんな厳しいものだった。

「申し訳ありません、パチュリー様。何分、屋敷に慣れていないも

のですから」

「まあ良いわ。急ぎの用では無いし」

そう言うと、パチュリーはテーブルの上に積まれた本を移動させ、空いたスペースを作る。

「そこに座って」

「失礼します……」

言われた通り、指示されたイスに座る。

「今日聞きたいのは外界の本についてよ」

「と、言われまして中身を完全に記憶している訳ではありませんので役に立てるかどうかわかりませんよ？」

「欠けた知識は能力で補えるんでしょ？」

「ああ、成る程……」

「それで、外界にはどんな本があるの？ 偶に幻想郷に流れて来る物もあるけれど、他にどんな物があるか知りたいの」

「一応確認して措きますが、流れて来た物にはどのような本がありますか？」

「まずはコレね」

パチュリーが取り出したのは、現代にはないような紙を糸で纏めた歴史を感じさせる本。

タイトルは……『書新体解』。

「つて解体新書!？」

何て物が流れて来ているのだろう。日本で初めての解剖学の医学書、読みたい。

「そんなにな有名な物なの？　じゃあどうして幻想郷に流れてきたのかしら……」

「名前は有名ですが、その形に問題があります」

「そういう物なの……？　じゃあ、次はこれなんだけど」

……同人誌ですね。それもボーイズラブの。

「それは捨てて下さい。お願いします、それだけは世界から抹消して下さい」

その後も、無駄に驚かせる本ばかりが紹介されていった。

「これで全部ね。それで、外界には他にどんな物があるの？」

「何、と言われましてもね……。取りあえず、漫画に関してはこの数千倍はあると思います。小説も数百倍、図鑑も同じくらいでしょう」

「そんなに……、じゃあ貴方の読んだ事のある本を全て複写して出来るでしょう?」

ジャンルが偏りそうだ。そして趣味が丸分かりになる。

「大した本は読んだことが無いのですが、それでもよろしいでしょうか?」

「どうせ、この漫画という物ばかりなんでしょう? それでいいから書きなさい」

「……了解しました」

著作権は……まあ大丈夫か。

能力で記憶の欠陥と、絵をそっくりそのまま写せるように画力を修正。

……最後に紅魔館で医者らしい事をしたのはいつだったっけ。

「……漫画を描くために紙四千枚とペンの用意をお願いします。丸一日かかりますが良いですよね?」

徹夜してやつと一種類。しかしコミック十数冊分を一日で描くのだ、早いには違いない。

パチュリーは言われるままに道具を用意する。

後にパチュリーは語る。あの時の勇輝は明日世界が滅亡するのではないかという気迫でペンを走らせていたと。

「……………」

「そんなにならなくても良かったのに」

書き上げたのは半分以下。しかし多いのには変わらない。

パチュリーは纏めて置かれた紙の束の一つを手に取り、読み始める。

現在、午後十一時半。あと三十分で日付が変わる。

パラパラと紙が捲られる音だけが図書館の中で響いていた。

「……………どうしてこの漫画なの？ 他にもあったと思うんだけど」

「……………いや、何となくです。孤島での惨殺とか、解ける筈のない文書とか、魔女とか。とりあえずコレなら続きは書かなくても許されるかと思ひまして……………最初は」

「そう……………。じゃあ、続きお願いね」

「え、あの……………」

「もう一日くらいなら借りてられると思うから」

「俺の精神的な問題なのですが……」

「能力、使えば良いでしょ」

「……はい」

閑話貳（後書き）

紅魔館での何気ない話の一つ。出番が少ない人の救済とも言える閑話です。

どういう漫画を描いていたかは……分かる人には分かるでしょう、前作のが面白いですが。

其の参拾仇（前書き）

東方妖々夢・春雪異変。次の幻想をお楽しみあれ。

其の参拾仇

幻想郷も、何度目になるか分からない春を迎えてから数十日。

まだ、雪が降っていた。

「……異変、なのか？」

幻想郷に来て早一年。患者の来ない診療所の所長であり、人里唯一の医者である桜井勇輝は窓越しに雪が降るのを見ていた。

今は五月。本当なら桜も散り始める季節だ。

ある日を堺に患者の来なくなった診療所は設備ばかりが充実していた。

他の家屋には見られない電子機器が幾つも置かれているが、やはり勇輝以外に人はいない。

「……異変を解決してみるか」

やる気の無さそうな表情で、勇輝は診療所を後にした。

人里の道は雪が積もっており、歩く者は少ない。

子供が数人遊んでいるが、特筆する所は無いだろう。

「勇輝？ こんな所で何をしている？」

「慧音さんじゃないですか、お久しぶりですね」

あの気まずい会話も今となっては昔の事、二人の関係は以前と変わらないものになっていた。

「今から会合の筈だが……。何処へ行くつもりだったんだ？」

「紅魔館、魔法の森、博麗神社ですね」

「……また厄介な場所ばかりだな」

「ほら、ここまで冬が続くなんて立派な異変じゃないですか。異変と言ったらこの三つでしょう？」

「博麗神社は分かるが後の二つはどうしてだ？」

「紅魔館は前回の首謀者がいますし、魔法の森には霧雨魔理沙がいますからね。異変についての先輩には話を聞いて損は無いですから」

「そうか、じゃあ他の者にもそう言うておく」

「お願いします。異変は俺が霊夢、それか魔理沙が解決するでしょうから待って下さい」

「ああ、期待している。……それと、やはり診療所の方は」

「大丈夫です。必要としている患者は来てくれますから。それでも、あの時から減り続けているのは間違いないですけどね……」

「……。そうか、では異変の解決、頼んだぞ」

「はい。まあ期待せずに待っていて下さい」

誤算だった。

「……死、ぬ……………」

厚着してくるのを忘れた。とんでもなく寒い。

現在、霧の湖の周辺を散策中である。

理由は紅魔館に行く事と、もしかしたら犯人かもしれない奴に会うため。

「寒い……凍る……………」

これで本当に死んだら…………いや、死ねないのか。

冷凍されるだけ、解凍は自分で出来る。

「まさかコレが冬眠…………ッ！」

違うだろ。

と、ふざけた事を考えていたら目的の人物が凍った湖の上に倒れているのを見つけた。

よく見ると湖の氷が割れていたりする。戦闘の後だろうか。

「おーい、生きてるかー？」

倒れている人、ではなく妖精に話しかけると、弱々しくも答えが返ってきた。

「また……負けた」

……さて、霊夢の仕業か魔理沙の仕業か。

とりあえず、チルノが負けたのに気温が変わっていない所を見ると、どうやらチルノは今回も無関係らしい。

助け起こさずに、紅魔館に向かうことにしよう。

「させないよっ！」

「早いな、復活」

「ゆーきになら勝てる！ 弾幕ごっこで勝負よ！」

「いや、この前俺が勝った……」

「いいから勝負！ あたいが勝ったら今すぐにお菓子勝ってくる
こと」

「じゃあ俺が勝ったら俺の周りの冷気を抑えてくれ」

「いいよ、勝つのはあたいだから」

「枚数は二、機数は一。それでいいな？」

「分かった。氷符『アイシクルフォール』！」

……あ。

「……使うスペル、間違えただろ」

勇輝が立っていたのはチルノの目の前。対してチルノの使ったスペルカードは両サイドから挟むように“一定以上の距離離れた”相手を狙う弾幕。

何も言わず、霊力の弾を一つ、右手で作り出す。

勝敗は決した。これ以上無いほどに呆気なく、虚しく……。

少しだけ寒さが抑えられた後、今度は飛行して紅魔館を目指した。

本日、既に能力は二度使用している。

いつもの事ながら、半日経っていないのに回数制限に達するのは勿体ない気がしたのだ。

用途だが、身体の総合的な修正。それと霊力、体力の減少を修正した。

詳細を言うと、妖怪に劣らない身体能力と強度。尽きない体力と霊

力だ。

十分過ぎる気もするが、周りに化け物しかいないのでこれでもまだ不安だ。

さて、紅魔館が見えてきた……。

「咲夜が解決しに行った？」

「ええ、今朝早くに出て行ったわ」

まさか咲夜が異変解決に動くとは思っていなかった。

「咲夜は花見が好きだから……」

「いや、そんな理由でかよ」

まあ、レミリアに聞くのも咲夜に聞くのも同じだろう。

「じゃあ聞きたいんだけどさ、異変を解決した事ってあるか？ それと、冬が長引いている原因とか」

「異変に関わったのは二度だけ。どちらも起こした側よ。原因はそうね……春を盗んでしまえば冬のままになってしまっうんじゃないかしら」

「季節を盗むなんて意味分からねえよ……」

「それが幻想郷よ。外界とは隔離され、外では有り得ない事が多々起きる。実感はあるんでしょう?」

「……ああ、外での常識は通用しないんだっとな」

となると、何か痕跡のような物が残っているかもしれない。

降雪機のように露骨な物ではないだろうが、所々に春が来なくなる原因が。

「助言としては……目の前で起きている事を疑わない事。ぐらいかしら」

「要はとりあえず理解するのは諦めて認めてしまえ、と」

「……あ、うん。それでいいわ」

其の肆拾

「手掛かりが……無い」

もう昼を過ぎている。しかし、一向に異変については分からず、飛び回るばかり。

そして迷っている。

空に目印がある筈なく、自分の直感に従い進んでいたら今どこを飛んでいるのか分からなくなってしまった。

地上を見れば雪や樹木。同じ風景がずっと続いている。

「しかしアレだな。ここが日本だなんて信じられなくなってくる」

自分が住んでいたのは建物ばかりが建ち並び、木は公道に立つもの、草はコンクリートの間から生えているもの。山なんて遠目にしか見たことがない。

しかし、此処はそれが満ちている。いや、今までと真逆なのだ。

外は人の住み処で溢れかえっている。だが、ここでの勢力図では人間など気にならない程でしかない。

と、感傷に浸っている場合ではない。

とりあえず東に向かおう、博麗神社がある筈だ。

だが東がどつちか分からない。空は雪雲で覆われていて、太陽の位置が分からないのだ。

「ん？ 此処は……」

以前見たことのある、人里から離れた場所にある小さな民間。

しかし、住んでいるのは人でも、獣でも無い。

そして、民間の中から煙が上がった。

「さて、運べそうな日用品を探しますか」

「うつ……本当に持つてくの？」

スペルカードルールでの決闘に勝利した博麗霊夢はマヨヒガで日用品の物色を始めていた。

今日、偶々マヨヒガにいた式である橙は侵入者を閉じ込めようと思ったが、その明らかに空き巣を働こうとする態度を見て迎撃戦を挑んだが、敗北。

「紫様と藍様に怒られる……。けど私じゃ……」

そんな時、数ヶ月前に出会った者の霊力をマヨヒガの入り口から感じた。

「あつ！ 異変の犯人がこの家の入り口に！」

「え？ 本当？」

霊夢が出入口へと向かった後、橙は……。

「すみません勇輝さん。これも紫様と藍様のため……」

「さて、八雲家の誰かはいますかねーっと……」

マヨヒガには一度だけ来たことがある。例の紫に助けられた時だ。

本家は別の辺境にあるらしいのであまり期待は出来ないが、誰かいるのは間違い無いのだ。

「まさか勇輝さん。貴方が犯人だったなんてね……」

「え？」

いきなり目の前に現れた霊夢。更に、その手には弾幕ごっこの弾であるう霊力の御札。

「賽銭の恩があるけど仕方ないわ……。さっさと春を返してもらわよ！」

「いや、意味分かな……」

「問答無用！ 弾幕勝負よ！」

「……まあ、良いか。異変を解決するのは本来俺の仕事じゃないし、暇を潰せるなら」

きつと人間相手になら手加減……してくれそうに無いな。咲夜は全治三週間だったらしいし。

時間を操って一日で治したらしいが、今はどうでもいい話だ。

「ルールはスペルカードルール。枚数は五枚、機数は三。立会人は……猫、出てきなさい！」

「私には橙という藍様に貰った名前が……」

何処からか現れた式の妖怪。ああ、原因はコレか……。

「橙、今度会ったら紫にチクる。当然藍にもな」

「そんなっ!？」

少しは反省したらいいと思う。

「外で良いよな？」

「ええ、ここじゃせまいもの」

さて、暇潰しで異変解決をしようと思ったたら大変な事になってしまった。

自業自得だが、相手はレミリアを瞬殺できる。

しかし、今の桜井勇輝は普段の桜井勇輝では無い。

霊力は減らない博麗霊夢並みの霊力。身体能力も吸血鬼並みで体力も減らない。

体も、人間とは思えない程に強固だ。

しかし、弾幕による勝負でそれらは少しのハンデにしかない。

如何に相手の虚を突き、美しく恐ろしい弾幕を作り出せ、相手を翻弄出来るか。

それがスペルカードルールの大前提だ。

正直に話そう。勇輝のスペルカードは相手に当てる事が大前提となっている。

つまり、美しさもへったくれも無いエグい弾幕が殆どなのだ。

枚数が決まっているこの勝負、どちらも機数を残したまま勝負が終わった場合に勝てる自信は……無い。

だが、こっちは霊夢のスペルカードを見たことがあるし、今なら避けられると思う。

しかし、話によれば霊力の翼は体の一部として扱うらしい。これは誤算だった。

経験値、状況、スペルカードの種類、その他色々から叩き出した勝率は……。

「じゃあ……始めっ!!」

橙の声と同時に、霊夢が十や二十では済まない霊力の御札を飛ばしてくる。

勇輝はまだ飛んでいない。それに、霊夢の弾にはいくつか追尾してくるものが混じっている。

「勝率三十パーセントの戦い。少しは粘らせて貰おうか」

取り出したのはスペルカード。エグさは上から七つ程。

「道化『奇術・ペテンバインド』!」

お馴染みの鎖状の弾幕。

それが霊夢の放った弾を打ち消しながら空へと伸びる。

幾つかは霊夢を狙って行くが、簡単に避けられている。

「勇輝さん……もしかして、物凄く弱い?」

「いやいや、まだここからがメインだつて」

ここで、勇輝の弾幕のちょっとした欠点を話しておく。

勇輝は魔法陣の類いを使えない。つまり、弾を放つ起点は勇輝自信

だけだ。

だから、相手は勇輝だけに集中すればいい。

だから、危機察知能力が余程高くない限りこのスペルカードの真意には気づけない。

「ちょっとした挨拶だ。怪我をしたら診療所に、ってな」

其の肆拾（後書き）

どうしてこうなった……。

レティは出番無し。すみません。

其の肆拾巻（前書き）

むう
∴ PCで書かないと遅くなりますね。

其の肆拾巻

鎖状の弾幕は空中をウネリ、霊夢を襲う。

更に勇輝が球体の弾幕をいくつも放っているので鬱陶しい。

だが、避けられない程ではない。

故に霊夢はスペルカードで応戦せず、通常弾を放ちながら勇輝の弾幕を掻い潜る。

勇輝も弾幕に集中しながらも、霊夢の放った弾を自分の弾幕で潰していく。

「すごい……」

その声を漏らしたのは橙。彼女の主人達も規格外の強さではあるが、目の前の二人はそれに匹敵する。

ましてや、二人は人間だ。どちらも普通とは言えないが。

だけど、霊夢には余裕があるように見える。

才能も、経験も、力も。勇輝は霊夢に劣っている。それを能力で補っても霊夢に全力を出させる事すら出来ない。

「……そろそろ、か」

張っていた罾が霊夢を陥れるまであと数秒、それまでスペルカードを使わせてはいけない。

霊夢がスペルカードを使えばこの弾幕は意味を成さなくなってしまう。

「鬱陶しくなってきたわね……」

霊夢も弾か鎖という事で、動きが次第に制限されている事に苛立ってきていた。

スペルカードを温存すれば、後々有利になる。

普通なら相手の体力が減るまで出来る限り攻撃を緩めず、疲れさせた所でスペルカードによる攻撃を放つ。

それが、最も効率的な戦い方だというのが一般論。

だが、相手のスペルカードに自分の強力なスペルカードをぶつけ、戦意を削ぐという戦法もある。

早い段階でスペルカードを無効化すれば、プレッシャーをかける事が出来る。だが、時間が経てば経つほど苦し紛れの一手という印象が生まれてしまう。

だから霊夢が勝負を有利に進めるためにはこのスペルを逃げ切らなければならぬ。

見た目そこまで危険なスペルカードではないが、弾か留まるという

のはやはり鬱陶しい。

「……仕方ないわね」

霊夢が一枚のスペルカードを取り出した。

勇輝もそれを確認する。

「チツ、まだ早いがやるしかないか」

勇輝が霊力の鎖に、上乘せして更に多くの霊力を込めた。

「へっ!？」

声を上げたのら霊夢。

それも当然だ、自分の身体が拘束されているのだから。

「そいつは鎖と一緒にばら蒔いてた霊力の糸だ。アリスが人形を操るモノと同じ様な糸だけど、鎖に絡み付けて霊力を上乗せした。見えなかったのは太さが黙視出来ない程だったから、な」

説明をしながらも次の手順に移る。

霊夢の周囲に弾幕を張り巡らせ、それを全て霊夢の方向へ放つ。

……のが目的だったのだが。

「夢境『二重大結界』!」

霊夢を中心とした結界に全て掻き消された。

だが、それだけでは終わらない。結界の中から霊夢は次々に弾幕を放つ。

「人が通れるスキマが……」

無い。無理、避けられない。

勇輝も負けじともう一枚のスペルカードを取り出す。

「焉戯『デッド・イレギュラー』!」

霊力で生み出すのは刀、剣、槍、鎚、鋸、矢、針、釘、鎌、その他様々な殺傷力を持つ物。

「物騒だけど、仕方ないんだよな……」

無数の武器を浮遊させ、更に霊夢の強力な結界を砕くために巨大な槍を作り出し、構える。

さつき勇輝が使ったスペルカードの意味は表に現れない呪縛。そしてこのスペルカードの意味は、想定外の死。

見た目が派手、ストレス解消用のスペルカードだ。

だが、威力は十分。

誤って殺さないように、霊力を調節する。

霊夢も何かを感じ取ったのか、次のスペルカードを用意した。

作り出した槍は幅一メートル、長さ八メートル。

もう兵器に見えるそれを、霊夢の結界目掛けて投げ飛ばした。

「大結界『博麗弹幕结界』ッ!!」

霊夢がスペルカードを使用する。

先程の結界よりも強力な結界は勇輝の放った槍を弾き、全ての弹幕を無効化した。

だが、護りに徹した結界は弹幕を放つことなく消滅する。

お互いにスペルカード二枚。だが、どちらも被弾はしていない。

「まさか、ちょっと前までともに飛ぶことも出来なかった勇輝さんがここまで出来るなんて思いもなかったわ」

「自分でもビックリしてる。実はスペルカードを一枚使われた時点で負けると思ってたんだよね……」

「じゃあ、一機だけ貰うわ。神霊『夢想封印 瞬』」

霊夢が再びスペルカードを使う。

「ッ!？」

気付いた時にはその場から弾き飛ばされていた。被弾したのだ。

地面を転がるが、上がった身体能力で直ぐに体制を整える。

「速い……見えもしねえよ」

背中に痛みを感じる、動きに影響は出ないがそれでも先手を取られた事によって焦りが生まれてしまう。

「後ろよ」

背後からした声に、霊力の翼を作り出しその場から逃げる。

見えたのは砕け、砂煙を上げるさっきまで自分の立っていた地面と
霊夢の姿。

しかし、直ぐに霊夢の姿は消える。

どうしたらいい？

何をしたら勝てる？

アレを使えば……いや、アレは今使すべきではない。

能力を使うか？ 何を修正しろと言っのだろう。

考えろ、冷静に。把握しろ、現状を。見出だせ、活路を。

「……さて、勝ちに行くか」

勇輝は、次のスペルカードを手にした。

その口につつすらと笑みを浮かべ、背後に回り込んでいた霊夢に視線を移し、その符の名を読み上げる。

「医術『引導渡し 魔薬の投与』」

其の肆拾貳

そのスペルカードは、今までのどの弾幕よりも異質だった。

霊夢も動きを止める。

確かに、勇輝は符の名を宣言した。しかし、弾幕どころか弾の一つ見当たらない。

不発？ それとも未完成だった？

違う。この弾幕は発動し、正常に霊夢を追い詰めている。

「また見えない弾幕？」

「当たり前だ。さっきとは全く違うけどな」

霊力の翼を炎のように揺らめかし、空中で留まる勇輝。

霊夢は十メートルほど離れた場所で浮いている。

前後左右上下、どこにも勇輝の弾幕があるようには見えず、勇輝もただ滞空しているだけ。

「なら、対処法はこうね」

霊夢が弾を無造作に撒き散らす。

何に当たる訳でもなく、霊夢の弾幕は上空へ、遠く離れた山へ、マ

ヨヒガへと飛んでいく。

勇輝にも放たれたが、それは勇輝自身にかき消された。

「どうした？ 何も変わってないぞ」

「……そういうつもりなのね。いいわ、こっちから攻めてあげる」

霊夢はこのスペルを捨て弾だと考え、自分が攻めるために弾幕を放つ事にした。

先程見せられた見えない霊力の糸。あれで疑心暗鬼を誘い、精神と体力を削り取るスペルカード。

頭のいい勇輝の事だ、そういった規格外の行動もとって見せるだろう。

「良いのか？ もしかしたら危険な賭けになるかもよ？」

「それでも何もしないよりはマシよ！ この異変、今すぐ解決させてもらうわ！」

……そういえば犯人扱いをされていた。なら、ちょっと揺さぶりを掛けてみよう。

「本当に解決できるのか？」

「……どういう事よ」

「いや、俺を倒したからってこの異変が収まるとは限らないし。そ

れに、俺が死んだらずっとこのままかもよ？」

黒幕ではないから倒されても異変は収まらないし、この“異変という欠陥”は能力で解決できるものかもしれない。そして、犯人に検討がつかなかった場合はずっとこのままかもしれない。

嘘はついてないし、包み隠さず真実を話してもいい。

「脅迫のつもり？ 別に殺さない程度に痛めつけられて拷問されてもこのままにしておくって事ならそうなるかもしれないけど」

「拷問で……」

「あ、でも医者なら痛覚とか麻痺させられそうね……。社会的に抹殺？」

「自分の感覚を麻痺させる医者なんて……いそうで怖いな。けど、俺にはそんな技術も薬もないから無理だ。社会的抹殺は断固拒否する」

ただでさえ小さな里で変な噂が広まったりしたら……死ねる。

「だったら早く異変を……あれっ？」

霊夢の体がガクツと揺れた。

「やっと効いてきたか。そこら辺の妖怪なら一瞬で昏倒するかもしれない量だったのにな」

「何を、したの……？」

霊夢が辛そうに額を押さえる。

「簡単だ、このスペルカードは毒を撒くように俺の霊力を気化させ、相手に吸収させる。許容量を大きく超えたら……まあ、そんな症状になるんだろうな」

「そんな……、私が今の戦いで使った霊力は勇輝さんの霊力の合計よりも遥かに多かった筈よ。それに、勇輝さん自身も強力なスペルカードを何枚か使っている。それに、その羽だって相当の霊力を……」

「そんな欠陥。とつくに修正してあるよ」

「そう。能力で……」

だが、これで負けるような霊夢ではない。

霊夢は四枚目のスペルカードを取り出した。

「霊符『夢想封印 集』！」

放たれたのは七つの巨大な弾。これは一度、見た事がある。

そして、これが避けられるようなモノでは無い事も、知っている。

「銃符『ロシアンルーレット』！」

勇輝が放ったのはレーザー状の弾幕。

放つ方向、威力、本数は撃つてみないと分からない。だが、霊夢の弾幕を消せる威力の攻撃を瞬時に撃てるスペルカードはこれしか持ち合わせていなかった。

本数は大当たり、二十。

威力はそこそこ、魔理沙の魔砲の五分の一程度のモノが何本がある。

方向は……ゴミだ、霊夢のいる方向とは逆。つまり真後ろに十。

しかし、その内の一本が霊夢に当たる。威力は相当低かったが。

霊夢が被弾した事によって、悪夢の様に追いかけてくるデカイ弾幕は消える。

これで、お互いに残り一枚。

次が最後の攻防になるだろう。

霊夢はスペルカードで霊力を消費し全快状態に近い霊力。そして、勇輝は体力も霊力も減っていない。

お互い、二機と一枚。どちらか被弾した方の負けとなる。

二人は最後のスペルカードの名を口にする。

霊夢は空を埋め尽くすような無数の弾幕を、勇輝は相手の虚を突くようなトリッキーな弾幕を。

霊力の弾が交差し、弾け、相手を打ち落とそうと襲いかかる。

霊夢は少しぎこちないが、確実に勇輝の弾幕を避け。

勇輝は危なげながらも、器用に翼を縮小、拡大とさまざまに操作し避けていく。

時間にして数分。だが何時間にも感じる攻防の中。

同時に、同じ個所に、同じような形状の弾幕が被弾した。

「引き分けです」

橙が降りて来た二人に向かってそう宣言する。

「引き分けって……そうならないようにアンタがいるんでしょ」

「でも引き分けです！」

橙の内心では、引き分けでないと自身の危険が迫っていることに恐怖し、引き分けで勝負が終わったことに安心していた。

霊夢が勝てば霊夢に何をされるか分からないし、勇輝が勝てば勇輝に何をされるか分からない。

「で、俺が異変の犯人として扱われていた理由は？」

「コイツがそう言った」

「……私、猫の妖怪なので勘違いを起こす事が」

「殴るよ?」

「すみません。集めてた春を渡すので勘弁して下さい」

そう言うと、空中で舞う桜の花弁を渡される。……ああ、どういう原理で浮いているのだとか、何故こういう形で春が……認めよう。これが幻想郷の春だ。

「え、勇輝さん犯人じゃないの?」

お気楽な巫女は今更知ったらしい。

其の肆拾参

「成る程ね。悪いのはこの猫、勇輝さんは無関係……何で言わなかったのよ」

「暇さえ潰れるなら誰が相手でも良かったんだよ。一番ハードな奴に当たったけどな」

霊夢に状況を説明しながら少し休憩をとっていた。橙は霊夢によって気絶させられている。

「でも、勇輝さんがあんなに強いなんて思ってたわ」

「……良く言うよ。本気なんか出してなかった奴が」

霊夢は本気を出していない。出しているなら勇輝が五体満足でいられる筈がない。

スペルカードルールは人間と妖怪が対等に戦うための物だが、やはり死の危険はあるのだ。

「私だつて知り合いを本気で殺しに行くような真似はしたくないもの。それがお賽銭を入れてくれた人なら尚更よ」

「……どこまで賽銭にこだわっているのだろうか。」

「はあ……じゃあ、俺は異変解決からはリタイアかねえ。精神的に疲労したし」

「何言ってるの？ 私の春も預けるから異変の解決、お願いね」

「はい？」

「だって、暇なんでしょ？ 私は神社の雪掻きもやらないといけないし、巫女なのに神社を空けるのは何だか申し訳ないし、疲れたから」

「異変解決も仕事だろーがよ……」

「魔理沙だってそろそろ気づいてる頃だし、私の分は勇輝さんがやってくれるんでしょ？」

そういえば咲夜も異変を解決するために紅魔館を留守にしていた。

だったら二人ぐらい抜けても問題無いのでは？

「それと、私の感だけど犯人は妖怪じゃないと思うのよね。そつれつぱい奴を打ち殺したけど何の関係もなかったから。あと、空の上の方が暖かった気がするわ」

「そんな事言われたらサボれなくなるだろ……まったく面倒な」

春を持っていて、異変解決のプロからの有益な助言。

他二人が感づいていなかったら幻想郷は冬のままかもしれない。

「ん？ 外界ってどうなってるんだろ。冬のままなのか？」

「そんな訳ないでしょ、結界で隔離されてるんだから。外からは認

識も干渉もできないわ」

まあ、そうでもなければ此処は見つけられているだろうし、大惨事になっているだろう。

ただでさえ環境問題が話題なのに冬が明けないとなれば……あれ？
特に問題が無い気がする。

「まあ良いや。どうせ診療所に人は来ないし、少しは人間様のお役にたつて診療所の信頼を上げるとしますかねー」

「……随分と投げ遣りだけど、何かあったの？」

「ん？ ああ、古臭い場所に住んでる奴等はやっぱり頭も固いのかなーと再認識したんだ」

「答えになってないわよ……」

「いやあ、咲夜を治した時にさ、やっぱりアイツは怪しいだの、紅魔館に血を売ってるだの、本当は毒薬しか扱わないだの変な噂が流れたんだ。で、人が来ない所か寄り付かなくなつた訳」

「……まあ、里の人たちは臆病だから。幻想郷では人より妖怪や神、妖精の方が多いし」

「それでも来る奴は来るんだけどなー、少ないからさ。収入は安定してないから食事も儘成らないし、薬は無駄になるし、暇だし」

「じゃあ、尚更異変を解決した方が良いんじゃないの？」

「……妖怪専門の医者ってどうなんだろ」

吸血鬼って病に罹るのだろうか？ あと、人型でないものは勘弁だ。

「あ、そうそう。異変を解決するとお金も入るから」

「なっ………本当か!？」

「魔理沙は家出してるから貰った事は無いけれど、私は何度も貰ってるわ。じゃなきゃ生活できないし」

確かに賽銭無し、参拝客皆無の神社では収入は得られないだろう。

「仕方ない、金のためってなると人聞きが悪いがやるか」

「思いつきりお金のためよね。目がそう言ってるわ」

「失敬な、半分は里のためだ」

「………半分は認めるのね」

「せめて、もう少しでいいから人間と妖怪の仲を良好にできたら一番楽なんだけどな」

「別に、妖怪でも友好的に接している種はいるわよ？ 天狗や河童が代表的な例ね」

「成る程、吸血鬼だからか」

なら、レミリアにも何かしてもらっしか無いのだろうか。………外に

出てくれるのが心配だ。

「んじゃ、異変を解決するとしますか。空でいいんだよね？」

「感だけどね」

「……やっぱ、もう少し地上で探索してみるわ」

そこまで感だ、なんて言われたら信憑性が薄くなる。もう少し論理的な根拠が欲しかった。

幻想郷の魔法の森。そこでは二人の魔法使いが何かを相談していた。

「つまり、この花びらを集めれば暖かくなるんだな？」

「ええ、大量に撒けば春になるでしょうし、纏っていれば自分の周りだけ暖かくなる。春度とでも言っておきましょうか」

「ふーん。どうでも良いけど、寒くなくなるなら何でもいいぜ。花見もやりたいし」

「これを、どこかの誰かが纏めて盗んで行ったんでしょよね……じやなきや、この時期に雪はおかしいし……」

「やっぱり異変か……よし、行くぜアリス」

「何処に？」

「そうだな……私としては春を持つてゐる奴を片っ端から潰して行けば良いと思う」

「……まあ、宛も無いしね」

二人の魔法使いも、異変を解決するために動き出した。

異変解決にここまでの人数が関わる事が吉と出るか、凶と出るのか。

それはまだ、誰にも分からないし、誰も考えていなかった。

其の肆拾肆

「ヤバいな、暗くなって来やがった……」

幻想郷を飛び回り、春を盗んだ犯人を探していたが、日は沈み始め、雪原は緋色に輝いている。

雲の隙間が多くなり、夕陽が射し込むその景色は神秘的だが、どうじに勇輝を不安にさせる。

晴れてきたが、それでも雲は多い。夜目が聞かないのでは探しようが無いのだ。

「急がないとな……」

勇輝は霊力の翼を更に力強く動かし、速度を上げる。

空には冬なのに、桜の花びらが一枚だけ舞っていた。

「……お前、その春をどうするつもりだ？」

魔理沙は目の前の人物を睨みつける。

「どうするって……集めただけよ？ 妖精を蹴散らしたり、妖怪を蹴散らしたりして」

睨まれた咲夜は動じる事無く、淡々と答える。

彼女からしたら、魔理沙とアリスは異変を解決しようと動いている時に、関係ないと言えない程の量の春を集めている邪魔者。

咲夜の目的は、紅魔館周辺を春にする事。幻想郷全体は二の次だ。

つまり、一定量の春が得られるのなら誰から奪っても良いし、他の場所が冬のままだろうと良いのだ。

そして、魔理沙からすれば咲夜は前回の異変の犯人の一人であり、多くの春を集めている怪しい人物。

前科がある分、疑いやすいのもあるだろう。

アリスは宴会の時に会っただけなのだが、それでも咲夜が集めた春は犯人と疑える程に多い。

「魔理沙、私がやるから下がっていて。知り合いならスペルカードも知られているでしょう?」

アリスが魔理沙の前に出る。

「おう、頼んだぜアリス。アイツは時間を操る能力とナイフを使ってくる」

「そう……なら、八割程度で足りるかしら?」

八割……つまり、全力は出さない。

その挑発とも言える言葉に、咲夜は眉をしかめる。

「随分自身があるようね」

「メイドに負ける程弱いつもりは無いもの」

「ただのメイドじゃ無いわよ？」

「じゃあ、どんなメイド？」

咲夜はナイフを両手の指の間に挟み、構える。

「貴方を一瞬で亡骸に変えるメイド」

咲夜がナイフを投擲する。

真っ直ぐにアリスに向かって行くが、アリスはそれを簡単に避ける。

「じゃあ、私からも攻撃しようかしら」

アリスは何処からか人形を取り出し、それを操る。

二体は剣を持ち、四体は魔力の弾を撃ち出す。計六体の人形。

咲夜は剣を持った人形二体をナイフで貫き、残り四体が放つ弾を時間を操る訳でもなく避けていく。

しかし、そう簡単に事が運ぶという事は無い。

ナイフが突き刺さっている剣を持った人形が咲夜に向かって飛んでいく。

「成程、バラバラにでもない限り動かせるのね」

再び、咲夜は剣を持った人形にナイフを投擲する。今度はバラバラに砕け散るように。

「……何処にナイフを隠し持ってるのかしら」

アリスが若干不満そうな声で呟く。

咲夜が使うナイフは霊力の物と金属の物の二種類。今使っているのは金属のナイフだ。

だが、本数が有り得ない。絶対に。

アリスは壊れた人形の糸を切り、次の人形を取り出す。

「早く終わらせないと、お嬢様に叱られるから……悪く思わない事ね」

咲夜がスペルカードを取り出す。

「幻世『ザ・ワールド』」

次の瞬間、アリスを囲むように無数のナイフと弾幕が現れる。

「っ!？」

アリスは人形を盾にし、辛うじて避けるが第二派といった感じに再び弾幕は現れる。

時間を操ると魔理沙から聞いていたが、これは酷い。

もし、咲夜がどこかの医者のように魅せる事を考えずにスペルカードを作っていたら既にアリスは負けている。

何とか避けていくが、やはり危ない気だ。

今にも当たってしまいそうだが、アリスは何とか避けていく。

「仕方ないわね……。操符『乙女文楽』」

アリスもスペルカードを発動させる。

人形からレーザーや弾幕が放たれるが、咲夜には当たらない。

「弱いわね。あの巫女よりも、家のお嬢様よりも。そして、私よりも……」

咲夜は余裕を持った声でアリスを挑発する。

前回の紅霧異変で、霊夢にこそ敗北したが咲夜は魔理沙に勝るとも劣らない実力を持っている。

時間を操る程度の能力。

時の流れを早く、遅く。そして停止させる。単純だが恐ろしいほどに強力な能力。

倒せるとしたら、避けようがない程に圧倒的な弾幕を使つか、カウ

ンターを狙うか、不意を衝くしか無いだろう。

「メイド秘技『殺人ドール』」

咲夜が次のスペルカードに切り替える。

余談だが、決闘前にスペルカードの枚数や機数を指定しなかった場合、機数は一、枚数は無制限での勝負が暗黙のルールとなっている。
無数のナイフがアリスに迫る。

「そんな直線的な攻撃……っ!？」

真っ直ぐ迫っていたナイフに対して、横に逸れる様に移動したがナイフの軌道が曲がった。

「単純にナイフを投げる訳無いじゃない。そんな事も分からなかった?」

「くっ、呪詛『首吊り蓬莱人形』!」

再びアリスはいくつもの人形を取り出し、咲夜の飛ばしたナイフを打ち落としていく。

時には人形の腕が落ち、頭が飛び、胴体が碎け散るがナイフがアリスに当たる事は無い。

だが、アリスは既に負けを確信していた。

「降参して春を渡してもらえるかしら」

背後から聞こえる声と、首筋に当たる金属の冷たい感触。

「……負けたわ」

アリスは思う。ああ、本気でやっておけば良かったかもしれない。
と。

其の肆拾肆（後書き）

弾幕勝負で咲夜的能力は狡いと思う。

それをボコボコにする霊夢は人間では無いと思ッ……………。

其の肆拾伍

アリスを下した咲夜は、観戦していた魔理沙に向き直る。

「貴女も私の邪魔をするのかしら？」

「当然だ、アリスが戦ったのに私が逃げたら立つ瀬が無いんだぜ」

咲夜だって消耗している筈だ。というのが魔理沙の考え。

それは正しいのだが、今考えるべきなのはそこではない。

「じゃあ、さつさと始めましょうか。お嬢様の世話もしなきゃいけないし」

日は沈み、僅な月明かりが二人を照らした。

「暗い……寒い……」

幻想郷を飛び回って数時間。

襲ってくる妖精を倒しながら犯人の手懸かりを探していたが、一向に何も見つからない。

霊夢は空が怪しいと言っていたが、考えて見ると空に城が浮いている訳でもないし、四六時中留まる厚い雲がある訳でも無い。

……帰って寝てしまおうか。

「最後に雲の上だけ見ておくか……」

翼を軽く振るって上昇。一気に雲の上まで飛び上がる。

黒い雪雲の上には都会では見られない輝きを放つ満月。心なしか近い気もする。

辺りを見渡して……。

「人、だよな……アレ」

空を飛んでいる三つの人影。怪しい。

夜だし、冬だし、何より今は異変の真っ最中。

決めた。尾行しよう。

「……ふう」

霊夢は机に布団をかけ板を乗せただけのコタツに湯飲みを乗せ一息吐く。

まだ外は冬、異変は解決されていない。

「遅いわね……」

一日。霊夢が異変を解決するために動き、解決にまでかかった最長時間だ。

紅霧異変の際は一夜にして解決している。

霊夢は湯飲みが空になっている事を確認すると、コタツから足を出して立ち上がる。

そのまま神社の物置小屋へと向かい、陰陽玉を持ち出した。

異変の際に弾幕勝負で負けた者は解決まで手を引くのが筋だが、生憎霊夢は引き分けただけ。

霊夢は境内から空を見上げる。

黒い雪雲の、その向こうを。

「恋符『マスタースパーク』!!」

夜の幻想郷の空に七色の魔砲が放たれる。

魔理沙と咲夜、知り合って数ヶ月になるが、まともに戦うのはこれが初めてだった。

そして、咲夜は焦りを表情に出しながら戦っていた。

魔理沙のスペルカードは恐ろしく強力な物が多い。

何より、レーザーを主体にしているのが咲夜にとっての誤算だった。通常の弾幕と違い、レーザーは速く、しかも軌道が分からないのだ。アリスの場合は人形の位置を確認し、そこから自分に向かって直線的に放たれるだけだった。

しかし、魔理沙は咲夜の動きに合わせてられる。

更に、そのレーザーが広範囲に及ぶ巨大な物となれば状況は悪くなる。

アリスの時のように後ろをとつても、魔法陣からレーザーが飛んでくるかもしれない。

時間を止め、移動した先はレーザーが放たれる軌道の上かもしれない。

そんな思いが、咲夜を攻めに回らせなかった。

「メイド秘技『操りドール』！」

「恋心『ダブルスパーク』！！」

そしてコレだ。

放ったスペルカードが全て魔砲に掻き消される。

ナイフも消耗品であるが故にやる気を削がれる。

咲夜は時間を止め、ナイフを回収していたのだがそのナイフが破壊されてはどうしようもない。

勝てない。そんな言葉を思い浮かべてしまう。

実力的には魔理沙に勝っている。だが、相性が悪かった。

そもそも、魔理沙ほど鬼畜な戦法を取る人物がこの幻想郷にいらるだろうか？

嫌になる程に魔砲を乱射され、自分のスペルカードが掻き消される。

嫌になる。何を使えば勝てるのか分からない。

だが、それも永遠ではない。

「ハアっ、ハアっ……くっ……」

魔理沙にも、限界はある。

魔理沙が霊夢に敵わないのもコレが大きく関係していた。

魔理沙のスペルカードは霊夢のスペルカードさえ掻き消す事ができる。だが、魔理沙が霊夢に弾幕を当てる前に魔理沙の魔力は底を尽いてしまうのだ。

咲夜のナイフが尽きるのが先か、魔理沙の魔力が尽きるのが先か。

「いい加減、降参したらどうだ……？ 吸血鬼のお嬢様が待ってるだろ？」

息も絶え絶えになっているが、魔理沙は挑発に出る。

ここまでに使ったスペルカードは十を越している。疲れて当然だ。

「そうしたいけど……貴女は春を譲ってくれないんでしょう？」

「当然だ。私がこの異変を解決するんだからな」

「だったら私に構ってないで犯人捜しでもしたらどうかしら？」

「お前が犯人かもしれないだろ」

「私は犯人じゃないわ」

「犯人はいつもやってないって嘘を吐くぜ」

「……疑われた人間は全員そう答えると思うけれど」

「なら交渉決裂だな」

「交渉なんてしていたかしら？」

「今自白するか、倒されてから自白するか」

「……それは交渉じゃなくて脅迫よ」

溜息を吐きながら咲夜はナイフを取り出す。

魔理沙は魔法陣を展開し、咲夜の攻撃に備えた。

「さて……」

尾行を開始して早数十分。

分かったのは三人が女の子で、楽器を持っている事。

……自分は何をしているんだろう。

こんなストーカー紛いの事をして、相手に関係ありませんでした、では立場が無い。

いや、こんな時間にこんな高度の場所にいる人物が普通である筈がないのだが……遣る瀬無い。

しかし、無関係という事は無かったようだ。

三人が向かった先に有ったのは巨大な門。

何故浮いていられるのか、飛行機に当たったりしないのか。そんな事は幻想郷だからと結論付ける。

霊夢の感は当たっていたようだ。あの門には強力な結界が張っている。

三人は門の前まで飛んで行くと、各々の楽器を……演奏し始めた。

「……………帰っていいか、コレ」

其の肆拾陸

「いい加減、当たれよっ！」

「嫌よ、死ぬじゃない」

未だ戦い続ける咲夜と魔理沙。しかし、魔理沙の体力は限界に近かった。

魔砲も威力が落ちて来ている。それは、この場にいる全員が分かっていた。

咲夜も攻めに回る回数が増えてきている。このままでは魔理沙の敗北は確定だ。

「くっ……何で当たらないんだ」

魔理沙は自分の弾幕に少なからず自身がある。

勿論、それは咲夜も認めているし、勇輝も敗北したのだ。

では、何故こうも当たらないのか。答えは簡単だ。

魔理沙のスペルカードの一枚、魔砲『ファイナルスパーク』。相当な威力を持ち、それはレミリアやフランの妖力に劣らない霊力を手にしていた紅霧異変時の勇輝に全力の防御をさせ、尚且つそれを破壊するまでの攻撃力を持っていた。

だが、あの時勇輝が魔砲を受け止めず、避けていたらどうなってい

ただろうか？

勇輝は立場上、紅魔館を破壊されるのを防がなければならなかった。だから、あの時回避ではなく防御を選んだ。

もし避ける事が許されていたのなら、勇輝は上昇した身体能力で簡単に避けていただろう。そして、魔力の尽きた魔理沙を簡単に倒していた筈だ。

つまり、魔理沙のスペルカードは相手が避けれない時、または戦場が極端に狭い時に全力を出す事ができる。しかし、四方八方全てが逃げ場となる空ではその威力も宝の持ち腐れでしかない。

だが、仮に数で勝負するスペルカードを使っていたなら咲夜は既に魔理沙を倒していただろう。

勿論、魔理沙にそこまでの考えがあった訳では無い。

いくら攻撃が速くても、直線的にしか進まないレーザーなら注意していれば避けられる。

拳銃と同じだ、銃口さえ見ていれば弾の飛ぶ方向が分かってしまう。

「そろそろ先に進みたいんだけど……。今ならまだ見逃してあげるわよ？」

咲夜も、結構な量の霊力とナイフを消費してしまった。

本来なら異変解決のために協力するべきであるのに、お互いの足を引っ張り合い、果てには戦線から外してしまおうとしている。

「誰が逃げるかよ。私はお前から春を奪って、その後に犯人を見つ
けるんだ」

そもそも、春を何故奪うのか。犯人が奪っているから、盗られない
ように？

違う。寒いから、自分の周りだけ春になればいいから。そんな私欲
で奪い合っているに過ぎないのだ。

「じゃあ……」

魔理沙の視界から咲夜が消える。反射的に魔理沙は上に逃げると、
さっきまでいた空中を何本ものナイフが通過する。

まだだ、魔理沙は素早く移動を続ける。

まるで魔理沙を追うようにナイフが一瞬前まで魔理沙のいた空間を
貫く。

魔理沙は全力で箒を走らせながらスペルカードを取り出す。

「光撃『シュート・ザ・ムーン』……」

いくつもの魔法陣。その中心からレーザーが放たれ網の様に交差し
ていった。

「っ！」

咲夜がレーザーに動きを制限され、その動きを停止させた。そして

咲夜の姿が魔理沙の目に入る。

「貰った！ 魔砲『ファイナルスパーク』！！」

魔理沙の魔砲が咲夜を飲み込んだ。

かの、ように見えた。

「時符『プライベートスクウェア』」

咲夜は無事だった。魔砲による傷は一つも無い。

咲夜を囲う様に存在していた透明の立方体が砕け散る。

「何だよ……それ……」

魔理沙は驚愕し、目を丸くした。

勇輝の防御さえ押し潰した魔砲が完全に防がれたのだから。

「時間を操って生み出した結界……みたいなものかしら？ 勿論、
時を超えられるほど強力な攻撃だったのなら私は負けていた所かこ
の世から居なくなっていたでしょうけど、そこまでではなかったよ
うね」

咲夜の手には再びナイフが握られる。

「どうする？ 刺されて死ぬか、降参するか」

魔理沙は……。

「どうなってんだろな……アレ」

門の前で演奏を始めた三人を遠目に見ながら勇輝は溜息を吐く。

人の敷地前で大合奏……迷惑にも程がある。

問答無用で攻撃を放つても良い気がするが、ここは堪えて措こう。

果たしてあの三人は異変の関係者なのか、それともただの迷惑な奴等なのか。

とりあえず話をしよう。

「なあ、お前等……」

「？ 珍しい、生きてる人間がこんな所にいるなんて」

答えたのはバイオリンを持った金髪の少女。

「単刀直入に聞くけどさ、此処で何してんの？」

「リハーサルだよ、宴会での演奏の」

宴会……。いや、その前にリハーサルは野外でやらないのでは？

「じゃあ、この門が何か分かるか？」

「冥界への扉だよ、開いた所は見ただ事がないけれど」

……コイツ、テンションがやたらと低い。

「なら、この中に入る方法とか分かるか？」

「上を飛び越える」

「……随分と簡単な侵入方法だな」

まあ、入り方も分かった事だし、この冥界とやらの犯人がいるだろうからと三人に背を向け……。

肩を掴まれた。

「まあ、何かの縁だと思って演奏を聞いて逝きなよ」

「そうそう、私たちの演奏を聞いていられる人間なんて滅多にないんだから」

「聞いてけ〜」

何か、寒気がする。というか、聞いていられる人間がいらないとはどういう事だろう。

「あー、お断りす……」

顔の真横を弾幕が通過する。

「ゆっくりしてってね」

其の肆拾漆（前書き）

今回、読んでいて非常にイライラする場面があります。お気をつけ下さい。

……リア充、ぶっ潰す。

其の肆拾漆

冗談じゃない。

演奏を聞かなかったら弾幕勝負、そんな無駄な事をしている場合ではないのだ。

よって……。

演奏を聞いていた。

とりあえず適当に理由をつけ、門から離れた場所に移動して貰ったのだが少し困った事がある。

能力の効果があと数十分で切れるのだ。

それに、何だかやる気が無くなったり無駄な高揚感が込み上げてきたりと調子がおかしい。

が、そこは医者の方端くれ。呼吸法やらちょっとした思い込みで感情の操作など軽いものだ。

それよりも、問題は霊力だ。切れたら絶対に落ちる。間違い無く落ちる。

浮くことは普段の霊力で可能だ。しかし、時計の無いこの場では秒単位で自分の霊力量に変化が訪れる事が分からない。よって急には対応出来ない。

そして、やっと一曲の演奏が終わる。

「あれ、この人まだ大丈夫そうだよ？」

おいキーボード、どういう意味だ。

「本当、自殺まではいかなくても鬱病ぐらいはかかると思ってたのに」

バイオリンの人、それはどういう意味ですか？

「ハイになってるようにも見えない……」

トランペット、だからどういう意味だ。

だが、今はそれどころではない。

真剣な顔で、真剣な声色で、三人に告げる。

「演奏を聞かせて貰った身で申し訳無いけど、三人に頼みがある。俺を、側で支えて欲しい」

落ちないように。

「えっ……」

最初に反応したのはバイオリンの人、何故か顔が赤い。アレか、男性恐怖症みたいな感じの。

「三人でだなんて……」

次に反応したのはトランペットの人。いや、女の子が男支えるのに一人二人じゃ無理だろ。そして何故か顔が赤い。照れる要素が見当たらない。

「……？」

キーボードの子は他二人を見てきよんとしていた。まあ、普通の反応だと思う。

「ええつと、本気なの……？」

「他に考えられないからな」

「じゃあ、どうしてそんな考えに？」

上擦った声で照れながら聞かれる。こっちまで恥ずかしくなってくるから止めて欲しい。

「俺には三人が必要だったから」

協力してもらわないと真つ逆さまに落ちるとか、笑えない。

そして、この三人はまだ演奏し続けるだろう。第六感がそう言っている。

よってあの門を数分で突破する事も不可能だが、辿り着く事すら出来ないかもしれないこの状況では目の前の三人に助けを求めるしかない。元凶だとしても。

ここでお前等の所為だけどな、なんて抜かしたら打ち落とされる気がする。

「でも、私達は幽霊だし……」

初耳だ、まあこの際は関係ない。

「触れ合えるんだから関係ない」

そう、落ちないように支えてくれるなら天使でも悪魔でも妖怪でも良い。

「でも……」

「頼む、この通りだ」

頭を下げる。……まあ、死なないんだけどこの高さから落ちたら痛いじゃ済まないから。

三人は目配せをする。

キーボードの子は未だに分かっていない様で、二人に耳元で囁かれてから何故か顔を赤くする。

そして、三人は頷きあった。

「分かったよ、私達はこれから君のすぐ傍で君を支え続ける。でも、その……平等にして欲しい」

体重の掛け方だろうか？

「初めからそのつもりだよ。じゃ、いいか？」

「ええっ！？　ここで！？」

「いや、ここでしないで何処でするんだよ」

「でも、心の準備が……」

「もう、限界なんだ」

「わ、分かった。じゃあ初めは何をしたらいいかな？　こんな事、初めてだから」

「ああ、まずは……」

「ハア……」

咲夜は夜の空を飛びながら溜息を吐く。

結局、魔理沙は一步も退かなかった。だが、限界を迎えた魔理沙では咲夜に勝つ事どころか、スペルカードの使用すら儘ならない。数分の抵抗を示した後に被弾し、敗北した。

咲夜も、あそこまで抵抗するとは思っていなかったし知り合いを殺す程冷徹に物事を運ぶ事は出来ない。

アリスの時以上に疲弊した咲夜が向かうのは、紅魔館。

魔理沙とアリスから奪った春ではまだ足りない。そして、春が無いのは奪った奴らが原因であり、やはり大量の春を持っている。つまり、結局は犯人を懲らしめる事になるのだ。

少し疲れた、それにレミリアの事が気になる。

だが、咲夜は目の前を飛ぶ人影を見て顔をしかめる。

「……うつっ」

「おおっ」

「ん……」

「悪い、でも後少しだから」

結局、勇輝が三人に抱き着く形となった。

説明をすると、話が違つ。という表情をされたがこちらとしては知った事では無いし、承諾もしたのだ。

フツ、と自分の力が抜けるような感覚。時間だ。

腕を解き、三人を解放する。

「悪かったな、もう大丈夫だ」

自分の霊力を再確認し、それを総動員して浮く事に専念する。

「ああ、良いんだ。私達が誤解しただけで……うん。私が悪いんだ……」

なんか、とてもネガティブだった。

他二人も納得がいていないようだった。

「プリズムリバー三姉妹をたぶらかして……抱き着いてその反応……」

トランペットの人、命の危機が迫っているのに欲情するのは頭の中が万年桃色の奴だけだ。

「じゃ、俺はそろそろ……」

「あ、まだまだ演奏は終わってないよ」

キーボード……テメエ。

その後の演奏は何故かトランペットがメインだった。

其の肆拾捌

「そっか、だから勇輝は私達の演奏で変に影響を受けなかったんだね」

「……ああ、次は耐えられないけど、な」

いつの間にか、夜が明けていた。

長時間の霊力のコントロール、感情の抑制、睡眠不足。倒れそう。

能力を使えば良いのだが、感情を抑えるのに精一杯で上手くいきそうになかった。だから終わるまで待っていたのだが……。

「……目眩がする」

もう、限界だった。

「大丈夫？ ごめん、長い間演奏を聞いてくれる人は久しぶりだったから……」

「いや、貴重な体験が出来たから気にしなくて良いよ。演奏も上手かったと思うし」

聞き流していた……というか集中して聞いたら駄目になると思ったので真剣に聞く事はしていなかったが、下手ならここまで人の感情を揺さぶる事は出来ないだろう。

音楽が人に与える影響は思った以上に高い。

ゲームをやっている時も、無音とBGMがかかった状態では緊張感がまるで違うのが簡単な例えだ。

「何も返せないのは悪いんだけどさ、地上の春を取り返しに来たんだ。だからあの門の中に行きたい、お礼はまた今度で良いか？」

「ちょ、ちよつと待って……」

バイオリンの人、もとिल्ナサがトランペットの人、メルランとキーボードの子、リリカに詰め寄って小声で話し始める。

今のうちに能力を使わせて貰おう。

身体能力は吸血鬼並、霊力の量は霊夢並に……。両方を“力”に置き換え一回の能力使用で修正する。

身の回りに基準となる人物が出来た事によって大分この作業が楽になった。普段とはまた違ってくるので百パーセント出し切る事は出来ないのだが。

更に、霊力と体力の減少を修正……。

「……ふう」

集中するために閉じていた眼を開け一息着く。

この能力に必要なのは明確なイメージ。欠陥を見出し、修正後のイメージを固める。

ある程度大まかでも使えるが、やはり明確にした方が後々分かりやすい。

不死を元に戻さないのも、その後どうなるか分からないからだ。

フランとの約束の事もあるが、やはり死ぬかもしれないというのが大きな原因だった。

「決めた。勇輝……」

ルナサが決心したように話しかけてきた。

「私達と、スペルカードルールで勝負して欲しい」

……あれ？

「これは……」

霊夢が見つめる先には巨大な門、それも結界で守られた……。

しかし、霊夢にとってその程度は些細な事でしかない。

「確か……冥界、だったかしら。来た事なんて無かったし、来る必要も無かったから覚えてないのよね……」

普段から異変を警戒している訳では無く、神社の掃除と縁側でお茶を飲むだらけ切った生活を送っている霊夢には博学という言葉はあり得ない程に似合わない。

勘でスペルカードを避けたり、勘で犯人の居場所を突き止めボロボロにする霊夢にとって知識が必要ないのも確かなのだが……。

「門番の一人ぐらい雇えば良かったのに……紅魔館のより真面目な奴を」

霊夢が結界に触れ、目を閉じる。

次の瞬間には、結界はガラスの割れるような音と共にバラバラに碎け散っていた。

「さて、春を奪……取り返しに行こうかしら」

何故言い間違えたのかはこの際置いておき、幻想郷最強の巫女が冥界。白玉楼へと入って行った。

「申し訳ありません。お嬢様……」

ボロボロのメイド服を身に纏った咲夜はレミリアに頭を下げる。

「どうしたのかしら？ 昨日は帰って来ないし、そんなボロボロの姿で……」

「ええ、実は……」

魔理沙を退けた後の事である……。

咲夜は目の前を飛ぶ人物を見て顔を顰めた。

「博麗、霊夢……」

異変解決のために飛んでいるのだろうが、霊夢はこっちに向かって飛んで来ていた。

「アンタ、また異変を起こしたの？」

霊夢が呆れたように咲夜に話しかける。

今の咲夜には疑われても仕方のない程の量の春があり、しかも向かっていたのは紅魔館だ。

「違うわ。私は屋敷の周りだけ春にしたいのよ、だから必要なだけ春を集めていたの」

「あ、そう。なら……」

霊夢はニコリと笑って、その清々しい程の笑顔で。

「私が異変を解決して幻想郷全体を春にするから、その春を渡しなさい」

どこの盗賊だ。

「渡すも何も、犯人から取り返せばいいじゃない」

「だって寒いじゃない。少しは貢献しなさいよ」

横暴にも程がある。

「なら、私も明日犯人を潰しに行く予定だったから貴女は神社でゆっくりしていたら？」

「最初はそのつもりだったんだけどね……勇輝さんに私の春も預けたし」

「なら勇輝に任せるか返して貰えばいいじゃない」

「だって、遅いじゃない。それに勇輝さんって相手が病人とかだったら向こうにつくかもしれないでしょ？」

それは無いと思った咲夜だが、まあ霊夢が聞く筈もない。

「なら、力づくで奪ってみたら？」

そんな事を言ったのが間違いだった。

「それで、負けた上に全て春を没収されたと……」

「はい、申し訳ありません」

「別に良いわよ。島に桜は無いし、花見は神社でやろうと思っていたから」

「そうですか……」

「でも、勇輝が異変解決を、ね……。咲夜、勇輝が失敗した時の準備をしておいて」

「……ああ、了解いたしました」

何を了解したのか、それを勇輝が知る事になるのだろうか。

其の肆拾仇（前書き）

非チートを目指した筈だった。だけど幻想郷がそれを許してくれなかった。

其の肆拾仇

「ルールはお互いに三機、私達は三人で三機ね。枚数は六枚、それで大丈夫かな？」

「いや、こっちは八枚だ。人数の違いは大きいからな」

「あ、そうだね。分かった、それで良いよ……それと、もう一つ」

「何だ？」

「枚数を増やす代わりに、勝った方が、負けた方に一つ命令できる。お互いに納得できる物ならどんな命令でも」

「んー、まあ良いんじゃないの？ 負けるつもりはないし」

この状況で枚数を増やした所で不利なのは変わらない。

だから……。

「最初から本気でやらせて貰う」

霊力の翼を作り出し、スペルカードを取り出す。

「解符『トラップパズル - Lunatic - 』」

レミリアに一撃入れたスペルカードの改良型スペル。より悪質になったそれを三姉妹に向けて放とうとするが……。

「…………あれ？」

ポフツと音を立てるだけに終わってしまう。

ここで勇輝は思い出す。霊力の翼とスペルカードは両立出来ない事を。

霊夢との戦いではどうかしていたのだ、気分がハイになっていたからだろうか？

三姉妹が哀れむような視線を向けてくるが気にしない。

霊力の翼は移動用、なら以前の戦い方に戻すまでだ。

空に、いくつもの霊力の板が現れ、その内の一つに勇輝は足を着ける。

この弱点だらけの足場だが、スペルカードの使用を上空するには仕方がない。

「変わった戦い方だね…………」

「よく言われる」

三姉妹は各々の楽器を媒介に弾幕を放つ。

威力はそれほど高くないが三人が同時に放つ分、量が多い。

宙に浮かぶ足場を移動しながら淡々と避けていく中で感じる。

……あれ？ 余裕で勝てそう。

思えば今まで相手をして来たのは化け物ばかりだった。

魔砲を遠慮なくぶっ放してくる魔法使い。

気の触れやすい、戦闘狂の吸血鬼。

上記の姉の吸血鬼。

時間を止めてくるメイド。

スペルカードルールを忘れて凍らして来そうになる妖精。

実験と称してスペルカードを次々に撃ってくる引きこもり魔法使い。

もう人間では無い強さの巫女。

……初めて、まともなスペルカードルールでの決闘になるのではないだろうか？

ああ、もう自分から当たりに行っても良いと思えるぐらいの弾幕。

もう抱きしめても良い。こんなまともな弾幕が見れる日が来るなんて思ってもみなかった。

だって当たっても痛いので済みそうだ。絶対に命の危険が無い。

音符型という所も、何だか可愛らしく思えてきた。

刺さらないし、骨が折れないし。ああ、なんて素晴らしい弾幕なのだろう。

「……ルナ姉、どうしよう。私、あの人に当てれる気がしない」

「うん。私もこの勝負が無謀だったと思えて来た……」

「ね、姉さん。勇輝がなんか凄い楽しそうに避けてるんだけど」

今までがおかしかった。何が楽しくてあんな命の危機を感じながら弾幕を避けなければならなかったんだろう。

「どうする？ スペルカードでも使うか？」

「言われなくてもっ！」

「じゃー私から。鍵霊『ベーゼンドルフアー神奏』！」

リリカのスペルカードが発動。それは一般人から見たらもう避けるのを諦めたくなる弾幕だったが……。

「えっ？」

これがスペルカードですか？ と言わんばかりに簡単に勇輝は避けていく。

リリカは開いた口が塞がらない。そんなリリカを押しつけてメルランが前に出る。

「リリカなんかじゃ駄目ね、私がお手本を見せてあげる。管霊『ゴ

「ストクリフォード」

このスペルも、常人が見たのなら顔を引きつらせるような弾幕だった。

だが、勇輝はそれを楽しそうに避けていく。

「次は私が……。偽弦『スードストラディヴァリウス』」

ルナサの放ったスペルカードを勇輝は避けようとしなない。

「まあ、これぐらいか」

勇輝を囲う四枚の霊力の壁。それにヒビを入れる事さえ出来ずにルナサの弾幕は消えていく。

「嘘……」

三人は目の前の光景が信じられないようだった。

ここで勇輝が普段使うスペルカードを使えば、鬼畜以外の何者でもないだろう。

だから、作った中でも数少ない魅せるためのスペルカードを勇輝は使う。

手加減をするなど、どれだけ偉くなったつもりなのだろうか。何てレミリア辺りに言われそうだが、あの三人とは敵対した訳では無い。それに、医者がケガ人を出してどうするというのだ。

だけど、負けるつもりは無い。

「弹幕『命知らずの大乱祭』」

三姉妹は顔を引きつらせる。

勇輝が生み出した絶望的な量の弹幕が辺り一帯、前後左右上下を囲い球状に。

「さて、弹幕に色を着けるのって意外と面倒だという事を知ったこのスペルカードだけど……最後まで立っていられる自身はあるか？」

色取り取りの無数の弹幕。それが渦を巻くように中心、ルナサ、メルラン、リリカ、勇輝の四人に迫ってくる。

祭りでスーパーボールすくいというのを見た事があるだろうか？
あんな感じた。

「でも、これじゃ勇輝も……」

「祭りを楽しむなら全員でつてな。この弹幕の動きはランダムだし……俺も避けるしかないんだ」

「ルナ姉、これ拙くない？」

「私、降参してもいいかなーって……」

冷や汗をかくメルランに、諦め気味のリリカ。

数十秒後、三人は被弾し勇輝の勝利で決闘は終了した。

其の伍拾

「負けたよ。強いんだね、勇輝は……」

「周りが化け物しかないからな」

今更だが、自分が十分戦えるだけの力を持っている事を認識できたのは良い経験になっただろう。

かと言ってこれから戦う事になるであろう異変の犯人がレミリアより弱いとも言えない。

もしかしたら霊夢と同等の実力を有しているかもしれないのだ。

「じゃあ、その……命令を決めて貰えないかな？」

「ああ、そんな約束してたな」

しかし、実質勇輝が使用したスペルカードは二枚だし、勝利したのも勇輝だ。

何かルールに不備がありますか、と聞かれても機数も枚数も変わらない訳で、勝った方が命令、と言われても頼もうと思っ事は何も無い。

「じゃあ、俺の命令を聞くな。つてのは？」

「それじゃあ私達が納得出来ない。勝者なんだから貞操を奪うくらの事を言ってくれないと……」

「いや、何処の外道だよ」

自分がどんなイメージを持たれているのか非常に問いただしたい。

「じゃあ……。演奏だ、俺が聞きたいなーって思った時にまた演奏して欲しい。これなら良いか？」

「……まあ、それなら」

どうして消極的な物になるにつれて不満そうな顔をされなければならぬのだろうか。普通は逆だと思う。

「私達は霧の湖の近くの廃墟に住んでるから、聞きたくなったら何時でも来て」

「ああ、そうさせて貰う」

妹二人がルナサを呼ぶ。

三人が地上に降りていくのを見てから、勇輝は空中に浮かぶ巨大な門の方へと飛んだ。しかし……。

「……どんな化け物を通ったらこうなるんだよ」

結界は消え、門が破壊されていたのだ。

中に入ってみると、終わりが見えない程続いている階段となっていた。

「ここを上るのか…… ストレスの溜まりそんな道だな」

紅魔館もそうだが、同じ風景が延々と続くと精神的に効いてくるので少しは変化をつけて欲しい。

侵入者はいいが、自分たちまでおかしくなっては元も子もないというのに。

「歩くのは…… 無謀だから飛んで行くしかないな」

こうして、勇輝も冥界へと足を踏み入れた。

「貴女、人間ね？」

「そう言うアンタは人間っぽいけど人間じゃないわね」

桜の花びらの舞い散る白玉楼の庭。そこでは霊夢と、この白玉楼に仕える魂魄 妖夢が対峙していた。

長い階段の上では桜の木が立ち並び、一本の道となっている。

「貴女の持ってきたなけなしの春。全て幽々子様のために奪わせて貰う！」

「じゃあ、立てなくなるまで遊んであげる」

霊夢の言葉を合図に、両者の弾幕が交差した。

「……まさか、こんな弱点があったとは」

勇輝は長い階段を一段一段、踏み締めながら上を目指していた。

勇輝の飛行方法。霊力のコントロールで浮いた後に霊力の翼を動かした風圧で移動する。というもののだが、場所が悪かった。

斜め上方向に移動するのは思ったより難しい。

少しの距離なら良かったのだが、こつも長いとボロが出てしまうのだ。

さつき、思い切り階段に突っ込んだ。

決めた、ここではもう飛ばない。足があるのだから歩いて上る。

赤くなった額を押さえながら、勇輝は階段を上り続ける。

「くっ……！」

妖夢が刀を振るい、霊夢の弾を両断する。

劣勢にはなっていないが、攻勢には出ていなかった。

妖夢の役割は、この白玉楼の庭師兼、主人である西行寺幽々子の護衛。

何が言いたいかというと、攻めた事が殆ど無い。

そして、相手はあの霊夢、しかも勇輝の時のように手加減をしている訳では無く全力で妖夢を潰そうとしている。このまま消耗戦が続くのはちよつとした事情で避けたい妖夢。

「……………ちっ」

霊夢が舌打ちをする。

攻め手であるというのに、全くと言っていい程に決定打が入らない。

そして、刀を使う相手と戦うのも初めての経験でありその戦闘スタイルが見えないのだ。

間を開けず。余裕を与えず。その圧倒的な数の弾幕で妖夢を撃ち続ける。

妖夢は二本の刀で霊夢の放った弾を切り裂いて行く。

両者が攻めに、守りに持てる力全てを使い攻防を繰り返していた。

だが、勘違いしてはいけない。

攻める側、守る側。いくら拮抗してようと有利なのは攻めている方なのだ。

この勝負に制限時間が、ハンデが、何か特別なルールがあったのなら守る側が有利になっていたのかもしれない。だが、これは正真正正

銘の決闘。

どちらかが諦めるまで、どちらかが倒れるまで、どちらかが死ぬまで続く真剣勝負。

そして、現実というものは非情である。

霊夢の放った弾幕。それは妖夢には当たっていないが地面や桜の木に被弾している。

当然、地面に当たれば道が砕け爆風が上がる。木に当たれば花は散り、その幹には抉られたような傷がつく。

たった数枚。重さ十グラムにも満たない桜の花びらが妖夢の視界を遮ってしまった。

「っ！？」

霊夢の弾幕が妖夢の小さく軽い体を弾き飛ばす。

「くっ……」

刀を地面に突き刺し妖夢は踏み留まる。

「獄界剣『二百由旬の一閃』！」

妖夢がスペルカードを使う。

だが……。

「…………ふう」

霊夢は通常の弾幕で妖夢のスペルカードの弾幕を吹き飛ばした。

「興が冷めるわね。これなら勇輝さんのが強かったんじゃないかしら」

妖夢の刀を持つ手は無意識の内に震えていた。

其の伍拾巻

「この程度で異変を起こすなんて思い上がりも甚だしいわね。何が目的だったの？」

膝をつき、刀で体を支える妖夢を霊夢は空中から見下ろす。

「私は、幽々子様の願いを叶えるよう努力するだけ……。それ以外の目的なんて持ち合わせていないっ！」

妖夢が己の刀、楼観剣を構え直し、霊夢を睨みつける。

「ハア……主犯じゃないなら引っ込んでいて欲しいんだけどね」

霊夢は溜息を吐くが、その次の瞬間から放たれる弾幕は加減など一切無い。

妖夢は長刀で弾を切り裂き、弾の間を縫うように霊夢へと向かう。

刀を振るうなら足場が有った方がいいのは百も承知。だが、霊夢が飛んでいる以上は妖夢も飛び上がる事が必要となる。

しかし、霊夢がそれを許す事は無いし、そこまで妖夢は無謀でもなかった。

妖夢にできるのは倒されないギリギリの所で踏み留まり、霊夢が諦めるのを待つことだけ。

妖夢は目の前に迫った弾幕を大きく避け、後ろに下がる。

霊夢は鬱陶しいという表情になるが、攻め手を緩める事も更に強める事もしない。

そんな時、妖夢は霊夢の後ろの階段から現れた人物に気付く。

「え、どういう状況？」

勇輝は上がって直ぐの場所で何故かボロボロの白衣を纏って呟く。

「勇輝さん、そいつの相手お願いね」

妖夢の意識が勇輝に向いたことによって、その隙に霊夢は白玉楼へと飛び去る。

「……………は？」

ポカンとした表情で勇輝は回りを見渡し状況を確認する。

倒れる木々、割れた地面、刀を持つ殺気立った少女。

成る程、霊夢が暴れた後だ。

「まさか仲間が来るとは思いませんでした。それに、その格好を見る限り相当激しい戦いを越えてきたようですね」

霊夢が去った事に少し安心した妖夢が刀を鞘に戻しながら勇輝に話しかける。

「激しいって言えば激しいんだけど……………うん」

調子に乗ってジャンプしながら階段を上っていた時に転けた時の傷だと言っているのだろうか……。

まさか使い魔的な存在がいるとは思っていなかった。いきなり攻撃されて何段転げ落ちただろうか。

「ここより先に、これ以上誰かを通す訳にはいきません。大人しく去るか……」

妖夢が刀の一振りに手を掛ける。

「ここで倒されるか!!」

ダンツと地面を蹴る音と共に妖夢が接近してくる。

その速さは素人には到底反応できない程。だが、レミリア並の身体能力を持つ今の勇輝にはそれを避けることは不可能でもない。

タンツと軽い音と共に勇輝は後ろに飛び退く。

「……………あつ」

階段の方へ。

目の前は刀、後ろは嫌になる程に転がった階段。

妖夢もこの行動は予想外だったようで目を丸くしている。

まあ、前後左右が駄目なら。

「飛べば良いだけか」

霊力の翼を作り、それを大きく羽ばたかせる。

「っ！？ 成る程、思っていたよりずっと強いみたいですね……」

霊力の翼を見て、妖夢は勇輝に対する認識を改める。

感じ取ったのは膨大な霊力。それを実体を持つ形に仕上げ扱いこなしている。

「過大評価をありがとう。先に進んだ巫女と比べたら蟻とゾウぐらの差があるけどな」

「……ゾウ？」

「あ、知らないのか。じゃあトカゲと竜ぐらの差が……」

「それってもう人間じゃないですよね……」

「……恐くて言えるかよ」

「所で貴方はここに何の用があつて来たんですか？」

「えーと、暇潰し」

「生きた人間が、冥界で？」

「冥界だったのか。……いよいよ幻想郷が何なのか分からなくなっ

てきた」

「暇なら地上で漬して貰えませんか？」

「冬に家でゆっくりしていたら飽きるだろ？」

「……貴方も邪魔をするんですね」

「お前等が迷惑をかけてるんだろ？」

「それでも、私は幽々子様のために西行妖を満開にする」

「……なら、力づくで止めさせて貰うしかないな」

妖夢が抜刀し、勇輝はその手に霊力の槍を作り出した。

「アンタが今回の異変の主犯でいいのよね？」

「あら？ 妖夢は負けてしまったのね……」

「あのままやってたら勝ったけど、今は他の人が相手をしているわ」

「そう……。それで、貴女はどうして異変を解決しようとするのかしら？」

「迷惑だからに決まってるじゃない」

「相手の事情も知らず、考えずに？」

「必要ないわ。人に迷惑をかけてまでやる事に口クな事はないですよ」

「そうね。そうかもしれない……。だけど、これは私にとって重要な事。妖夢のおかげで西行妖が咲くまであと少し、そしたら下の骸が誰のものかもはっきりする」

「……それに何の意味があるのよ」

「失った記憶と、自分の末路」

幽々子は扇子を開き、口元に当ててから続ける。

「この冥界には、地上から来た物が二つだけある。白玉楼と、西行妖。……白玉楼は生前に私が住んでいた屋敷。だけど西行妖は何故ここに持つて来られたのか分からない。もしかしたら、失われた私の記憶に関係しているのかもしれない」

「だから何？ そんな事がどうしたっていつのよ」

「自分の記憶が無いって、意外と惨酷な事なのよ？ 家族がいたのか、どういう暮らしをしていたのか、何故死んでしまったのか……。私は、それが知りたい」

「……だとしても、私は博麗の巫女としてこの異変を解決する」

まだ花のついていない西行妖が風もないのにザワザワと揺れる。

「どうしても邪魔をするというなら」

「どうしても異変を止めない気なら」

両者が構え、戦闘の姿勢に入った。

「花の下で眠るがいいわ、紅白の蝶！」

「花の下に還るがいいわ、春の亡霊！」

其の伍拾巻（後書き）

最後の台詞は東方妖々夢より抜粋。こつこつ展開ってテンションが上がります。

其の伍拾貳

ガキイインと、金属同士が強くぶつかりあう音が白玉楼へと向かう道に響く。

「凄いですね、この刀で切れない所か形がぶれもしないなんて……」

「放出と凝縮を繰り返してるだけで実際は削り取られてるけどな」

ギチギチと音を立てながら槍と刀が擦れる。

だが、勇輝にとってそれは全く意味を成さない。

勇輝の持つ霊力の槍から、妖夢に向かって棘のようなものが飛び出る。

咄嗟に飛び退いた妖夢だったが、その白い髪が数本だけ舞う。

「……決まった形が無い武器。厄介ですね」

「反応出来たお前も達人クラスだと思うぞ？」

槍が霧散し、次に握られたのは双剣。

「スペルカードで戦うのが普通らしいけど、お前はこっち（近接戦闘）の方が向いてるみたいだな。手加減って訳じゃないけど合わせてるよ」

寧ろ、弾幕よりもこっちのが分かりやすい。

ちよつと弾幕に追い詰められるのとはまた違った恐怖があるが、我慢できない程ではない。

「（あれ、この人って良い人……？）」

妖夢は妖夢でズレた思考をしているが、両者やる事は変わらない。

「さて、特定の武器が無いのは申し訳ないけど、少しお付き合いして貰いますか」

「……………」

勇輝の軽口に、妖夢は無言で刀を構える。

「ほいつと」

「っ！？」

先に仕掛けたのは勇輝。

その、本来手数で相手を翻弄するためにあるであろう双剣の一本を妖夢に向かって投擲。

しかし問題無い。勇輝の武器には限りが無いのだから。

妖夢は飛んで来た短剣を刀で弾く。

霊力で作られた武器故に、役割を終え短剣は霧散し消えた。しかし、もう一本が妖夢の眼前まで迫る。

同じ軌道で顔に向かって投げられた事で出来た死角に飛ぶ短剣を、妖夢は体を捻り、姿勢を低くしながらもう一本の刀を抜刀し叩き落す。

「ん？ 何で避けなかった？」

「貴方の武器、弾幕としても使えそうでしたし、何よりここまで器用に靈力を操る人が飛ばした靈力を後から操れないとも限りませんから」

「へえ……」

なら、数で勝負を仕掛けよう。

勇輝の周囲に十、二十と短剣が生み出され、それが一斉に妖夢へと襲い掛かる。

妖夢は二本の刀を器用に使い、全ての短剣を叩き落とし、弾き飛ばす。

「無駄です。その程度では私に致命傷を与える事は到底出来ません」

「みたいだな。つか、大ケガはさせる気ないんだよね……どうせ靈夢が終わらせるだろうし、それまでお前があっちの援軍に行かないようにしておけばそれで十分そうだ」

「随分とお仲間を信用しているんですね」

「いや、アイツより強い生命体が存在するって信じられないだけだ」

聞かれたら何をされるか分かったものではないが、実際そうなのだから仕方ない。

「……………」

妖夢にも思う所があるのか黙りこんでいた。

「あまり険悪な雰囲気で戦うのも好きじゃないし、自己紹介でもしておこうか」

一度武器を消し、体から力を抜いて戦う姿勢を崩した事をアピールする。

「俺は桜井 勇輝。人里で医者をしている」

「……魂魄 妖夢、です」

何のつもりか分からない。という表情をしながらも妖夢は名乗る。

勇輝としてはちょっとした暗示をかけたただけなので相手が名乗りさえすれば良かった。

名前も知らない奴が死んでも気にならないが、少しでも認識のある人間を殺すのには恨みでも無い限り戸惑いが生まれる。

と、普通の人間なら少しは効いてくれるのだが……。まあ、なるようになるだろう。

「じゃあ、仕切り直しといこうか」

「残念ですが、もう貴方は負けていますよ」

「は？」

間の抜けた声を出したと共に、勇輝は体に違和感を感じる。まるで何かに締め付けられているような……。

「何だ、この白い餅みたいなの？」

「私は半人半霊、人と幽霊のハーフなんです。その子は私の半身でありながら巫女の弾幕にビビッて逃げていた薄情者の半霊ですよ」

「……苦労してるな」

何というか、苦労人から漂うオーラを感じる。

「そう思うならこれ以上問題を起こさないで欲しいです」

「問題を起こしたのはそっちだろ」

「と、とにかくこれで動きは封じました！ 降参するなら今の内ですよー！」

「とは言われてもな……」

腕が使えないだけで足も霊力も使える。

霊力で棒を作り出し、それで半霊を突く。すると半霊は慌てて妖夢の方へと逃げて行った。

「なっ、何してるんですか！？　これじゃあ私の正体がバレただけじゃないですか！」

妖夢が半霊に怒鳴っているのを見て、やはり苦勞していると勇輝は再認識する。

白玉楼の前庭では激しい弾幕合戦が繰り広げられていた。

幽々子の霊力や身体能力はレミリアには劣るが、それでも特徴的な弾幕によって現在にはほぼ互角の勝負をしていた。

「亡舞『生者必滅の理　- 死蝶 -』」

幽々子がスペルカードを使う。

霊夢はそれを時には避け、時には自分の霊力弾をぶつけ相殺する。

「霊符『夢想封印　散』！」

霊夢も仕返しのようにスペルカードを使った。

霊夢の弾幕は幽々子の弾幕を飲み込むように拡散し、そのいくつかが幽々子を襲った。

「くっ……」

幽々子は目の前に迫った弾を自分の霊力をぶつけて相殺。

ここまでに使ったスペルカードは霊夢が三枚、幽々子が五枚。被弾はお互いに無し。

どこかの医者モドキのように暇さえあればスペルカードを考えるような事をしていない彼女たちのスペルカードの総数は十数枚。このままいけばルール上、幽々子の敗北となる。

幽々子は焦りながら、次のスペルカードを取り出した。

其の伍拾参

再び桜並木の道では金属がぶつかりあう音が響いていた。

「はっ！！」

妖夢が刀を横風ぎに一閃する。

それを勇輝は屈んで避けると左手に靈力の塊を作り出し、それを妖夢にぶつけようと腕を伸ばす。

妖夢は体勢を崩しながらも後ろに飛び、勇輝に時間を与えず踏み込み、斬りかかる。

それを勇輝は右手に持つ剣で受け止め、左手には新たに槍を作り出す。

妖夢はもう一振りの刀を抜き、即座に月を放つが勇輝は体を回転させてそれを避け、そのまま槍で妖夢を突く。

妖夢は半霊で槍の軌道を変え、それをやり過ごした。

一進一退の攻防。時間にして数秒だが二人はその何倍にも感じていた。

勇輝に殺す気は無いが、当たれば間違いなく戦闘不能になる一撃をお互いが繰り出している。

妖夢も接近戦を維持しようと、必死で食らいつくような猛攻を続け

る。

このままでは埒が明かない。

そう思い、勇輝は妖夢との間に分厚い巨大な霊力の壁を作り出す。

妖夢は咄嗟に反応し、後ろに下がって刀を構え直す。

勇輝は白衣のポケットから一枚の紙を取り出し、溜め息を吐きながら。

「どうも普通に戦ってたら進展が無いみたいだから、急遽スペルカード戦に切り替えさせて貰うな」

その言葉に、妖夢もスペルカードを取り出し警戒を強める。

「行くぞ……。映符『禁忌 レーヴァテイン』！」

「……え」

何処かで吸血鬼が使っていたようなスペルカードと同じようなスペルを使った勇輝。

妖夢は妖夢で弾幕と思っていたのに巨大な紅い大剣を振り被られて固まってしまう。

月に一度の頻度でフランと弾幕ごっこをしていたせいで完成してしまったスペルカードの一枚。

名前の通り、人のスペルカードを真似たスペルカード。正直反感が

色々な所から来そうだがこの際気にしない。

勿論、こんな大胆なスペルカードは性に合わないのでフランが使った時より威力は劣るのだがやっぱり世間一般から見たら泣きたくない恐ろしいスペルカード。

伊達に紅魔館に通っている訳では無いのだ。

まずは妖夢に向かってレーヴァティンを思い切り振り降ろす。

妖夢は避けるが、地面は砕けレーヴァティンが五十センチ程埋まる。

やっぱり人のスペルカードは加減が分かり辛い。

それに、フランが振り降ろしていたら地面が熔けていた筈だ。

「な、何がスペルカード戦ですか！ 思いっきり剣を振り降ろしてるじゃないですか！」

「いや、これは俺のスペルカードじゃ無いし。それに槍を使う奴だっているんだからそいつ等に文句言ってくれよ」

最初に見た時は少し間違えば致命傷だったからなー、と少し昔の事を思い返し、レーヴァティンを振り回す。

妖夢は不条理だ、こんなのおかしい。という表情になりながらもレーヴァティンを避ける。

追い打ちに弾幕も放っているのだが、それも当たらなかった。

「そつちがその気なら……。人鬼『未来永劫斬』！」

一瞬、妖夢の姿がぶれる様に見えたと思えばレーヴァテインが碎け、辺りの弾幕が掻き消されていた。

「……おい、お前も十分規格外じゃねーか」

僅かに見えた抜刀術による風の斬撃。

勇輝の頬を血が濡らす。少し切れていたようだ。

「被弾一、ですね」

「いや、弾じゃねーだろ」

「これが私のスペルカードですから」

まあ、弾幕に決められた形など無いので良いのだろう。そもそもこの勝負に被弾数は関係ない。

それに、一度使ったスペルカードを同じ戦いで使用するのには御法度だ。あのスペルカードが出て来ないなら楽なものだろう。

「医療『キープアウトルーム』」

仕切り直し、と言った感じに次のスペルカードを使う。

テープのような、包帯のような形に整えられた霊力が辺り一帯の桜の木に絡みつき妖夢の動きを制限する。

「こんな物ならっ！」

妖夢が刀で霊力のテープを切ろうとする。

テープは簡単に切れた、しかしその新たなテープが飛び交い妖夢の行動範囲が更に狭くなっていく。

「こんな事ならさっきのスペルカードを残しておけば良かった。か？」

後ろからした声に妖夢が振り向いた。

勇輝は振り向いた妖夢を押し倒し、動けないように組み伏せ喉元に霊力の短剣を突き付けた。

「まだ戦う気はあるか？」

妖夢は悔しそうな表情をするが、目を閉じて一言。

「……私の、負けです」

妖夢が負けを認めると、辺り一帯に張り巡らされていたテープは霧散した。

「んじゃ、奥で戦ってる霊夢と犯人を見に行くか」

妖夢の上から退き、手を差し出す。

「……変な人ですね。さっきまで戦っていたのに」

妖夢もその手をとって立ち上がる。

白玉楼の前庭。

そこでは未だ霊夢と幽々子が激戦を繰り広げていたが、押しているのはいるのは幽々子だった。

「どうしたの？ 何やら疲れが出ているようだけれど」

「別に、アンタを倒した後に休むからお構いなく」

霊夢の霊力は桁外れの量だが、無限ではない。

先日からレティ・ホワイトロック、橙、勇輝、咲夜、リリーホワイ
ト、少しだけ妖夢。その他妖精等との戦いの後、幽々子との戦いに
挑んでいる。

紅霧異変の時は魔理沙がルーミア、チルノ、小悪魔、パチュリー、
勇輝を。霊夢が美鈴、咲夜、レミリア、フランを撃破している。ま
た、美鈴は二人で同時に撃破していた。

そして不眠。

中でも勇輝との戦闘では犯人だと思っていた節があり、大量の霊力
を消費している。

「博麗の巫女を、ナメんじゃないわよ！」

霊夢がスペルカードを使う。これが最後の攻撃だと残った霊力の殆どを使つて。

「っ！？ まだそんな余力が」

霊夢の弾幕が幽々子の弾幕を消し去り、幽々子を襲う。

幽々子は己の弾幕で相殺しようとしたが、幽々子の霊力も然程残っていないかった。

「負けっ……」

そして、勝敗が決した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2112v/>

東方医療録

2011年10月29日19時07分発行